

【無職転生】ミリシオン
出張記～姫ものがたり
～

麓63

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖なる都市ミリシオンに地下迷宮がつ?!
……という、決戦後ひと息ついた頃
のミリシオン出張任務話。完結しました。可憐なお姫様とオタサー姫と男の姫、剣王や
ちょこつと龍神も。

ネタばれのおそれ有り、WEB・書籍既読の方向け。挿絵はできるだけ。

※ pixivにも同一作品有り

目次

ミリシオン出張記／姫ものがたり／6	77
ミリシオン出張記／姫ものがたり／8	93
ミリシオン出張記／姫ものがたり／1	1
ミリシオン出張記／姫ものがたり／2	14
ミリシオン出張記／姫ものがたり／3	26
ミリシオン出張記／姫ものがたり／4	38
ミリシオン出張記／姫ものがたり／5	53
ミリシオン出張記／姫ものがたり／6	67
ミリシオン出張記／姫ものがたり／7	124
ミリシオン出張記／姫ものがたり／8	140
ミリシオン出張記／姫ものがたり／9	108
ミリシオン出張記／姫ものがたり／10	124
ミリシオン出張記／姫ものがたり／11	140
ミリシオン出張記／姫ものがたり／12	155

ミリシオン出張記／姫ものがたり／20

ミリシオン出張記／姫ものがたり／14

186

ミリシオン出張記／姫ものがたり／15

202

ミリシオン出張記／姫ものがたり／16

217

ミリシオン出張記／姫ものがたり／17

232

ミリシオン出張記／姫ものがたり／18

244

ミリシオン出張記／姫ものがたり／19

259

272

ミリシオン出張記／姫ものがたり／1

—1—

プロローグ

?

ヒラヒラのドレスに身を包んだ、可愛らしい女の子がふたり。ひとりは、その場でクルクル回つては、柔らかなオレンジ色の裾を花びらのように揺らしてご機嫌だ。

もうひとりは、"着てやつたが、なにか?" という顔で突つ立つてている。この子のドレスは冬の日の空のような淡い水色で。

さすがはシルフィの見立てだ。

そして俺は、そんな娘たちの姿に鼻の下が伸びっぱなしなのである。

「アルス、お姉ちゃんたち可愛いなあ」

3歳の長男に同意を求める、「うーん……」と煮え切らない。

一体なにを悩むというのだ。花の妖精のようじやないか。汚れなき天使じやないか。「やつぱり、アイシャ姉が可愛い」

「いや～ん、アルス君も可愛いよ～」

アルスは赤ん坊のころからアイシャに、とりわけアイシャの胸にそれはそれは懷いていた。

こいつは巨乳派だ。パウロの遺伝子が色濃く発現したのだろう。
いや、ちょっと待て！

アルスの半分はボレアスの血。

巨乳のノトスとケモ耳のボレアス、グレイラツト家のサラブレッドだ。

まさか将来、リニア・ブルセナと結婚するとか言い出さないよな？

それと、ギーヌはやめときなさい。パウロのお手付きだから。

……パパ、なんだか怖くなってきたぞ。

ちなみに俺も巨乳は大好きだが、慎ましやかなものもまた大好物だ。

みんな違つて、みんないい。手触りも味わいも（R指定）、それぞれの良さがある。
おっぱい仙人から免許皆伝を授かつた俺をナメないでほしい。むしろ、ナメるのは俺
のほうの仕事で……エヘン、オホン。

ジークはどうなんだろうなあ。

午後の光が差し込む暖かなリビングの片隅、ベビーベッドでスヤスヤお昼寝中の次
男。

この子の場合は、グレイラット家の呪われた血も比較的薄まっているはずだ。
シルフィのおっぱいで育つということは、微乳派か……？

微乳は失礼だな。びにゅう……そうだ、美乳のほうだ。

手のひらにスッポリ包まれる絶妙なサイズと形が

……今はおっぱいの話はどうでもいいか。

晴れ着姿の愛娘。

ルーシーとララを囲むように、家族がそろつた賑やかなこの部屋は、俺の幸せそのものと言つていい。

この空気を深く吸い込み、柔らかな光景を目に焼き付けながら、みんなの笑顔を守りたいと願うばかりだ。

?

今のところヒトガミに目立つた動きはない。

戦いの果てに、北神カールマンⅢ世アレキサンダー・ライバック（仰々しい呼称だな）
という実に頼もしい味方もできた。

気持ちはもちろん、ちよつと余裕ができるよう感じた今日このごろ。
ビヘイリル王国での決戦時は、俺はもちろん、3人の妻、ついにはノルンやアイシャ

まで家を空けることとなつた。

子どもたちは寂しさ、心細さに耐え、涙をこらえて送り出してくれたのだという。

後日、留守を守るルーシーの健気な様子をノルンから聞いて、俺は胸えぐられる思いがしたのだ。

ただでさえ第一子というのは、いろいろと我慢を強いられることが多い。

自分がしつかりしなきやと、つい頑張りすぎてしまったりもする。

グレイラットとしての俺は、妹と離れていた期間も長いので大したことはなかつたが、前世での兄きや周囲の人間を見ていてつくづくそう思う。

ルーシーはひたむきな子だから、なおさら気になつてゐる。

俺は思つた。

彼女のために、なにかしてやりたい。

ルーシーを喜ばせたい。心からの笑顔が見たい。

ルーシーの好きなものって、なんだつけ？

3人のママたち、おばあちゃん、ノルンにアイシヤ、もちろん妹と弟。パ……パパも、きつとこの桦でいい、よな？

ああ、それからレオやジローのことも可愛がつてゐる。

よちよち歩きの頃、手放さない毛布があつた。寝る前に読んでほしがつたお氣に入り

の絵本。

えーと、それから……

それから??

考えを巡らすうちに愕然とした。

もうじき7歳になろうとするルーシーが、今一番どんなことを喜ぶのか。
見当がつかなかつたのだ。

俺は子どもたちのことを、どれくらい理解できているのだろう。

ここ1年ほどの俺は、たまに自宅に戻つても、頭の中は対ヒトガミ戦でいっぱいだつ
た。

もちろん子どもたちの存在は大きな癒しで、心の支えだつたのは間違いない。

だが、じつくり寄り添うことができていなかつたのも、また事実。

日々成長する子どもたちは、ものの数か月で変化を見せる。

できることが増え、興味の対象もどんどん変わつていつただろう。

おのれの所業を振り返つてひとしきり青ざめたあと、なんとか気を取り直して妻たち
に尋ねた。

「最近は、お姫様ごっこがブームみたいだよ」

「ああ、この前つる草で冠を作つてあげたら喜ばれましたね」

「王子様役を言いつけられたわ！」

忙しいのはお互い様だつたはずなのに、彼女たちはきちんと子どもと向き合えていたようだ。

これが噂の、一点集中型の男性脳とマルチタスクの女性脳の違いなのか。
いやいや、脳ミソのせいにすべきではないだろう。

俺のせいだ。反省しなければなるまい。

“お姫様ごっこ”が好きだと言うのなら……

俺のちよつと残念な脳ミソがはじき出したのは、ドレスをプレゼントすること。
我ながら安直だと思うし、“モノより思い出”そんな言葉が頭をよぎらないでもなかつたが。

来春には魔法大学への入学も控えているルーシーに、その祝いも兼ねて、早速アスラからドレスを取り寄せた。

それもありエル御用達の店……つまり、本物のお姫様のドレスというわけだ。
ルーシーだけっていうのもなんなので、ララの5歳の誕生日用のドレスと、一緒に息子たちの服も用意してみた。

アルスは興味無さげな「ふーん」のひと言で終わつたし、ジークに至つてはまだろくに喋れもしない赤ん坊だ。

まあ、男の服はもののついでに過ぎないのだが。

?

「ねえ、わたし、おひめさまみたい?」

ほんのり上気した顔ではしゃぐルーシーが無邪気に笑う。
これだ!

俺はこの笑顔が見たかったのだ。

ルーシーに対する罪の意識のようなモヤモヤも、天使の笑顔で浄化され、昇天して消えた。

「ああ、もちろんだ。お姫様みたいだ。

いや、みたいじゃない。お姫様だよ。ルーシーもララも、パパの大切なお姫様だ!」

感極まつて抱きしめようとしたら、ルーシーはキヤーッと声をあげて俺の腕をすり抜け、エリスの後ろに逃げ込んだ。

予想外の動きに、空振りの腕クロス状態で固まる俺。

妻たちも反応に困ったのか、ほんの一瞬、場がシンと静まつた。
……いかん。

ここは、"捕まえちゃうぞ!"とか言いつつ、おどけて追いかけるべきだつたんじや

ないか？

ルーシーだつて本氣で嫌がつたわけじやないはずだ。たぶん、だけれど。

ただ、俺が腕つ節でかなわないエリスを防波堤にするつてことは……いやいや、考えすぎだ。

きつと、ちょっとふざけてみただけなんだ。

ところが一度フリーズした空気は、今さら笑い飛ばすことを許さない。
完全にタイミングを逃してしまつた。
ど、どうしよう。

「ほら、パパ」

トコトコと近寄つてきたララが、俺の目の前で「ん？」と両腕を上げた。
間違いない。“苦しゆうない、抱っこを許す”という体勢だ。

「ララ～！」

よし！ 父娘のほのぼのシーンの仕切り直しだ。

俺はララの身体を高く抱きあげ、さつきのルーシーのようにクルクル回つた。

水色のドレスの裾がフンワリ広がる。

ララの口元がニンマリと緩むのが見えた。いや～可愛いな～。

……うん、満足だ。

堪能した俺は、ゆっくりとララを下ろす。

その時、エリスの脚の間から半分身を乗りだしているルーシーと目が合った。

「ルーシーも、おいで」

両膝を床に付いて腕を広げると、エリスに背を押されオズオズと近付いてきた。

俺はルーシーを抱きしめた。

シルフィイと同じ、いい匂いのする小さな身体。

この子が物心つくころから、俺はオルステッドの配下として動きはじめた。

俺にとつての戦いの日々は忙しくも充実したものだったが、この子もまた同じだけの年月頑張ってきたのだ。

「いつも頑張っていなくてもいいんだよ。時にはワガママ言つてもいいんだよ。

妹や弟がいるお姉ちゃんかもしれないけれど、お前はまだまだ小さな女の子だ。

いや、たとえルーシーが大人になつたつて、パパにとつて大切なお姫様なのは変わりない

抱きしめる腕にもう少し力を込める。

「寂しい思いをさせちゃつてごめんね。

これからは、一緒に過ごせる時間も増えると思うから」

ドレス姿のルーシーの身体を、ララと同じく腕を伸ばして持ちあげた。

その場で俺がくるりと回れば、オレンジ色の裾がフワリと開く。

「パパはルーシーが大好きだよ」

しつかり目を合わせて伝えると、ルーシー姫は、はにかんだ笑顔を見させてくれた。

?

「ルーシー姉とララ姉が おひめさまなら、ぼくは おうじさま?」

それまで黙つて見守っていたアルスが、誰にともなく素朴な疑問を投げかけた。
皆の視線が俺に集まる。

……え?

答えるの、俺か?

「う、うーん……そういうことに、なるのかな?」

“俺の大事な王子様!”とか、抱きしめたらいいんだろうか?

しかし、なんかちよつと違う気がするし、アルスもそんなこと望んでいないだろう。
俺に巨乳は付いてないしな!

「そうですよ。みんな、この家の大切な王子様とお姫様なんです」

ロキシーのナイスフォロロー!

「そうだよね」「決まってるわ!」

シルフィイとエリスも同調してくれて丸く収まつた。めでたし、めでたし。
しかし。

「じゃあ、パパは おうさま？」

せつかくキレイに着地したところに、ララが一石を投じた。
これが実は石ではなくて、爆弾だつたりする。

「「もちろん……」」

笑顔で頷きかけた3人の妻たちが同時に俺を振りかえり、そして揃つて口ごもつた。
なにやら、ビミョーな表情を浮かべている。

ちよつと奥さん、なに？ なんなの？

ここは“もちろん、パパは王様だよ！”って言つてやる場面じやなかつたのか？
「ルディは……王様……つてイメージじゃない、ような……？」
なんだろう……なにかが違う？

シルフィイが首をかしげた。

「ほ、ほら、アレじやないですか？」

まだ若くて、威厳というか貫禄が足らないといふか。

だからむしろ、王子様……？ う、うーん??」

再びフォローを試みたロキシーも、なにか違和感があつたようで歯切れが悪い。

顔を見合わせるふたり。

……シリフィイさんに口キシーさん、なんでそこで悩むかな？
事も無げに言い放つたエリスの言葉が、鶴のひと声となつた。

「ルーデウスは、お姫様よ！」

「あー、なるほど！」

ポンと手を打つシリフィイ。オイオイ、違うでしよう。

「思い出しました。そうです。

ルディは、不死魔王アトーフエラトーフエが認める、れつきとしたお姫様でした」※
コラコラ、ロキシーまでなんちゅうことを！

「えー、なに？ その話、ボク知らないよ」

「ぜひ、聞かせてください」

ノルンまでが身を乗り出す始末だ。

「実はですね……」

勘弁してください……黒歴史なんです、それ。

結局“王様”は、剣王エリスだという結論に落ち着いた。

それはそうなんだろうけどさ。

たしかに、エリスは世間が認める王でしょうよ。

でもさ、なんか違わない？ 家庭内での話をしていたのでは？
子どもたちはキヨトンと俺を見ている。

いや、ララだけは、なんだか知らないがニヤニヤしている。

“大切に守りたい” 対象を “お姫様” と呼ぶのなら、愛しい3人の妻たちもまた、俺
にとつてのお姫様だ。

子どもたちはもちろん、妹たちも、母さんたちだつて。
ん？

ということは、この家はお姫様が群れをなして暮らしているつてわけか。
ルーデウス邸、おそるべし。

ミリシオン出張記～姫ものがたり～2

?

目の前で、北神アレクが呆れている。

「お姫様って、最低でも女人であるはずでしょ？」

ごもつとも。

俺とて、その言葉には頷くしかない。

隣のオルステッドは黙したままギュムツと眉根を寄せた。

最低のお姫様ってなに？……と思わないでもないが、『お姫様』の定義をあげるとするならば、大前提としてそれだ。

そして、若くて未婚。

その上で、王族や貴族、資産家、もしくは『オタサーの姫』のように特定の集団から大切に保護されていることとか。

できれば、ある程度見目麗しいほうが、いろいろ都合がいいかも知れない。

俺の場合は、それら条件全部取つぱらつて、家族から大切にされているということだ。……と、多少の引っかかりはあるものの、前向きに受け止めることにした。

大切にされてるつてんなら、なによりじやないか。

ものごとは考え方次第なのだ、うん。

さらに言うならば、俺が知りたかつたのはそこじやない。

どうして『お姫様』というワードに食いつくかな？

それは本題ではなく、あくまでグチの一部、説明のための寄り道に触れただけに過ぎなかつたはず。

なんでオルステツドの事務所でこんな話題になつてるのかというと、俺が自宅での出来事を話したからで。

ちゃんと仕事はしたよ？ 定例の幹部会だ。

心に小さなトゲが刺さつたまま会議をこなしたところで、フと気が付いた。

ここつて、王様飛び抜かして、神様がふたりもいるじやん？

俺に足りない大物感、にじみ出る威厳のようなものを身に付けるヒントをもらえはしまいか？

とくだん、緊急を要する事案があるわけでもない。

男三人ガン首並べて殺風景に、半ばルーインと化した報告会を終えた。

仏頂面の社長を囲んだ軽やかでも華やかでもない部屋の空気の、ちょっとした潤滑油になるかな、と軽い気持ちで話題にした。

「“威厳”って、どうしたら身に付くものなんでしょうね？」

べつに王位に就こうなどという野望はない。

決して権力を振りかざしたいわけでも、偉ぶりたいわけでもない。

むしろ、そういうものは嫌いなほうだ。

ただ……あの話の流れで、リップサービスとしてさえ『王様だよ』とスンナリ言つてもらえない俺ってなんだろう。

家長として、なかなかに切ない事態ではないか。

俺からの話題提供に、いつもの眉間のシワをもう少し深くした社長が「突然なんだ」と低く言う。

面倒臭いヤツめ、とでも思つてそうな表情だ。

しかし、これくらいで怯む俺じゃない。

配下になつて5年、俺はオルステッドの『機嫌読み取り第一人者と自負している。これに関しては、アレクなどまだ尻が青い。

イケる、と判断して事情を説明した。まあ、別に仕事の報告でもないんで、世間話レベルだつたが。

そして、冒頭の言葉になつたわけだな。

「……お前がアトーフェのところへ行つたのは知つているし、概要の報告も受けたが。

まさか、攫われたお姫様ごっこをしていたとはな」※1

オルステッドが忌々しげに吐き捨てた……よう見えるが、やはり俺にはわかる。アレク同様、呆れて脱力したのだろう。

誤解のないようのことわっておくならば、不死魔王アトーフエラトーフエとの“お姫様ごっこ”のくだりは隠していたわけではない。

あんな茶番に、報告する価値などまったくないのだから。ただそれだけだ。

オルステッドの放つズモモーンとした黒い気配に、アレクが身を震わせた。

北神流の頂点に立つ者として、精神力で呪いの効力を克服すべく日夜奮闘している彼。

それでもヘルメットなしのオルステッドと向き合うのは、なかなか大変なようだ。

……それにしても、ふたりして、なぜお姫様から離れられない？

論点はそこじやねえ！

叫びたくなるのをグッと堪える。

「お祖母様はつねづね“魔王とは、姫を巡つて勇者と闘うものだ”と言つていましたから。

そう聞かされて育つたので、僕も小さい頃は信じてたんですけどね。

でも実際には、囚われの姫なんて滅多なことじやいませんし、ネクロス要塞を目指す

氣骨のある者もめつきり減つて……。

だから、まあ、嬉しくてはしゃいだんだと思いますよ」

「あの女は、一度思い込んだら認識を変えるのは難しかろう。

しかし、ルーデウスが、姫……？」

オルステッドが俺に剣呑な視線を投げかけ……いや、なにかを決めかねて迷つてる感じにも見える。

「む……」

それきり、黙つてしまつた。

まさか“うまい、座布団2枚！”とか考えてんじやないだろうな。

?

(アレク視点)

沈黙を破つたのは、ルーデウスだつた。

「あの……お姫様談義ではなくてですね。

俺に足らない威儀が、家族に認められる程度でいいんで、なんとかならないものかと」
僕としては、彼がなぜそんなものにこだわるのかが理解できない。

自分は自分だ。それでいいじゃないか。

「もつと自信を持つて堂々としていたら、それだけで解決するのでは？」

“俺は、あの北神カールマンⅢ世を下した列強7位だ！”と胸を張るべきです

「いや、無理ですよ。あなた、俺より圧倒的に強いじゃないですか」

ルーデウスが情けなく眉を下げる。

それでも、僕はあの時ルーデウスに破れたのだ。

僕の油断はあつたろう。彼を見くびっていたのが敗因だとしても、それも含めてあの時の自分の実力だ。

ルーデウスが勝者であつたのは厳然たる事実であり、七大列強序列の石板が認めるとおり。

そして肩書きというものは、他人に自分の価値を知らしめるためにある。利用してナンボのものだ。

などと考えていたら矛先が僕に向かって、突然バツサリやられた。

「そもそも、アレクにも威厳などなかろうが」

さすがはオルステッド様、容赦がない。

いつまでもガキっぽさが抜けないと言われつづけてきた。

こう見えて僕は、目の前のルーデウスよりずっと長く生きてきて、そのぶん多く人生経験とやらも積んだはずなのに。

きつと人族の彼とは、1年10年の時間の流れや密度が違うのだろう。

ほんの30年もすれば人生の中盤、円熟味を増してくる人族とは。

「威厳は……ともかくとして、本気のアレクと対峙した時の威圧感は忘れませんよ。

アレクは存在 자체が派手というか、主人公感ハンパないというか。

そんなイメージですね」

主人公感??

なんか不思議な言葉が出てきたし。

眉間が狭まるのが自分でもわかる。

「……誰でも、自分が主人公に決まってるじゃないですか。

僕の人生で、僕以外が中心人物だつたらおかしいでしよう

ルーデウスはまぶしげに僕を見て、

「そういうところがです」と苦笑した。

「俺はきっと、主役のまわりでウロチョロして脇役タイプでしそうね。

もちろん、いつも最善を尽くそうと頑張っているつもりではありますが」

?

(アレク視点)

「脇役……？」

たしかに彼を“ネズミのような奴”と評したことはある。※2

近しくなつて余計に、小心さや用心深さをもどかしく感じる場面も少なくない。さらに言うなら、彼はどこか抜けている。

初めて会つた時の印象は“こんなに危機感なくノホホンとしていて大丈夫か?”だ。しかしながら、だからなのかわからぬが、父さんは彼をたいそう気に入つていたし、大叔父のバーデイ・ガーデイもそうだ。

さらにあのお祖母様がみずから傘下にくだるなんて、ただごとではない。そしてなによりも。

オルステッド様ほどの方が、彼のことを深く信頼しているのだ。

ならば、僕の評価のほうが間違つていたのだろう。

オルステッド様に挑む前の露払いにルーデウス・グレイラットを討とうと決めた時、僕はひと通り調べた。

若くして大国の要人たちと太いパイプを持ち、政治的な影響力も小さくないという。魔術師としては、一部には最強とか最凶とか呼ばれているらしい。

距離を保つたままの戦いでは、大掛かりな魔術を行使するから気をつける、と。

直接刃を交えての強さにばかり気をとられていた当時の僕は、彼の真価を見誤つたけ

れど、世間的にはじゅうぶん実力者と呼んでいいはずだ。

この頃では“龍神の右腕”という二つ名も、かなり広く出回っている。威厳が欲しいなら重々しく振る舞えばいい。

足りないならば、自分の肩書きや功績をかざせばいい。

彼にはそれを見合う力が充分にある。一見頼りなく見えても、腹の底に揺るぎない覚悟を持つている。胆力ってヤツだ。

僕にはルーデウスがなにを気にしているのか、まったく理解できない。

やがて、オルステッド様がため息まじりに言つた。

「あと10年もすれば、多少なりとも重々しさが出てくるだろう。

ルーデウスよ、それまで待て」

?

「ミリス神聖国より通信が入りました」

ノックをしてきたのは、受付のエルフ子ちゃんだ。

ヘルメット未着用、ムキ出し社長の毒気に当たられないよう、俺はいつたん部屋の外に出てから受付まで戻つてメッセージを受け取つた。

ヒトガミ関連では……なさそうな感じだな。

どちらかと言うと、神子ミコさんからの個人的救援依頼っぽい。

部屋に戻つて、オルステッドに通信の写しを手渡した。

——当国にて預かりたる某姫君の処遇について相談したきこと有。

ルーデウス殿を派遣されだし。

ミリス神聖国 記憶の神子――

「お姫様に縁がありますね」と、アレクが横から紙を覗き込んだ。

「明日からでも行つてしましようか。急ぎの案件はなかつたですね。」

お伺いを立てると、オルステッドは紙を持つたまましばらく考えた。

「原因不明の病にかかつた北方小国の姫が、治療のために数年かけてミリスに渡つた、という出来事は聞き知つていて。

これまでの流れでは、友好国に対する特別な計らいとして、秘匿していた治癒や解毒魔術の帝級か、ことによると神級まで施したそうだ。

もつとも、ミリス教団内部は秘密が多い。俺もはつきり事実として確認したわけではないが

「それで、お姫様は治つたんですか?」

「死んだ」

身も蓋もない言葉が返つた。

「もともと移動の旅に耐えられるぐらいだから、慢性的な症状であつて命に別状なかつたはずだ。

そのため、急死はミリス側に落ち度があつたからだと先方が責め立てて、挙げ句に北方大地における神殿騎士団駐屯を拒否する騒ぎに発展していた

「……俺が行つて、どうこうなるようには思えませんね。

ミリスの治癒魔術で治せないものを、どうしろつて」
話を聞いて、思いつきり気が重くなつてしまつた。

あの国が関わると、ただでさえ面倒くさいのに。

その上、国同士の諍い今まで絡んでくる可能性があるのなら、俺にはお手上げだ。
「これだけ歴史が変わつているのだ。

姫君の移動とやらは今回も確認していたが、事情が同じとも限らないだろう。

ミリス神聖国に恩を売つておいて損はない。内容くらいは確かめてくるがいい」
行く必要なしと言つてほしかつたけれど、ご指名を受けた上に社長命令ならば仕方がない。

「わかりました」

ミリスへはエリスに同行を頼もうか。ミコさんも喜ぶし。

クリフに会えるだろうから、ついでにエリナリーゼも連れて行こう。

結局、俺の“威厳”問題は、解決の糸口すら見つからなかつた。

いや、糸口はあつたのか。困つた時の時間薬だ。

でも、10年後つて言つたら、子どもたちが続々と成人していく頃じやないか。

そんなに待てやしない。

そういうえば、俺が小さい頃、パウロがやけに父親の威厳にこだわつてた時期があつたつけ。

ことごとく空振りしていたが。

あれは、ほんとに気の毒なことをした。

今なら、あなたの気持ちが痛いほどわかります。

ごめんね、父さん。

墓参りに行けば、ご利益もらえますか？

ミリシオン出張記～姫ものがたり～3

?

「しばらく遠征任務はないはずだつたのにね」

シルフィイがふくれつ面だ。

“これからは一緒の時間が増えるから”なんて言つたのは昨日だつたか、一昨日だつたか……。

「なんだかほんと、申しわけない」

頭を下げるとき、シルフィイは笑つて隣のルーシーの頭をサラリと撫でた。

「ルディに怒つてるわけじやないよ、仕方ないもん」

「皆さまには悪いですけれど、わたくしは嬉しいですわ」

いっぽう、エリナリーゼはご機嫌だ。クライブとふたりで夕食に招待し、我が家に来てもらつている。

急な話にも関わらず、エリナリーゼはミリス行きをふたつ返事で了承、以降ウツキウキだ。

クリフとの久しぶりの逢瀬だから、テンションが上がるのも無理はない。

「行つてみないとわかりませんが、トンボ返りかもしないし、事情によつては何日もかかるかもしませんよ。」

「大丈夫。冒険者たるもの、臨機応変は得意ですもの。

ライブもすつごく楽しみにしますわ」

わくわくテカテカしているエリナリーゼと、キヨトンと座つているライブ。
まことに微笑ましい姿だが、それよりも俺はルーシーの様子が気がかりでならなかつた。

さつきから、こちらをチラチラしながら、なにか言いたげに落ち着きがない。

ひよつとして „パパの嘘つき！“ とか叫ぶんじゃないか？

それとも „パパ大嫌い！“ か？ そんなん言われたら、絶対死ねるぞ。

恐ろしい予感におののいていると、ついにルーシーが決然と顔を上げた。

「わたし……」

な、なんだ？

「わたしも、」

なに言い出すんだ？

「パパたちといっしょに行きたい！」

……おう。そう来たか。

でも、まあ……良かった。そういうことね。

俺はホッと息をついて、上がつていた肩から力を抜いた。

「そうだなあ、ミリシオンには転移魔法陣も設置済みなんで、移動自体はまつたく問題ない。

ただ、パパと赤ママはお仕事があるんで、ずっと一緒にいられないよ？ 大丈夫かな？」

すると即座に、エリナリーゼが助け舟を出してきた。

「あら、わたくしがおりますわ。それはまつたく問題ないじやありませんか。

可愛いひ孫の世話なら、いくらでも引き受けますわよ。

クライブも、ルーシーがいたほうが楽しいですわよね？」

彼はコクンと頷いた。おませなクライブは、同じ年のララより年上のルーシーと仲がいい。

「そうか……」

俺はうーむと考える。

いつそのこと、クレアさんに会いに、家族みんなを連れていくっていう手もあるが

……

いや、でもやっぱり、ジークがもうちよつと大きくなつてからのほうがいいような気

がする。

天大陸行きは、赤ん坊ひとりに大人4人いて、それなりに大変だつたもんな。※1
母さんと、小さい子ども4人の世話はやつぱり厳しいか……。

しかも今回、先方の事情がほとんどわかつてないし。

面倒な仕事だつたらすぐにシャリーアに帰せばいいけれど、それつて逆にいつでも行
けるつてこともあるよな。

……うん、家族旅行は数年後だ。クレアさんもまだまだ元気でいてくれるだろう。
おや??

氣付けば、みんなが俺のほうをじつと見ている。それも、なにやら緊張の面持ちで。
ルーシーなんて泣きそうだ。

思わずぶりなタイミングで、自分会議してたのはマズかつたかな。

「ああ……ごめん。黙り込んだら心配するよな。

ルーシーのことはオーケーだ。一緒に行こう。

エリナリーゼさん、俺たちで手の回らないところはよろしくお願ひします」

張りつめていた空気が緩み、エリナリーゼがクスリと笑った。

「家長としての威厳がくなんて嘆いていましたけれど、じゅうぶんですわよ。

家族みんなが、ルーデウスの決定を待つてるじゃありませんの」

そうなのか？

ハタから見たら、そんなものなのだろうか。

？

「さつき黙りこんだのは、いつか家族全員でミリシオンに行かなきやなつて、考えてたからなんだ。

クレアさんが、みんなに会いたがつていたしね」

「クレアさんつてだあれ？」と、アルス。

「ゼニスおばあちゃんのお母さん。だから、アルスたちのひいばあちゃんだな。みんなを連れて会いに行くからって、パパが前に約束したんだ」

「ひいばあちゃん？」

子どもたち3人が、俺とエリナリーゼを見比べて不思議そうにしている。

「エリナリーゼさんのほかにも、みんなのひいおじいちゃんたちは、たくさんいるんですよ。

パパと3人のママそれぞれにお父さんお母さんがいますから、みんなのおじいちゃんおばあちゃんは合わせて……8人

ロキシー先生が指を立てて説明してくれる。

「そして8人のおじいちゃんおばあちゃんにも、お父さんお母さんがいて……」
ただ、この先是両手でも足りない。

「こら、アルス。食卓で靴を脱ぐんじゃない。気持ちはわかるけどさ」
俺も小学校の教室で、足指を数えようとして怒られた覚えがある。

男の子は、このアホっぽさが可愛いんだよなあ。

天才の血を引くクライブは、クリフと同じ黒目がちの瞳をキヨロリと上に向け……暗算でもしているのだろう。

同じ男の子でも、やはりアホの子ではないらしい。

と、いうことは、アルスのアホは俺の血のせいだつたのだろうか。

「要するに、ひいおじいさんとひいおばあさんがいっぱいいるのよ！ それでいいじゃない」

エリスらしい言葉に、アルスも納得して頷いた。

確信した。アルスは俺とエリスの合作で間違いない。

ロキシーは苦笑している。

シルフィーの指まで動員して数えていたルーシーが、やがて元気に答えた。

「……合わせて16人！」

おー！ パチパチパチと一同拍手。

クライブも計算と一致したのか、「うん」と満足げだ。

「そのとおりだ。ルーシーは賢いなあ。

たくさんのひいじいちゃんひいばあちゃん、それから、おじいちゃんおばあちゃん……誰かひとり欠けても、今のキミたちはいなかつたんだ。

そう考えると、不思議だよな。

もちろん全員と会えるわけじゃないけれど、大切にしたいよね』

子どもたちが“うん”と頷くのを見届けて、パパのありがたい訓話は終了。サウロスさんが生きていたら、さぞや賑やかだつたろうなあ。

目に入れても痛くないほどだつた孫のエリスの子どもだなんて、ベツタベタに可愛がつたに違いない。

みんなを甘やかしまくつて、大変だつたかもしれない。

?

翌朝、シルフィイがちよつとだけ心配そうちだつた。

それでも、「パパと赤ママ、ひいおばあちゃんの言うことをきちんと聞くんだよ」とルーシをギュッと抱きしめ、明るい笑顔で送り出してくれた。

家族に手を振つて出発。

俺の荷物はほとんど事務所に置いてあるし、他のメンバーも着替えなど荷物は最小限だ。

服は途中で洗濯するか、足りなければ向こうで買つてもいい。ミリスのものは品質がいいから、それもありだろう。

身軽な道行きである。

幼いルーシーとクライブにとつては、自宅から事務所までの道のりもそれなりに遠い。

ふと思いついて、子どもふたりを両肩に乗つけてみた。

魔導鎧を着込んでるから、ご希望とあらば、高速で走つたり、向こうの崖にジャンプしたりのアトラクション・サービスも可能だ。

試しにちよつと跳んでみたら、ルーシーから本気で嫌がられたんで諦めた。
……が、横からキラキラした視線が注がれているのを感じる。

「ルーデウス、次は私ね！」

よしきた、望むところだ！

彼女の仰せのままに、エリスに肩車をして、太ももを……

とか考えかけたところで、思い止まつた。

そのまま股で頸動脈を締められて、落ちる未来が見える。と言うか、それしか見えん

な。

「まことに残念ですが、この乗り物は子ども専用となつてます」
「なによ、ケチ！」

明るいお天道さまの下で、大人専用の乗り物になるのは、さすがの俺でもはばかられる。

しかし、近いうちにきっと“大人の乗り物遊び”をやろうと心に決めた。
軽く言葉を交わしながら、青空の下をのんびり歩く。

これで仕事がなければ……ミリスじやなれば最高だつたんだがなあ。
子どもふたりは高くなつた視界からエリスやエリナリーゼを見下ろしてはしゃいでいる。

いい感じだ。

たまの休日を家族サービスに費やす、前世の世界でのお父さんたちの気持ちがわかるな。

家族が喜べば俺も嬉しいし、日頃子どもにあまり関われないことへの罪悪感も、
ちょっとだけ軽くなる。

問題があるとすれば、頭をつかまれて髪の毛が乱れることぐらいか。
俺の毛は、残念ながら龍聖闘気に守られていないのでひ弱なんだ。いたわってほし

い。

?

エリスとエリナリーゼ、クラブを入り口で待たせて、ルーシーとふたり、手を繋いで事務所に向かう。

「オルステッド様にご挨拶できるね?」

「うん」

「よし、いい子だ」

ノックをし、返事を待つて中に入る。

「失礼します、ルーデウスです」

オルステッドは光の差し込む明るい室内で、朝も早くから書類とにらめっこだ。

「来たか」と紙面から顔を上げたところで、ルーシーがペコンと頭を下げた。

「オルステッドさま、おはようございます」

「……おはよう」

ルーシーに向けられる視線は、俺へのものより柔らかい。なんなら声も若干ながら穏やかだ。

というか、ルーシーのオルステッド耐性はすごくないか?

呪いがなくても普通に怖い顔だぞ？ こんな怖いおじさんはそようそいいないはずだ。俺に対する時の態度のほうが、身構えている感すらある。ちょっとジエラシー。

「連れて行くのか？」あ、社長の顔が通常モードに戻ったよ。

「ええ。エリスとエリナリーゼが同行するので、支障はありません。

長引くようでしたら、先に帰すつもりです」

「ほかは外にいるのだな」

オルステッドがヘルメットを手に取つて、書斎を後にした。

朝の日差しの中、もの珍しそうに動き回つているクライブと、それを見守るふたりの女性。

「エリナリーゼ・ドラゴンロード」

「あら、オルステッド様、良い朝ですわね。

ルー・デウスと一緒に転移魔法陣を使わせていただきますけれど、構いませんかしら？」

「ああ、問題ない」

駆け寄つて朝の挨拶をするクライブに軽くて頷いて返すと、言葉を続けた。

「スペルド族の村ではほんとうに世話になつた。

クリフ・グリモルに、オルステッドが感謝していたと伝えてくれるか」

「わかりましたわ」

「エリス・グレイラット！」

「……なによ」

「向こうでなにがあるかわからん。『お姫様』ふたりを頼んだぞ」

一瞬ポカンとしたエリスだったが、横で頭を抱えた俺の様子に、合点承知とばかりに力強く答えた。

「任せて。大丈夫よ！」

「まあ、お姫様ですって？」

そう見えても無理はありませんけれど、わたくし、もうお姫様つて歳ではないんですね？」

「あー……その話はいいから、出発しますよ。

それでは、オルステッド様、行ってきます！」

と、いうことで、俺は急いで荷物をまとめると、エリナリーゼの背を押しながら地下の転移魔法陣へと降りていったのだつた。

ミリシオン出張記～姫ものがたり～4

？

現在、各地に整備を進めている傭兵团アジトの転移魔法陣。

非常に便利な反面、移動したという実感は薄い。

気持ちの切り替えが難しいレベルで、あっけなくミリス神聖国の首都ミリシオンに到着した。

贅沢な話だとは思うが、ちょっとした旅情のようなものを味わいたい時もあるのも事実。

街を守る七つの塔と高い城壁、ホワイトパレスやそれを囲むグラン湖……これらは遠景からじやないと全体像はつかめない。

昔の俺が感動したように、子どもたちに体験させてやりたかったと思えば残念だ。

今回は仕事できたわけなので、まあ仕方がない。次回に期待つてところか。

迅速対応がモットーだもんな。

今いるのは街の南側に位置する冒險者区の外れのほう、ルード傭兵团のミリス支部となる。

転移魔法陣は地下に設置されており、禁忌のものなので、もちろん極秘扱いだ。かなりの魔力を込めないと起動しないうえ、普段は入念に封印してある。

なにも知らない団員たちにしてみれば、突然現れた会長による事務所視察ということになるだろう。

「ウツス！」「ちわツス！」

上階に登る途中、何人もの団員とすれ違つた。
ミリスという土地柄、メンバーは獣族や長耳族、炭鉱族と実にバラエティーに富んで
いる。人族は少数だ。

アイシャ選定の黒コートに身を包んだ彼らの外見は、ハツキリ言つてガラが悪い。
ああほらほら、ルーシーとライブが怯えてるじやないか。

でもパパは、オルステッドのほうが百倍怖いと思うよ？

「ルーデウス会長！ お役目ご苦労さんツス！」

「本物に会えて、自分、感激ツス！」

緊張をにじませながらも元気よく迎えてもらえて、俺も素直に嬉しい。

支部立ち上げ時に代表者の面接をした時くらいで、実はここに直接の顔見知りはほぼ
いない。

にもかかわらず、なぜ俺を会長だと認識できるのだろうか？

「肖像画がありますからっ！」

「こここの支部長室の壁には、他の拠点と同じく“ルーデウス会長”と銘打つたザノバによる謎のイケメンの肖像画が掛けられている。

ザノバの画風は、印象派というべきかメガネの曇り拭けよというべきか……とにかく……これ見て、よく俺が会長本人だつてわかるのなという微妙な仕上がりだつた。

「髪型が似ているようなので、たぶんそうだろうと判断しましたツス！」

……ああ、なるほどね。

「お世話になつてます。活気があるようで、なによりです。

今回我々は、何日かミリシオンに滞在する予定ですが、ひよつとしたら皆さん的手を借りることがあるかもしれません。

「その時はよろしくお願ひしますね」

「「ウツス!!」と気合のこもつたお返事を各所からいただいた。

いつもながら体育会系だな。

このノリは正直、元ニート引きこもりの俺にはあんまり波長が合わない氣もする。

でも、オルステッド・コーポレーションを支える屋台骨だ。

あるのとのいのとでは、動きやすさが断然違う。

皆さん、いつもありがとうございます。いざという時、頼りにしてます。
というわけで、俺たち一行はルード傭兵団のミリス支部を後にした。

?

(ルーシー視点)

ミリスに行くんだって。

ほんものの おひめさまがパパにきてほしいって。

クライブはお父さんに会えるんだね、よかつた。

うれしそうなエリナひいおばあちゃんとクライブを見ていたら、なんだかうらやましくなった。

へんなの。

わたしはパパといつしょに くらしてるのに。パパは今、目のまえにいるのに。

でも、あしたになつたら またすぐに いなくなつちやうんだろう。

いつしょにいられるよつて、もつとワガママ言つていよいよつて言つたのに。

……あつ、そだ!

ほんとにワガママ言つてみようかな?

そうしたら、パパはどうするかな?

わたしのことの大すきなら、おねがいをかなえてくれるんじやないかしら。
どうしよう……おこつたりしないよね？

ドキドキしちゃう。……いつかいだけ しんこきゅう。

…………ようし！

「わたしも、いつしょに行きたい」

……言つちやつた。

ほんとうは、ワガママ言うほど行きたかつたわけじやないんだ。

とおくにお出かけするのも、よそで おとまりするのも はじめてだし。

よるねるときに おうちにかえりたくなつて、パパや赤ママをこまらせるかもしけない。

でも、おいてけぼりも おるすばんも もうイヤだつたんだもの。

いえを出たあと、オルステッドさまのところから あつというまにミリスについた。
ミリスのようへいだんは、シャリーアのよりも もつと こわいかんじ。

いろんなどうぶつの ジゅうぞく、ものすごく大きい人、せたけとおなじくらい よ
こはばがある人も。

とつてもこわそうな人たちが みんな、パパに会えてうれしいつてニコニコして、大
きなこえで あいさつしてた。

わたしのパパは やっぱりすごいと おもう。

おとまりするところを きめたあと、ひとりで出かけたパパは、くらくなつてからクライブのお父さんと もどってきた。

ミリスのひいおばあちゃんは、ゼニスおばあちゃんのお姉さんのところにお泊りにいつていて おるすなんだつて。

会いに行くのは またこんどになつたらしい。ちょっとざんねん。

しんぱいだつた よるも、パパと赤ママのあいだで ねむつたから へいきだつた。

それで朝おきたら、どうしてかクライブがいつしょのベッドにいた。

となりのおへやで、クライブのお父さんお母さんと ねたはずなのに、なんでここにいるのかな。

「おとのー じじょうだよ」つて、パパも赤ママもわらつてた。なんのことだろう？ よくわからない。

きのうは いっぱいパパと手をつないだ。だっこもしてもらつたし、かたぐるまだつて。

こんなにパパをひとりじめしたのつて、はじめてかもしれない。

いつもは もつとちつちやい子がいるから。わたしはお姉ちやんだから。がまんしてる。

ミリスにいるあいだは、がまんしなくともいいんだ。

でも、ワガママ言つてこまらせるのはもうやめようかなつておもつた。

?

教皇も神子も、巨大なミリス教団の象徴のような人物だ。

今回、教団本部には比較的スムーズに入れてもらえたものの、さすがに即日VIPとの面会は難しかつた。

そつちが呼んだくせに……と思わないでもないが、昨日呼び出して今日シャリーアから着いた俺のほうが異常だ。

普通は、年単位でかかる距離なのだから。

クリフはすぐに来てくれたし、テレーズとも会えたから、まあ良しとしよう。

大人しくアポイントを取つていると、「王族と面会するのにその格好は……」と事務職員が眉をひそめた。

前回はローブ姿で押し切つたけれど、あまりいい顔はされなかつた記憶がある。

俺の正式ユニフォームなんだけどな。

不本意だが、他人からしたら戦闘服か、ひよつとしたら作業服に近いのだろうか。

エリスの剣王様スタイル、さらに言うなら腹やら太ももなんかが露出したあの装束

で、教皇やお姫様にお目通りのご挨拶というのはやめたほうがいいのかもしねない。仕方がない。明日の朝イチで、アスラ王国大使館から衣装を借りることにしよう。困った時のアリエルだのみ。こういう時に大国とのコネは便利だ。

?

「そうしていると、まるでどこかの貴族様みたいですね」

翌朝、俺たちは早速アスラ大使館に出向いた。

俺もエリスも服装にこだわりはない。無難にまとまればそれでいいと思つていて。それを見越してか、単に暇だったのか、エリナリーゼたちが大使館まで付いてきて、衣装選びを手伝つてくれていた。

お姫様ブームまつただ中のルーシーは、大量に吊るされたドレスに朝っぱらから大興奮だ。

クライブはルーシーに付き合つてくれているものの、「きれいなドレスだね」と相槌を打つ顔がハニワになつていて。

「ごめんな、すぐ終わるから頑張つてくれ。

「馬子にも衣装……いえ、違いますかしら。

ふたりとも、まがりなりにも大貴族グレイラット家の血筋ではあるから、しつくりき

て当然かもしませんわね」

俺はともかく、エリスはやんごとなきお育ちだ。

ごくごくたまに着るドレス姿も、大人しくしているぶんにはバツチリとサマになつて
いる。

ただし、今日のエリスの出で立ちは淑女ではなく、凜々しい王子様スタイルだつたり
する。

高い位置でキリリと髪を束ねた美女剣士は、赤胴鈴之助ばかりにカツコいい。いや、た
とえが古すぎるな。

「似合うよ、エリス。惚れなおしそう」

思わず口にすれば、エリスの顔が赤らんだ。照れたようだ。

「あ、ああありがとう……ルーデウスも、その…………普通ね！」

うん、わかつてる。気を使わせて、すまんね。

「赤ママ、ドレスきたらきつとキレイなのに……」

大使館職員が、エリスのためにドレス数着とアクセサリー類を見繕つて持つてきてく

れたのだが、本人はにべもなく拒否。男性用を要求した。

セレモニーに出席するわけでもなし、そこそこ改まつた感じが出れば問題ないだろ
う。

ここにおかしな服はないはずだから、好きにしたらいいと思う。

ショボンとしていたルーシーの顔が、なにかを見つけてぱッと明るくなつた。

視線の先には、アクセサリーの乗つたトレイが。

大ぶりの派手なものから控えめな小さいものまで、ネットクレスやイヤリングが並んでいる。

「好きなの、あつた？　どれだ？」

ルーシーが指差したのは、薄緑色をした小さな石のついた可愛らしいペンダントだった。

職員さんに買い取り可能か確かめて、それをルーシーの首にかけてやる。

ミリスに来た記念だから、ちよとくらい、いいよな……と、自分に言いわけしながら。

大人サイズなので少々長いが、白いワンピースの胸元に品よくおさまつた。

「うん、可愛い。いい感じだ」

控えめな輝きが、清楚なルーシーにピッタリなイメージだ。

「パパ、ありがとう」

ルーシーは小さな肩をすくめるように、それは嬉しそうに笑う。あのドレスを着た時のような笑顔だつた。

あとでシルフィアあたりに、甘やかしすぎだと怒られそうな予感がする。

でも、こんないい笑顔を見られるならば、妻から怒られるくらいは屁の河童だ。
つてか“パパ、あれ買つて”で、なんでもホイホイ買い与えてしまいそうな自分が
ちょっとコワイのも事実だがな。

「では行つてきます。ルーシーのこと、よろしくお願ひします」

「わかりましたわ。みんなでミリシオン見物でもしますわね」

俺はルーシーとクライブの前にしゃがみ込み、それぞれの肩に手を乗せた。

「きれいな町だから、楽しんでおいで。

もし迷子になつたら、近くにいる神殿騎士にパパの名前を教えるんだよ」

ふたりは、しつかりと俺に視線を返して「はい」と返事をくれた。

うん、いい子どもたちだ。

昨日家を出てからずつと甘えん坊だつたルーシーの顔つきが、心なしかお姉さんモードに戻つている。

クライブも年齢以上にしつかりした子だから、これなら大丈夫かな。

心配は心配だけど。

では俺も、龍神の右腕モードになつて頑張つてくるとしよう。

?

教団本部の迷路のような白い通路を抜けた先。

ミリス教皇ハリー・グリモルは、過日と変わらぬ穏やかさをもつて迎えてくれた。

クリフの祖父ということは、クライブのひいじいさんになる。

対面を果たすまでは、もうしばらくかかるのだろうが、元気なうちに名乗りを上げられたらいいのにな。

そんな考えが頭をよぎるくらいに、今回は気持ちにも余裕もあつた。

なんとなくだが、人となりが分かつてきただめだろう。

「ご無沙汰しておりました。げいか貌下おもてにおかれましては、ご機嫌うるわしゅう。

こちらは我が妻、剣王エリス・グレイラットにござります。

以後、お見知りおきください」

胸に手を添えて貴族風の礼をすると、あるはずのないドレスの裾を持ちあげかけたエリスが慌てて俺に倣つた。

「エリス・グレイラットですわ」

「ほう……噂の剣王様ですね。」

聞くところによりますと、教団の神子に剣術の指南をしてくださったとか。

彼女は今も騎士たちに教わりながら、毎日のように木剣を振るつているようですよ

「そうなの、それは良かつたわ……ですわ！」

俺につつかれて語尾を付け加えるエリスに、教皇は温厚な笑みを浮かべる。
伏魔殿のような教団中枢部で頂点まで登りつめ、今なおその地位を保っているくらいだ。

柔軟な雰囲気に騙されて気を抜くと、痛い目を見るのは間違いない。
でもまあ、孫の親友くらいの認識はしてくれているだろうけど。

「この度ミリス神聖国に参りましたのは、ほかでもございません。その神子様に呼ばれ
たためです。

なんでも、ご病気になられた他国の姫君をお預かりなさっているとか」

「ほう、耳がお早い。さらには、遠路はるばる来られたと思えぬほどの迅速さには驚くば
かりです。

さすがは、龍神の右腕と呼ばれるお人だけありますね」

「たまたま近くにおりましたから。幸運でした」

しらじらしいやりとりは、転移魔法陣の存在は大国の上層部にとつて公然の秘密だか
らだ。

「ルーデウス殿にはわざわざお越しいただきましたが、そのことに関して、貴殿のお力を
借りる場面はないと思っているのですよ。

わたくしたちと、神子をはじめとした枢機卿派の人たちとで意見が異なつております

てね。

いわば、内輪での些細な揉めごとにすぎません」

「差し支えない範囲で、ご事情を伺えますか？」

そこでようやく椅子を勧められた。

「先方のラビリア王国は、北方大地における重要な布教拠点でもあるのです。

ミリス神聖国と、敬虔なミリス教徒であられるラビリア王家との繋がりは、もう何代にもわたって続いているらしくしてね。

そこの姫君が5年ほど前から体調を崩され、不安定な状態になつていらつしやすよ。

お国元で手を尽くしても原因が判明せず、こちらまで、治療法を求めてわざわざ旅して来られたというわけです。

そのお気持ちに、わたくしども全力でお応えしなければなりません。

我が国最高の医師団や教団の治癒魔術師たちの見立てでは、神撃魔術が有効だらうといふことでした」

「神撃魔術……ですか」

単なる身体面での病気というわけではなさそうだ。

「ところが神子がその治療に反対し、枢機卿も神子の考えを支持されたため、意見が割れ

ているのです。

姫君はすでに20歳を過ぎられ、現国王陛下も心配しておられるようなので、早く治療を試みたいと考えていてるのでですが」

……それっておそらく、無理にすすめちゃアカンやつだ。

オルステッドは治癒と解毒の魔術と言っていたけれど、情報不足か歴史が変わったか。

どちらにしろ慎重にやらないと、姫君が落命し、国際問題に発展しかねない。

「教皇猊下、私は、類似のケースで患者を死なせてしまつた例を知っています。万が一にでも姫君の身になにかが起これば、ミリス神聖国と北方の国々との関係にひびが入りかねません。

どうか、魔術による治療をいつたん中断して、しばらく私にお預け願えますか?」

ミリシオン出張記／姫ものがたり／5

?

(エリナリーゼ視点)

ルーデウスは良き夫、良き父親だと思いますわ。妻を3人娶るなどと、ミリス教徒が助走をつけてブン殴つてきそうなことをしながらも、家庭は至極円満。

情の深い男性にありがちな、惚れっぽい浮気性かと思えばそうでもなく、エリスのあとは浮いた話ひとつ聞きませんもの。

パウロと違つて、そういう方面には不器用にも感じますわね。さらに相手が増えるだろうと、シルフイは覺悟していたようですけれど、そんなことはならないでしよう。

ルーデウスは問題を抱え込んで、自分ひとりで解決しようとするところがある。

そして、誰かを守らねばならない時に、自分の身を顧みない捨て身の強さを發揮するのだと。

それが怖い、といつかシルフイがわたくしにこぼしていましたわ。

妻たちは同じ思いで、それぞれ自分にできる形で夫を支えているのでしょうか。

家庭では妻の尻に敷かれた夫に見えるし、子どもとの距離に悩む、ちょっと残念な父親にも見えてしますけれど。

夫の強さも弱さもよく理解した上で、余計なことで煩わせないで済むようにと、皆が気を遣つた結果ではないですかしらね。

愛されていますわね、ルードウス！

今回はルーシーに甘すぎ……と思う場面もあるものの、忙しくて構つてやれなかつた父親と素直に甘えられなかつた幼い娘、これくらいでちょうど良いようにも思えますわ。

クリフとクライブにも、ふれあいの機会がもつとあればと感じますけれど、父と息子の場合は少し事情が違うかもしませんわね。

父親が頑張る背中を見せる、というのも立派な教育ですもの。

?

アスラ王国大使館前でルーデウスたちと別れたエリナリーゼは、息子とひ孫を連れてミリス観光に勤しんでいた。

美しい都市だと思うけれども、宗教関連の施設が多いため、子どもには少々退屈かも

しれない。

昼食後は、冒険者ギルドにでも連れて行つてみようかしら。

などと考えながら到着したのは、教団本部にほど近い聖ミリス公園。

礼拝堂や集会所も備えた大きな公園で、散策できる小道や池があるので、子どもが遊ぶにはうつてつけだ。

「お母さん、なんてかいてあるのですか？」

そこには朽ちかけた石造りの建造物があつた。案内板が付けられている。

「ええと……『第一次人魔大戦終結後間もなくミリス教団が立ち上げられ、最初の聖堂がこの地に建造された。その後改修が加えられながら第二次人魔大戦・ラプラス戦役を経て、甲龍暦元年に大聖堂が新設されるまで信仰の中心地となつていた……』

つてウソツ、6千年前ですつて？　すごいですね。よくそんなものが……本物ですかしら？」

祭壇のような建物は角が磨耗し、表面を飾つていたであろうレリーフは、風化して形はほとんどわからない。

「あっ！」

奥のほうで、なにかを覗き込んでいたルーシーが声をあげた。

なにごとかとエリナリーゼが駆け寄ると、ルーシーはすでに半ベソだつた。

「どうしよう……ペンダントが……おちちゃつた」

半分崩れた石壁を上から覗くと、懺悔室を思わせるような狭く区分されたスペース。石壁の出っ張りかなにかに、ペンダントの鎖が引つかかって切れてしまつたのか。

「ちよつとおどきなさい」

床の部分は同じく石で組まれており、経年劣化のせいか歪んで隙間があいている。ちようどそこに落ちたらしい。

残念ながら腕が入るほど広くはないうえに、それなりに深そうだ。

「せつからくパパから もらつたのに……」

泣き出したルーシーの背中を、クライブが困った顔をしながらヨシヨシとなでている。

エリナリーゼの脳裏に、ペンダントを首に掛けてもらつた時のひ孫娘の花咲くような笑顔が浮かんだ。

「ひいおばあちゃんにお任せなさいな。なんたつて、腕っこきの冒険者ですからね！」

この場所から動かないようキツチリ言い付けたあと、クライブにルーシーを託して冒険者区へと走る。

あそこなら必要なものが、あらかた手に入るのだ。

息を切らして最速で戻ると、石垣に腰掛けるふたりの姿があつた。

クライブが一生懸命話しかけ、ルーシーはなんとか泣きやんだようだ。

「なかなかやりますわね、クライブ。さすがはクリフの息子ですわ。

さて、取り掛かりますわよ」

灯りをクライブに持たせ、トリモチを仕掛けた糸を側面にくつつかないように慎重に下ろしていく。

2～3メートルほど伸ばしたところで底についた。思ったよりも深い。
ゆっくり動かすうちに、かすかな金属音がした。

よし！　あとは気をつけて引き上げるだけだ。

糸をソロソロ巻き取つていくと、ペンドントが光を受けてキラリと輝く。
ルーシーとクライブが歓声をあげた。

「あら？　よけいなものも釣れましたわね」

ペンドントと歴史ありげな小石や砂つぶ、そして、銀の指輪がくつ付いていた。

？

「ルーデウス君、来たな。神子様が首を長くして待つておられるよ」

謁見の間の前まで迎えに来ていたテレーズは、俺の後ろのエリスに気付いて笑みを大きくした。

「エリス様！ 今日はまた、いちだんと凜々しいですね」

「ええ。いざという時に動きづらいと困るもの。ドレスより、こつちのほうがいいわ！ でも、剣を取り上げられたのは、ちょっとね」

「本部内では神殿騎士以外は武装解除、魔術も使えないようになつてるんです。お帰りの際にはきちんとお返しできますので、それまでは辛抱してください」

スラリとした立ち姿の男装の麗人と女性騎士、絵になる組み合わせだ。

美女たちと並び立つて調和を乱すこともあるまい。

俺は一步下がり、ミコさんの護衛 アナスタシア・キープ『聖墳墓の守り人』のムサイ面々とひと塊りになる付いていった。

うん、ここなら馴染む。

とはいって、こいつらイヤ／＼な目線を送つてくるよな。以前のことをまだ根に持つているのか。

服装を見ればわかるだろうけど、今日の俺は完全に丸腰だ。

あんたたちも、ミリス神聖国が誇る神殿騎士の最強軍団でしょうに。

もうちよつと器をデカくしないと、ミコさんからモテないんじゃないの？

控えの間に騎士たちを残し、俺たちだけで貴賓室の重厚な扉をくぐる。

広い部屋の中央に天蓋付きのベッドがしつらえてあるが、中は空っぽ。壁際に立っているのは、おそらく姫君付きの侍女たちだろう。窓辺に置かれた小さなテーブルセットに、妙齡の女性がふたり腰掛けていた。お茶の時間だつたらしい。

そのうちのひとりが、すぐに立ち上がつた。

「ルーデウス様っ！ エリス様も！ よくおいでくださいました～!!」

エリス並みの大きな声だ。ただ、その声色はホワンと間延びして柔らかい。「ミコ様……なんか印象が変わられましたね」

女性に外見の話は失礼かもしれないが、うつかり口を突いて出るほど変わっていた。10キロくらい減量した？ つてレベルでシユツとしている。

ミコさんは、キヤハツと声をあげて

「わかりますう？」と頬を染めた。

ああ、そういうところはぜんぜん変わつていませんよね。

バサツ。

どこからともなく大きな銀色のフクロウが飛んできて、ミコさんの肩に乗つかつた。けつこうな重量を受けて一瞬ヨロける彼女を、背中に手添えて支える。

彼女がオルステッドの傘下に入つた際に召喚した、守護魔獣“ナース”。

生意気にも“おかしなマネすんじやねーぞ”つて、まん丸の目で牽制してきやがる。仕事熱心、おおいに結構。だがな、俺はお前の名付け親だぞ。

「エリス様から教わつたとおり、あれからずっと鍛錬を続けているんですよ。

ナースのお散歩も兼ねて、おかげさまで、中庭には毎日出られるようになりました。

それはそうと、エリス様のお姿、すごくカッコいいですわっ！」

大げさに両手を合わせて、キラキラと効果音が聞こえそうな瞳でエリスを見つめるミコさん。

「本日は、お目にかかれて光栄に存じます。なかなか紹介してもらえそうにないので、俺はもうひとり、座っている女性に向かつてひざまずいた。

龍神オルステッドが配下、ルーデウス・グレイラットと申します」

初対面の姫君は、腰ほどの長さでゆるく波打つ赤みがかつた茶色の髪、モスグリーンのビロード地のドレスをまとつてゆつたりと微笑んでいる。

「神子様より伺つておりますわ、ルーデウス様。

まさか、こんなに早くご到着なされるとは思つておりませんでした。なにか不思議な魔術でもお使いになられたのでしょうか？」

「偶然近くに滞在している時に、神子様からのご連絡を受けたんですよ。

お加減が悪いと聞き及んでもりますが、ベッドにおられなくて大丈夫なのですか？」柔らかい笑みを浮かべて、姫君は言葉を続けた。

「ラビリア王国第二王女、ナリス・ロータス・ラビリアでございます。

お心遣い、感謝いたしますわ。でも、体調のほうはご心配いりませんの。
もともと、寝ていて回復するような病ではないのですから」

アリエルのような、ザ・お姫様という華やかなタイプではない。清楚な美人だが、優しげで控えめな雰囲気だ。

それにして、ナリス姫に、聖獣ナース、剣王エリス……ちなみにここはミリス。
なんだかややこしいな。

「あの……お連れの凛々しい方も、ご紹介いただけますか……？」

ほんのり頬を染めた姫君は、チラリと向こうに視線を投げて、はにかんでいる。
またかよ。

今日は顔を合わせる女性すべて、エリスに持つていかれている。

確かに自分も見惚れたし格好良いのは認めるが、俺の夫だからな。誰にも渡さん！

?

椅子を持つてきてもらつて、姫君の対面に腰掛ける。

エリスにも勧めたが、彼女は首を横に振った。

「私はルーデウスの護衛で来ているのよ。立っているわ！」

本物の姫君を差し置いて、男の姫（俺）を守るという頼もしい王子様は、テレーズと並んで戸口付近で腕を組んで仁王立ちだ。

「大まかなお話は、先ほど教皇よりお聞かせいただきました。

ただ、俺は治癒関連の魔術は専門ではありません。

なにか、お力になれればと思つてはいるのですが……」

できても、せいぜい教皇側の意見とミコさんの考えをすり合わせる手伝いくらいか。それすら教団内の権力争いの側面が大きいし、介入は難しそうだ。

つて、俺はなにしに来たんだろう？

「神子様より、とても頼りになる方だと伺つておりますわ。

恥の多いお話になるのですが……不明なところがございましたら、お尋ねくださいね」

ね

姫君は、静かな口調で話しあげた。

ミコさんがその表情を、いや、瞳の奥をじっと見つめている。

“記憶の神子”と呼ばれる彼女は、目を合わせることにより相手の記憶を読み取ることができる。

すべて見透かしてしまっため、教団から重用されるとともに、顔を合わせることを忌避する者も多い。

ただし心の病を抱えるナリス姫の場合は、その能力が治療の手がかりになるかもしれない。

ナリス姫はラビリア王国の現国王の末子、第四子として誕生した。

上の3人はすでに婚姻を済ませており、彼女も成人を迎えた15歳の時に、近隣国の王子との縁談が持ちあがつた。

異変はその頃から始まつた。

「初めての顔合わせの際、晩餐の席で、突然わけもなく悲しみが込みあげてきたのです。泣きながらテーブルの上をひっくり返していました。

気が付いたらお料理は台無し、先方の王子様はスープ皿を帽子のように頭に乗せてビショビショに……さすがに先方もお怒りで、すぐに破談となりました。

それから何度か、同じようなことが起きましたわ。

自分が保てなくなるような状態に、陥るようになつてしましましたの」

王女の乱心とあつて、医師はもちろん、魔法三大国の魔術師ギルドから魔術師たちを招いて診察させた。

しかし原因はわからず、症状もおさまらない。

ポツポツあつた縁談もやがて来なくなり、姫君は周りから腫れ物扱いをされるようになつたという。

「ひとりで、本ばかり読んで過ごしていました。
取り立てて特徴のないわたくしどもの国ですが、学問立国を目指して、識字率向上に取り組んでおりますの。」

城内にも、世界中から新旧さまざまな書物を集めた書庫がありましてね。
その中に評判の高かつた『世界を歩く』を見つけて読んでいるうちに、ミリス神聖国にどうしても行つてみたいと……：

「いえ、生きているうちに絶対に行かなければならぬと思つたのです」
『……尊厳と調和。ふたつを併せ持つ、この世界で最も美しい都市である……』

昔読んだフレーズを口ずさむ。

見た目は美しくても、その長い歴史の淀みと、権勢に群がる人々のドロドロした思惑が渦巻く都市だ。

「まあ、ルーデウス様も、存知なんですね。読んでいて、ワクワクしましたわ」

姫君は微笑んだ。

「病気の治療というのは、正直なところ、ミリスにやつて来るための口実に過ぎなかつたのかもしれません。」

2年以上もかけて念願の地を踏んだのに、ほとんど部屋から出られないのは残念なのですが」

上品な口元に、しばらく陽に当たつていらないような白い手を添えてフフツと笑う。その左中指の指輪が、俺はさつきから気になっていた。

無意識なのかもしれないが、姫君はことあるごとに指輪に触れる。

反対の手の指の腹で、いかにも大切なものであるように撫でさするのだ。

……ただの癖か？ 普通の銀の指輪だよな。

ほかにもキラキラしたのを身につけているので、ただの装飾品のひとつなんだろうが。

話が途切れたところで、それまで黙つて聞いていたミコさんが口を開いた。

「姫様の中に一瞬よぎる記憶が、違う人のもののような気がしてなりません。

そしてそれがご本人のものと絡まっている、というか、むしろ癒着しているかのように私には見えます。

無理に分離させると姫様ご自身が壊れてしまうのでは……と思えて、神撃魔術の使用に反対していたのです。

それでも、これまで確信には至つておりませんでした。でも」

そこでひと呼吸置くと、やがて心を決めたようにキッパリと言つた。

「今、隣でご様子を拝見していて、はつきりとわかりました。

ナリス姫様の中には、ご自身のこれまでの記憶のほかに、別人の記憶が存在しています」

きつぱりと言い切ったミコさんの言葉に目を見張った姫君は、それからゆっくりと瞼を落としていった。

完全に目を閉じて一度ビクリと細い肩を上下させると、それきりパタリと動きが止まる。

「……ナリス姫？」

いや、動かないのではない。唇が震えた。なにかつぶやいている。

やけに低い声だ。まるで男のような……

なにを言つてるんだ？

聞き取ろうと顔をわずかに寄せた時、姫君は突然立ちあがつて身を乗り出し、小さなテーブル越しに俺の首に手を回した。

呆気にとられる俺をよそに、深窓の姫君とは思えない強い力で引き寄せて。噛みつくように、俺に口づけた。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／6

？

明らかに様子のおかしいナリス姫の動きに、エリスは飛び出した。だが、ルーデウス自身が不意を突かれて反応しきれなかつたように、エリスもまたわずかに出遅れていた。

若い女性とは思えぬほど力強い腕を無理やり解いて引き離すと、姫君はクタリと椅子に座り込む。

いっぽうでルーデウスは、焦点の定まらない視線を数瞬さまよわせ……糸の切れた操り人形のようにその場に崩れ落ちた。

「ルーデウス！」

頭を床に打ち付ける寸前で、なんとか抱きとめることに成功したものの、その瞼は閉じられ身体に力はない。

「なによ！　どうしたつていうの！」

それからは大混乱となつた。

姫君に呼びかけながら駆け寄る侍女。

椅子を倒して立ちあがり、悲鳴をあげる神子。その声に、控えの間から“すわ一大事！”とばかりに全員で飛び込んできた神殿騎士たち。

ナースも興奮して辺りをバサバサと飛び回る。

ほどなく、ナリス姫は侍女たちの手によりベッドへと移された。眠っているわけではないようだが、目の焦点が合っていない。

「ルーデウス君！ 目を覚ませ！」

動かないルーデウスを正気づかせようと、テレーズが頬を叩く。が、その手首をエリスが掴んだ。

「やめて！ 今は無理よ」

ギラリと強い目に射抜かれて、テレーズはたじろいだように引き下がった。

「だ、誰かふたりほど手を貸してくれ。回復棟に運ぶぞ」

「私が運ぶわ。彼にさわらないで！」

近づいてきた騎士を睨みつけると、エリスはルーデウスを抱えたまま立ちあがつた。

「どこに行けばいいの？ 早く案内なさい！」

「あ、ああ。分かりました。付いて来てください」

テレーズのあとに続いて、エリスが靴音を響かせながら部屋から出ていった。

自分よりひと回り大きな男性を抱きかかえて足ばやに歩き去る後ろ姿を、その場の皆が呆然と見送る。

あとには、狂剣王エリスの残した殺氣をはらんだ怒気が立ちこめていた。
しばらくは誰も口をきけず、足を縫い止められたように動けなかつた。

?

ミリス神聖国、中でも首都ミリシオンは治癒魔術の本場だ。

よそとは比べ物にならぬほど多くの治癒魔術師が集まり、特に優秀な者が教団本部に籍を置いていた。

門外不出、秘伝の魔術も多数ある。

ナリス姫の例を待つまでもなく、金や地位のある人間が、病気を治してもらうために世界中から集まって来ていた。

そんな者たちの滞在する施設が、教団本部の裏手から渡り廊下でつながつている回復棟だ。

夕暮れの廊下を、クリフが急いで歩き抜ける。

昼過ぎに伝言の騎士がやつて来て、事態を知つた。

あいにく外出まぎわ、とある貴族の葬儀に向かおうというタイミングだつた。

自分の親友がミリシオンの教団本部を訪れた目的について、一応ながら聞いてはいた。

ただ、昨日話した時点では、ルーデウス本人も詳しいことはなにも知らなかつたのである。

クリフが把握しているのは、神子からの依頼で、病気治療のために訪れている姫君に面会する予定だつたということぐらいだ。

それが突然、意識不明で運び込まれたなどと聞かされても、なにがあつたのかと驚くばかりである。

それでも司祭としての役割を完璧にこなしたクリフは、急いで教団本部に戻つて來た。

先に教皇に会いに行くと、その件については調査を進めつつ対応を協議中ということであつた。

「ナリス姫様は友好国からの大切なお預かりですが、ルーデウス殿もまた背後に龍神が控える重要人物です。

教団として、このままにしておくわけにはいきません。

明日の朝まで待つてルーデウス殿が目覚めないようでしたら、ふたりに聖級から王級、帝級……と神撃魔術を施していくことになるはずですよ。

「彼本人からは姫君への神撃魔術の使用を止められていましたが、このような事態となつては、いたしかたないでしょ？」

ルーデウスはなぜ、神撃魔術をやめさせようとしたのだろうか？

ナリス姫の症状を聞く限りでは、それなりに妥当な判断に思えるが。

クリフは眉を寄せながら、足を早めた。

？

白を基調とした教団本部、この回復棟も真っ白だ。

居室は家具調度、寝具に至るまで白一色。中にいる人間だけが、色彩をもつて浮かびあがる。

「クリフ神父」

すぐに立ちあがつて会釈したのは、『聖墳墓の守り人』^{アナスタシア・キープ}の副隊長にしてルーデウスの

叔母にあたるテレーズ・ラトレイアだつた。

クリフへ連絡をよこしたのも彼女だ。

本来テレーズは枢機卿派に属する身分で、クリフの祖父の教皇とは相対する立場だ。

この件に関しても、ふたつの派閥は意見が対立していたらしい。

今はとりあえず政治的なしがらみは脇に置き、クリフをルーデウスに近しい人間とし

て扱うことにしたのだろう。

枕元の椅子に座っていたエリスは、クリフのほうをチラリと見て、またすぐに眠りつづける夫へと向きなおった。

その一瞥だけで、彼女の中に怒りが渦巻いているのが伝わってくる。

「……どうなんだ？」

ルードウスの顔を覗き込むと、あまり安らかな眠りには見えなかつた。

時折、苦しげに身じろぎしたり、かすかに眉根を寄せたり。しかし、呼びかけには応えない。

「神子様も心配なさつて、こちらに来たがつてらっしゃるのだが、どうにも許可がおりないんだ。

先ほど、容態を報告しに行つた際、気になることをおつしやつていた」

テレーズの言葉の続きを待たずに、クリフは右目の眼帯をはずした。

数秒ののち洪水のように情報が押し寄せ、やがて識別眼をとおして読み取れる文字が浮かびあがる。

——ひとつ肉体にふたり分の精神が混在しておる。少々厄介な憑依じやな——

……憑依……？ 厄介とはどういう意味だ？

クリフの識別眼でわかることは、魔界大帝キシリカ・キシリスが知っている範囲の内

容である。

長く生きているぶん知識経験は豊富な一方、知力の面で少々残念な彼女から授かった識別眼。

助けられた場面は多々あるものの、肝心なところで役に立たなかつたりもする。「神子様が言われるには、ナリス姫様の心の中の深い部分に、もうひとりの人物の記憶がしつかりと絡み付いているらしい。

強力な神撃魔術で無理に消滅させようとすると、姫君自身の心も消えるか、お命に関わる恐れがある、と。

そして先ほど姫君がルー・デウス君に、その……口づけする直前、さらに別の者が現れるのを感じたそうだ」

姫君の中にもうひとり? ら別の誰かがルー・デウスの中に入り込んだ?

そんなことがありうるのだろうか。

「……なんなのよ! あの女!」

神子のことか、姫のことか。

エリスの怒りは、自分自身にも向けられているようだつた。

?

鎖はわずかに短くなつたものの、ルーシーのペンダントはほぼ元どおりに修理でき
た。

「……そういうことでしたのね」

細かいパーツを器用につなげながら、エリナリーゼはひとり納得して領いた。
この緑の宝石は、ルーデウスの瞳の色だ。

幼い少女が選ぶにしては地味な色合いだと不思議に思っていたが、光に透かすと、綺麗な若草色に輝いた。

「さ、なおりましたわ。」

補強もしておきましたから、そうそう切れることはないはずですよ」

「ありがとう、ひいおばあちゃん」

ルーシーはペンダントを受け取ると、留め金を外して銀の指輪をとおした。

「あら、それも一緒ですか？」

ペンドントを釣りあげる時、遺跡から拾つた指輪。

この指輪はおかしい。エリナリーゼはひと目でそう思つた。

銀製品は、放つておくとすぐに酸化して黒ずんでくるもの。

いつからあそこに落ちていたのかわからないが、普通だつたらピカピカな状態で出で
くるはずはない。

ごく最近、指輪を同じように落とした人物がいたというのは考えにくいだろう。

触つてもイヤな感じはしないのでルーザーの望むままに持たせているが、マジック・アイテムだつたりするのかもしれない。

「ペンドントをおとしちゃつた時、わたし とってもかなしかつたの。

これをなくした人も、きっと かなしいとおもうんだ。

見えるところに出してたら、その人が じぶんのゆびわだつて きづくかもしれないでしょ」

「な……なんて優しい子。きっと、わたくしに似たのですわね！」

愛おしさにギュッと抱きしめていたら、隣でクライブのお腹がグウと鳴つた。

最愛の息子クライブと過ごすのは至福の時間だが、女の子の相手というのも新鮮で楽しいものだ。

乙女趣味全開のルーザーの面倒をみると、エリナリーゼにとつて微笑ましくて嬉しい仕事だった。

その煽りでつい後回しになつていたクライブが、ちょっとかわいそうだつたかもしれない。

「ごめんなさいね、お腹空きましたわよね。夕方には戻るつて言つていましたのに」

「お父さんたち、おそいね。いそがしいのかな」

夕方どころか、窓の外はもう暗い。

これ以上待たずに、自分たちだけで食事に出ようか……そう考えていると、クリフが現れた。

「このあと、みんなで出かける用事ができたから、とりあえずこれを食べててくれないか」テイクアウトの料理を広げると、食欲を刺激する匂いにつられて子どもたちが寄ってきた。

「まあ、美味しそうですわね。じゃあ、良い子たちはまず手を洗つておいでなさいな」

「はーい」と元気な返事を残して、ふたりは共同水場へと駆けていく。

それを笑顔で見送ると、エリナリーゼは笑みを消してクリフに向き直った。

「それで、なにがあつたんですの？」

部屋に入ってきた時の表情で、なにかトラブルが起こつたことはわかっていた。

「ルーデウスが倒れて……目を覚まさない」

「え？ どういうことですの？」

「例の姫君との面会中に……いや、話せば長くなるな……」

そこへ子どもたちが仲良く戻ってきたため、話は中断となつた。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／7

?

(——観点)

たおやかな手が、髪を撫でる。

何度も何度も……いとおしむように。

「……この髪はお気に召しましたか？」

「ええ、大好きよ。とても綺麗ですもの。雪解けに芽吹いた若草のよう……」

優しい手つきに身を委ねていると、なにもかも忘れて、今この瞬間の幸せに溺れそうになる。

子どもの頃から短く刈り込んできた髪の毛が、ひとつに束ねられるほどに伸びていた。

これまでの自分の不遇の元凶であつた緑色の髪。

ずっと忌まわしくてたまらなかつた、スペルド族と同じ呪われた髪の毛の色。職業として騎士を選んだのも、兜で髪を隠せると考えたからだ。

たつたひとりの女性が愛してくれただけで、すべての悩みが溶けだして消えた思いが

する。

けれど――

「ミリス領土に入つてからは、魔物の妨害もなく、移動が速くなりました。

あと数日でミリシオンです。

あなたを教団本部までお送りしたら、もう……」

直視したくない現実を口にすれば、忘れていた苦悩が再び胸を締め付ける。

護衛対象である姫君。

今やそれ以上……自分のすべてとも言うべき存在が、静かに長いまつ毛を伏せた。

「この婚姻は、ミリス神聖国との深い繋がりを求めた父王が決めたもの。

ただの政略結婚であり、わたくしは政治の道具にすぎません」

彼女の母親は、王が気まぐれに手を出した下級貴族の娘であつた。

敬虔なミリス教国において、側室は日陰の存在だ。王女として認知はされたものの、
城内での立場は弱い。

彼女がミリス神聖国高官の息子のもとへ嫁ぐにあたり、付けられた従者は侍女と下僕
が2名ずつ。最低限のものだつた。

それを補うため、現地駐在中の神殿騎士が警護に付き従うこととなり、長い道中の安
全をひとりで守ってきたのだ。

人質のように他国へ嫁がされる姫君と、誰もやりたがらない貧乏クジの任務を押し付けられた騎士。

道中のさまざまな出来事を通して気心をかよわせ、ふたり愛情を育みあつた2年余り。そして今、その旅も終わろうとしている。

年月を経て良き理解者となつていた従者たちは、邪魔にならぬよう離れたところから見守つてくれた。

もう間もなく、ふたりが引き離されてしまうことは自明の理であつたし、聖ミリスの遺徳か、少々目を離しても街道沿いに危険はほとんどないからだ。

「わたくしの心は生涯あなたのものだと、ミリス様に誓います。

あなたがミリシオンにおられるあいだは、なんとか抜け出して会いにまいりましょう。

わたくしの心をあなたに捧げる証として、どうぞ指輪をお持ちください」

持参金の一部として持たされた道具類の中から、小さくも重厚な造りの箱を選び出す。

「この指輪はふたつでひとつ。たとえ離れても、たがいに呼び合うと言い伝えられていてくれた。

「この指輪はふたつでひとつ。たとえ離れても、たがいに呼び合うと言い伝えられていく

るものです。

どうか、わたくしにも指輪を……あなただと思つてずっと大切にいたします」

残つたひとつを託すと、みずから白く細い手を差し出す。

?

回復棟へ向かうには、教団本部の入り口を経由しなければならなかつた。

ルーシーとエリナリーゼ、クライブは、教団の客人であるルーデウス・グレイラット

の身内ということで問題なく通過することができた。

ルーデウスに4人目の妻がいたと噂になるかもしれないが、今は非常事態。そんなことは些細な話だ。

内部を連れ立つて歩けば、エリナリーゼよりも、むしろクライブに目を止める人間が多かつた。

あえて言及する者はいなかつたものの、その面差しがクリフに似ていたためだろう。

クリフは一瞬、彼らは自分の家族だと、公表してしまいたい衝動に駆られた。

しかしこれは、クリフ自身の立場を守るためにではなく、大切な妻と子どもの安全を最優先したうえでの判断なのだ。

エリナリーゼとクライブは、ルーシー同様にルーデウスの身内ということで押しとお

そう。

実際、エリナリーゼは義理の祖母にあたるわけだから嘘ではない。

部屋の入り口には立ち番の騎士がひとり立っている。

「副隊長は、ただ今ミコ様のところへ行つております。明日、朝いちばんで戻るということでした」

「わかつた。ありがとう」

「入るぞ」

ノックのあと返事を待たずに扉を開けると、白いリネンの上に真っ赤な髪の毛が広がっていた。

強い色彩のコントラストに、視線が縫いとめられる。

……なんだ?

エリスがルーデウスの上に覆いかぶさり、唇を重ねている。

こちらに気付かないはずはない。

そのまま黙つていると、やがてエリスは顔を上げて息をついた。

彼女の表情に、口付けの現場を他人に見られたという、恥ずかしさや後ろめたさはまつたくない。

色ごとに無縁の横顔は、真剣で、悲壮ですらあつた。

「あの時、口からなにか入れられたのかもしないわ。

だとしたら、吸い出せるんじゃないかと思つたのだけれど……」

自嘲気味に手の甲で唇をグイとぬぐうと、纖細なレースの施された絹の袖でルードウスの口元を拭いた。

「……ルーシー……連れて来てくれたのね」

「ルードウスにとつて自分の子どもは特別だ。この子の呼びかけには反応するかもしない」

神子が言う、ナリス姫の心の内部と同じことがルードウスに起こっているとしたら。
知らない誰かの精神が、ルードウス本人のものと不可分に絡みあつてゐるとなつたら。
そう考へると、神撃魔術を試みるのはリスクが高すぎた。

明日までに、なんとか自力で目覚めてもらうしかなかつた。

エリナリーゼの服の裾を掴んでいたルーシーが、おそるおそるベッドに近寄つた。
小さな手の纖細な指先が、物言わざ眠るルードウスの頬に伸ばされる。

「パパ、起きないの？　どうして？」

来る途中、なるべく深刻に聞こえないよう気を付けながら伝えたつもりだ。

しかしクリフはもともと、遠回しなもの言いがあまり得意ではない。

エリナリーゼの助けを借りてなんとかなつていたものの、この部屋の固い空気は、幼

い少女を動搖させるにじゅうぶんで。

大きな目に溜まつた涙は、今にもこぼれ落ちそうだつた。

?

(――観点)

悶々としながら待つたひと月あまり。

ほんとうに長かつた。

婚礼儀式や、その後のもろもろ……落ち着くまで、ある程度の期間を要するのは理解している。

俺のような庶民でさえ、最初のシルフィイとの結婚前後は、やらなければならぬことで忙殺されたのだから。

嫁ぎ先が上流貴族ならば、なおさら面倒な手続きなどで時間がかかることは想像に難くない。

とはいえ、心穏やかに待つていられるかは別問題だつた。

ここミリシオンには、俺の親や兄弟たちが今も暮らしている。

なんの因果か縁の髪などに生まれついたため、この街に、この国に、俺の居場所はどこにもなかつた。

家族との縁も、とうの昔に切れている。

ミリス全土における魔族排斥の風潮は根強く、中でもスペルド族への嫌悪は強烈だ。ルイジエルドを知る俺にとっては悪評がただの言いがかりであるのは常識だが、世間はそうはいかない。

周囲からの冷たい視線を避けるために兜をかぶり、遠隔地任務を志願するしかなかつた。

しかし、そのお陰であの人に出会えた。

俺は初めて生きる理由を見つけたのだ。

緑の髪で生まれたのも、故郷を捨てざるを得なかつたのも、この出会いのためだつたと思えた。

きっと、すべては運命だつたのだ。

騎士としての勤務以外はできるだけ身を隠し、再会の時まで、ひたすら耐えて待ちつづけた。

そして、ようやく届いた手紙。

心から待ち焦がれた、愛しい人からの連絡だ。

むさぼるように読んだ文面には、会えない寂しさと恋情が切々と綴られていた。

そして最後に、逢瀬の場所と日時が記されている。

俺は自由になるすべての時間、文面を噛み締め、筆跡を指で辿り、ほのかに立ちのぼる香りを味わつて過ごした。

?

(――観点)

一日千秋の思いで迎えた、約束の日。

教団本部の裏手にある礼拝堂の陰、真夜中を過ぎた時間帯。

この施設は聖ミリス記念日のミサにしか使用されない。

深夜である今、シンと静まりかえつていた。

逢瀬の場所としては郊外のほうがより安全にも思えたが、あまり遠いと抜け出せないのかもしれない。

……遅くはないか?

ソワソワと待つうちに、しだいに心配が込みあげる。

今の姿が俺だとわからない、ということはないよな?

いつもの鎧は身に付けておらず、腰に剣を一本帯びているだけの軽装。
闇に紛れるのに都合が良かつたし、愛しい人を抱きしめるなら、硬く冷たい鎧は邪魔でしかなかつたから。

待ちきれなくなつて、付近を探してみようと物陰から足を踏み出した時、背後に気配を感じた。

聞こえた声は、心待ちにしていた想い人のものではなく。

「やはり来たのか。神殿騎士でありながら、護衛対象に懸想するなど言語道断」
そこにあるはずのない青い鎧が、松明の炎に浮かびあがつた。

「……姫君はどこに……？」

「姫君？……もう宰相殿のご子息の奥方だよ」

名も知らぬ騎士は、せせら笑う。

「来るわけがないじゃないか。付きまとうお前の扱いに困つて、教団に対応を依頼してきたのだ。奥方ご自身がな。

「まったく……おめでたいヤツだよ」

そう吐き捨てると、俺の目の前にこれ見よがしになにかを掲げ、パツと指を離した。

——チヤリン

松明の光をキラリと反射して、小さな金属片が石畳に落ちて転がつた。

あの指輪だ！

とつさに拾いあげようと屈んだ俺の背中に、衝撃が走る。ついで、肉がバツクリと割れる感触。

しかし、指輪を拾いあげることには成功した。

この男の言うことが真実であるはずがない！

会つて、直接話して、あの人との真意を確かめなければ！

負った傷の痛みなど、どうでも良かつた。

俺は剣を振り回して走り出す。

が、すぐに新手の騎士が現れて、方向を変えざるをえなくなる。

ちくしょう、また逃げ道を塞がれた！

礼拝堂から離れられぬままに、周囲をグルグル回る。

くそっ！ こいつら、何人いるんだ。

こんな時、魔術が使えたら……！

一瞬頭をよぎるもの、初級魔術さえ身に付かなかつた俺には、剣を振るう以外能はない。

剣ですら、複数の騎士相手では打ち倒すのは望み薄だろう。

とにかく逃げきる。

そして、あの人のもとへ……！

次々と湧き出てくる、同僚だつたはずの騎士に追い詰められて行き場をなくした俺

は、礼拝堂の窓を突き破つて飛び込んだ。

ミリス教徒なら、少なくともこの中で殺生はしないはず。

とにかく時間を稼ごうと、祭壇の裏に回り込んだ。

と、突然足元から床がなくなつた。

必死に伸ばした手は、虚しく宙を搔く。

(
視点)

?

……ここは……どこだ？

どうやら、背中から落ちたようだ。

斬られた痛みか、打ち付けたせいか。強烈な痛みが脈打つて俺を苛む。
目を凝らしてみても、闇が広がるばかりでなにも見えない。

まさか、転落の衝撃で視覚を失つたとか……ないよな？

ああ、光の精霊のスクロールを持つて来ていれば良かつた。
魔術を使えない俺は、ほんとうに役立たずだ。

剣はこの手にある。あの人の指輪は……持つていなかつた。

落ちる瞬間、掴まるものを探してもがいた覚えがある。きつとあの時、握つていた手を開いてしまつたのだろう。

身体を起こせば、小石やザラザラとした砂つぶが手のひらにめり込むように付いた。地面の感じからすると、ここは屋外か？いや、それはない。礼拝堂の地下のはず。

不快な匂いが立ち込めているものの、呼吸は苦しくない。かすかな空気の流れを感じる。

手を伸ばせば、でこぼことした石の壁に触れた。

助けが期待できない以上、ここにうずくまつっていても事態は変わらない。

なんとか立ち上がり、ゆっくりと歩きだす。

壁づたいに進むうち、ふと閉塞感が緩んだ感覚がした。広い場所に出たのかもしけない。

……カシャン。

敏感になつた聴覚が微かな物音を拾う。

全身を耳にしながら慎重に前進するあいだにも、雑音と呼ぶにふさわしい響きは近くはつきりしていった。

ガシャガシャと固いものどうしがぶつかりこすれ合いながら、なにかが、かなりのスピードでこちらに近づいてくる。なんだ？

俺はついに足を止めた。

完全な暗闇の中、見ることを諦めていた瞳に、薄ぼんやりとした明かりが映った。光を発しながら急接近する塊り。あれは……
骸骨兵スケルトンだ。

音の発生源を確認できた時には、すでにグルリと囲まれていた。

奴らの身体が発する薄明かりで、今いるのが広場のような空間と理解する。いくつもあるトンネルのような通路からは、新手のスケルトンが次々となだれ込んできていた。中には武器を持った者まで。

なお増えつづけるその数に、逃げ切ることは不可能と思い知る。

それでも俺は、向かってくるソレに向かつて剣を振り回した。

何体かはバラバラになつて崩れたものの、追いつくはずがない。

圧倒的な物量で覆いかぶさつてくるスケルトンに、しだいに動きを封じられていつた。

……このまま俺は死ぬんだな。

惨めな最期だが、俺にはふさわしい死に場所か。

この期に及んで、往生際悪く考える。

姫君は、俺を切り捨てたのだろうか？　あの優しい人が、ほんとうに……？

いや、そんなはずはない。

だとすれば、彼女は無事なのだろうか？

今ごろひとり、窮地に陥っているのではないか？

ただ、ひたすらに会いたかった。

この腕で抱きしめて、柔らかな髪に顔をうずめて……

ああ……もう彼女のもとへ駆けつけることも叶わない。

もつと、警戒すべきだつたんだ。

しかし、もう手遅れだ。すべてがあとの祭りだ。

後悔と絶望が津波のように押し寄せ、俺を飲み込んでいく。

血が足らず、酸素が足らず、朦朧としてきた脳裏に

シルフィ、ロキシー、エリスの顔がやけに鮮やかに浮かんだ。
ごめんな……

もう帰れないかも知れない。

子どもたちにも

もう、会えそうもない

……会えない……？

……いやだ！

会いたい。

会いたい。

会いたい。

会いたい！

「パパ！」

無数の骨の間から伸びてきた小さな手を、俺は夢中で掴んだ。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／8

？

暗闇から、いつきに光の中へ。

——眩しい。

網膜を焼くような光の洪水。

耐えきれず顔を背けようとしても、身体は泥のように重だるくて動かない。

それでも、呼吸はずいぶんと楽だ。

俺は深く息を吸つて、ゆっくり吐いた。

ああ……空気がうまい。

「ルーデウス！」

押し殺した、それでいて興奮を隠せていない声。

エリスだな。

どうした？

なにかあつたんだろうか。

押し寄せる光に少しづつ慣らしながら、ゆっくり瞼を持ちあげていく。
ぼんやり霞んだ視界いっぱいに、エリスの顔。
何度も瞬きを繰り返し、しだいに輪郭がはつきりしてきた彼女の表情に、醒めたばかりの目を奪われた。

どんな時にも光を失わない、いつも強気な瞳いっぱいに……涙をためて。

俺は同じ場面を見たことがある。

以前に一度、覚えがあつた。

あれは、たしか……

そうだ、

「昔……オルステッドに殺されかけた時……」

「もうゴメンだわ！ あんな思いをするのは。

このまま死んじやつたらどうしようって、心配したんだからね!!」

さつきとは違うキツパリしたエリスの声に、頭の中の霧がゆっくりと晴れていく。

半泣きで怒りながらも、嬉しそうに笑う……なんとも複雑な感情をぶつけてくるエリ

スに触れようとして、自分が小さな手を握っていることに気付いた。

視線を落とせば、エリスの声で目を覚ましたルーシーと目があつた。

俺の隣にピッタリと身を寄せて寝ていたらしい。

「おはよう、ルーシー」

「……パパ……？…………パパ！」

そうだ、この手に助けられたんだ。

あの時、小さな手を取らなければ、そのまま闇に飲み込まれていたんじゃないだろうか。

しがみ付いてくる愛娘を、そのままギュッと抱きしめた。

「ありがとう。ルーシーが手を伸ばしてくれたから、パパは戻つてこられたよ」

エリスも、俺たちをまとめて抱きかかるように上から重なった。

もうだめだという絶望、後悔や未練……

事切れる瞬間の感覚はあまりに生々しい。

かつてトラックに潰されて死んだ時の、いつそせいせいしたような投げやりな気持ち
じゃなくて。

あの時と違うのは、なによりも大切に思う、たくさんの者たちの存在だろうか。

泣きたくなるほど幸せで、同時に、以前の身軽さが恋しくなるほど重く恐ろしいこと

にも思えた。

親子3人でヒシと身を寄せ合つて、温もりと確かな感触を噛みしめること数分。

……………ん？

死の淵からのサバイバー気分満載で、人生を哲学したのはいいけれど……
ここは、どこ？

しだいに頭が冷えるにつれ、今の状況への違和感が強くなる。
このフカフカ布団は、明らかに宿屋のベッドじゃない。

気のせいであつてほしいが……ほかの人間の気配がするような？

てか、ものすごく視線を感じるし、なんなら今咳払いが聞こえたぞ。
俺は妻子に回していた腕をほどくと、ギシギシと頭を持ちあげて、エリスの肩越しに
様子をうかがつた。

……げ。

クリフ、エリナリーゼ、クライブ、テレーズ、神殿騎士がひとり、あとよく知らん教
団職員っぽい人物も。

そう広くない室内に、人間がみつしり立っていた。

？

「どうも皆さん、お騒がせして申し訳ありませんでした」

頭を下げるも、みんなの視線が痛い。

「良かった。もう目を覚まさないかと思ったよ」とテレーズ。

「ちよつと寝すぎですわね、ルーデウス」と笑ったのはエリナリーゼ。

「危なかつたぞ。もうしばらく寝たままだつたら、問答無用で神撃魔術を掛けられてたところだ」

クリフは部屋にいる教団関係者を振り返り、続けて指示をした。

「すまないが、ルーデウスが目覚めたことを教皇に報告してもらえるか？」

それから、ナリス姫への施術もいつたんストップするよう伝えてくれ。細かいことは、僕がこのあと話しに行くから」

「では、私は神子様にお伝えしてこよう」

テレーズとその部下もバタバタと出ていった。

部屋の空気がにわかに活気付いた。

集まっていた人数からすると、けつこうな騒ぎになつていたのだろう。俺のミスか。

いや、あんなの予測できないつて。反則でしようが。

不可抗力だと思いたい。

とはいえ、迷惑かけて醜態をさらしたのも事実で。

ああ……借り物の服がシワだらけだよ。大使館の人文句言われそうだな。上着はどこだ？

うん、向こうに掛けてある。上から羽織れば隠せるかな。

……気まずさのあまり、どうでもいい考えに現実逃避してしまう。

俺は頭をひと振りして、ベッドからモソモソと足を下ろした。

首や肩を回したら、コキコキ音がする。身体が凝り固まっているようだ。

「どれくらい寝てましたかね」

眠っている間に、誰かの半生を追体験してしまった。

不運な神殿騎士と俺自身が渾然一体に溶け合つた、不思議な感覚。

あのままだつたら、たぶん彼と一緒に俺の心臓も止まっていた。そう確信するくらい繋がつていた。

「倒れたのが昨日の昼前、今はひと晩たつて翌日の午前中だ」

「そういえば、わたくしたちが聖ミリス公園で、ルーシーのペンダントを釣りあげていた頃ですわね」

ほぼ丸一日経つているとのクリフの言葉に驚きつつも、それ以上にエリナリーゼのかしながら言い回しが引っかかった。

「釣りあげる？ ペンダントを？ 魚釣りじゃなくて？」

エリナリーゼの視線をたどつて振りかえると、モジモジと下を向いたルーシーがいた。

「パパ、ごめんなさい……」

わたし、こうえんのアナボコにペンドントをおとしちやつたんだ。

そしたら、ひいおばあちゃんが、ゆびわといっしょに いとでつりあげてくれたの

「ええと……指輪つて？」

胸元の鎖には、どこかで見たような銀の指輪がぶら下がつてている。

「そうか。ペンドント、取り戻せて良かつたな」

ルーシーの頭を柔らかな髪の流れに沿つて撫でながら、指輪をつまんでじっくり観察した。

……似てる気がする。

タイミング良すぎとは思うけど、いや、良すぎるがゆえに余計そう思う。

これつてやっぱり、夢に出てきたアレじゃないのか？

「エリナリーゼさん、この指輪は聖ミリス公園で見つけたんですね？」

「そうですわ。展示されていた遺跡ですわね。奥の床石の隙間から」

「遺跡の奥……床石の下……地下……」

頭の中で、いろいろと繋がりそうな気がした。

「ルーシー、指輪をパパに預けてくれないか？ 持ち主に返せるかもしねい」

?

あまりにリアルな夢だつた。

緑の髪は、シルフィと同様に偶然ラプラス因子を持つて生まれたのだろうか。どれくらい昔の話かはわからないが、少なくとも現代よりずっと魔族への風当たりが強かつたのは間違いない。

しかもここはミリス神聖国だ、その苦惱と苦労は想像を絶するものだつたろう。ただし。

彼が実在する人物だつたならば、だ。

いくつか事実を確認する必要がある。

嗅ぎまわると、教団からは嫌がられるかもしれないが仕方がない。

このままでは俺も寝覚めが悪いってもんだ。

「昨夜からいろいろ心配かけて、どうもすみませんでした。

俺はこれからやることがあるんで、みんなは先に宿に戻つて休んでいてください」

「わかりましたわ。ルーデウスも無理しちゃいけませんわよ」

エリナリーゼは子どもたちの手を取つて部屋を出たものの、エリスは動こうとしなかつた。

「ルーデウスを守るのが私の役目よ。ついて行くわ」

「ただの調べものだよ。資料室を使わせてもらうだけだから、危険はないって」

「い・や・よ！」

いつもは元気いっぱいのエリスの顔色が、今朝は少しだけ血の気が薄い。

単純に睡眠不足というのもあると思うが、それくらいで参るヤワなエリスではない。多分それ以上に心労をかけたのだろう。

逆の立場だつたら、俺は精神的に削られて、見る影もなく萎れてたに違ひなかつたら。

今回の件に多少なりとも不穏な気配が漂つてきた今、休める時に休んでおいてほしいんだが……

本人には疲れている自覚がないのかもしれないと思いながら、俺はエリスへと手を伸ばす。

「ほら、目の下がクマになつてる」

まなじりのキュッと上がつた大きな瞳、頬に手を添えて下まぶたに親指を這わせると、エリスがボンツと赤面した。

……お？

エリスは自分からはグイグイくるくせに、受け身になるとめっぽう弱い。

照れるエリスが可愛くて、いつもはつい不謹慎なところを触つたりもするが、加減を

間違えると、再び人事不省に陥る危険もはらむ行為だ。

「ここはひとつ、じっくり行かねば！」と慎重に言葉を紡いだ。

「昨夜は、寝ないで付き添つてくれたんだよな？」 ありがとう。

エリスがいてくれると俺もすごく心強いし、頼りにしてるんだ。

でも今はいつたん身体を休めて、早くいつもの元気な顔を見せてほしい」

お前はルークか！という脳内のセルフツツコミをどうにかやり過ごし、彼女の頬からするりと指を滑らせる。

目ヂカラ込めて見つめる俺と、視線をそらすエリス。数秒の攻防。

やがて赤い顔のままチラリと俺を見上げたエリスは、恥じらうように俯いた。

……か、勝つたどー！」

「わ、わかりましたワ。今日は先に戻つていますワ」

ギクシャクと退場する背中を脱力しながら見送ると、エリナリーゼがわざわざ部屋を覗きこんでニヤリと笑った。

慣れないことをするもんじやない。汗が滲んできたよ。

俺としては、オッパイを触るより、頬を撫でるほうが断然恥ずかしい。

……殴られないで良かつた。

エリスも、寝不足でいつもより頭が回らなかつたのだろう。

部屋を片付け、身なりを簡単に整えてから廊下に出る。

窓から見る限り、ここはどうやら教団本部施設の裏手らしかつた。

本部の裏つて、夢の中では例の礼拝堂じやなかつたのか？

渡り廊下から位置関係を確認しても、やはりこのあたりだつたはず。

俺の勘違いか？ それか、このごろ建て替えられたとか？

そもそも、ほんとうにこの下に地下空間が広がつてたりするのだろうか？

それなら教団側が知らないはずはないし、本部の地下に骸骨兵軍団を野放しつてこと

はないだろう。

うーむ……

わからん。

とりあえず、ミコさんたちのところだ。

？

「ルーデウス様！ もう大丈夫なんですね！ 良かつたあ」

ミコさんは変わらず、明るく元気だつた。

「心配したんですからねつ！」と、上目づかいでプリンスカ。 今日も絶好調だ。

この人いくつだっけ？ 20歳過ぎだっけか。

ついでに、ミコさんにくつ付いてトコトコ歩いてきたナースからも上目で睨まれた。

「ナリス姫様、おはようございます。ご気分はいかがですか？」

「いっぽうで、昨日と同じように腰掛けている姫君はドンヨリと元氣がない。

「ルーデウス様……昨日はわたくし、大変なことをしてしまったようで……。

あまり憶えていないのですが、ほんとうに申しわけございませんでした」

いやいや、と手のひらを振つて笑つて見せる。

「謝らないでください。あなたのせいではないし、油断していた俺も悪いんです。

それと、お陰でわかつたこともあるんですよ」

幾分かホツとした表情になつた姫君に許しをもらつて、彼女たちと並んで席に着いた。

昨日と同じシチュエーションだな。

100パーセント信用していると言つたら嘘になるけど、まあ、もう大丈夫だろう。

「今日は、エリス様はいらつしやらないのですか？」とミコさん。

「ああ……タベ寝てないようなので、宿に帰しました」

彼女は俺の目を覗きこんで、につこり微笑んだ。

そういえば、目を合わせたら全部筒抜けだつたな。べつに隠すつもりもないからいいが。

と、思いつつも、さりげなく目線を外しておく。

ミコさんはホーツと悩ましげに息をつく。こんな姿を護衛の騎士たちが見たら、身悶えするに違いない。

「私、きっと生涯忘れませんわ……」

ひと呼吸ぶん間を置いて、彼女は言葉を続けた。

「ルーデウス様が倒れられた時に、エリス様の瞳の奥に見たものを」

……ん？

ミコさんは、エリスの記憶に一体なにを見たのだろう。とつても気になる。

気になるけれど、頬を染める彼女の様子からすると、たぶんツッコまないほうが身のためだとも感じる。

下手にツッコめば、それこそ俺がエリスに突つこんでいる場面が……エヘン、オホン。良い子のみんな、今の、ナシな！

言葉を返せない俺をよそに、ミコさんのターンは続く。

「なにより、倒れた夫を軽々と抱きあげて、颯爽と歩き去るお姿のカツコ良かつたこと！」

私も、エリス様みたいなステキな方からお姫様だつこされてみたいですね！」

「お？ お、ひめさま、だつこ……？」

(おひめさままだつこつだつこつだつこつだつこつ……)

衝撃的な言葉が、脳内でリフレインした。

「そう！ 女の子の憧れ、お姫様だつこです！」

もう、ルーデウス様つたら！ ほんとに幸せ者！」

ミコさんは、ボレアス・パンチ並みの破壊力で、俺を打ちのめす。

「あ……あの時、控えの間に屈強な騎士たちがゾロゾロいましたよね……？ なんでわざわざエリスが……？」

俺は本気で頭を抱えた。

知らないうちに、そんなところでも恥ずかしい姿を晒してしまっていたのか。

「あら、愛する人の身体には、誰の手も触れさせたくないじやありませんか。

私に恋人はおりませんけれど、わかります。

ひとりの相手を、こんなにも強く一途に想うことができるなんて……ああつ、なんてステキなのかしら！」

想われるのは非常に光栄なことだけれど、対する俺には妻が3人だ。

とてもじゃないが、俺自身は“一途”とは言えまい。

なんだか後ろ暗い気分になつたのを、ミコさんは訳知り顔にウフツと笑つた。しまつた！ 目線外すの忘れてたよ。

「大丈夫ですよ！ ルーデウス様の愛情はこーんなに大きいのです。

奥様3人とも、それぞれたっぷり愛されて、幸せに思つておられますよ!」

「こーんなに』のところのジエスチャーのキレがやけに良い。ババツと風切り音がしそうだ。

鍛錬の賜物で、腕に筋力がついた証拠だろう。
エリスの功績だな。

俺たちのやり取りをあつけにとられて聞いて聞いていた姫君が、ハツキリとドン引きした。

「えつ! 奥様が、さ、さんにん……?」

くわばら、くわばら。

ここはミリス教の總本山だった。

ミリシオン出張記～姫ものがたり～9

?

「えー……ま、まあとにかく、この指輪をご覧ください」

気を取り直して、ルーシーから預かつた銀の指輪を取り出した。

「これは……」

指輪を嵌めた姫君が手をかざして比較すると、大小サイズの違いはあるものの、彫り込まれた文様はまったく同じだった。

やはり、夢でに出てきた一対の指輪の現物だと考へてもいいんだろうか。

「それは、昨日我々がこうしてお話をしていたのと同じ頃、聖ミリス公園内の遺跡から見つかつたものなんです。

おそらく、なんらかのマジック・アイテムだと思います。

姫様が今付けられている指輪は、どういった経緯でお手元に?」

「確か、15歳の誕生日の贈り物のひとつだつたと……」

言いかけて小首をかしげ、やがてハツとしたように顔を上げた。

「いえ、違います。今思い出しました。

ちょうどその年齢の頃、書庫で……外国から届いたという書物に紛れているのを見つけたのでしたわ。

なぜだかとても心惹かれたのです。それで、そのまま……」

途中で言葉を詰まらせ、姫君は唐突にハラハラと涙をこぼした。

なんの涙だ?

不思議に思いつつも、俺はポケットからハンカチを渡した。

昨日から入れっぱなしの、アスラ大使館製だがね。

「……ありがとうございます。変ね、どうして涙が出るのかしら。

この指輪、もらつたものだと思い込んでおりましたけれど……申しわけないことをしてしまいました。

本来の持ち主がいらつしやるということですよね?」

「いや、それは……」

改めて見てみると、夢の中のお姫様の姿かたち、声や雰囲気までがナリス姫に似ている。

偶然か、夢のお姫様が憑依しているという証拠なのか、それとも生まれ変わり……とか?

「ミコ様、ちょっとご意見を聞かせてください。

俺が眠っている間にみた夢なんですが……」

俺はミコさんに向き合い、あの時の夢での体験を想起した。

彼女はじつと俺の目を見つめる。

数分が経つた。

「…………ああ。なんてむごい…………」と目を覆う。

そうか、便利だけれど、この能力つてひどく疲れるんだったよな。

俺が半日以上かけてみせられたものを、強制ダウンロードだ。疲れて当然だ。

情報過多になるだろうし、内容も重たいし。

だが俺としては、自分ですら半信半疑でいるところに、第三者的意見をもらえるのは
とてもありがたい。

「ルーデウス様がみられたのは、通常の夢ではありません。記憶の輪郭が鮮明すぎます
もの」

そう言つて俺に向き直つたミコさんは、ミリス教団の至宝“記憶の神子”的顔をして
いた。

「教義的に認めがたいところではあるのですが、ナリス姫様は、その嫁いで来られたお姫
様だと言えるのかもしれません。

この国においてになつたのも、気の毒な騎士さんから呼ばれたか、ミリス様のお導きがあつたのでしよう」

俺たちのやり取りを黙つて見守つていたナリス姫は、わからないなりにも感じるところがあつたのか、『ミリス様のお導き』という言葉に小さく頷いた。

ミコさんはこれ以上詳しいことは、なにも言わなかつた。本人みずからが思い出さなければ、あまり意味がないのだろう。

遺跡から出てきた指輪は、ナリス姫の希望で彼女が持つてることになつた。サイズが大きすぎるため、ルーシーがやつていたように鎖に通して首にかける。

この指輪はふたつでひとつ、確かに引きあつたわけだ。

これからしばらくは、ミコさんが付きつきりで姫君の記憶を解きほぐしていくという。

ナリス姫の中のもうひとつ記憶が前世からのもので、緑髪の騎士の悲恋の相手だつたのかは、その過程で少しづつ明らかになるだろう。

姫君の病を治すという、当初の目的にもつながるはずだ。

そこで教皇からの呼び出しがあつたので、明日また顔を出すことを約束して、部屋を辞した。

?

「お騒がせすることになつてしまい、申しわけありませんでした」

今日は、さつきから謝つてばかりだ。

「いやいや、ルーデウス殿が目覚められて良かったですよ」

教皇は穏やかに微笑んでいる。

「クリフからの報告を受けて、ナリス姫様の件はしばらく様子見ということになりますた。

姫様の御身に危険があるかもしれないのなら、性急に進めるわけにもまいりませんので。

ただ、神撃魔術で解決するだろうという私どもの見解は変わらないのですが……

貴殿はどうお考えなのでしょうね

「外部から一時的に悪霊的なにかが取り憑いたというのなら、神撃魔術は確かに有効でしよう。

しかし私自身、昨日同じような状況を体験したのです。

その間、自他の区別がないほど憑依相手と繋がっていました。

姫君の場合は、もともとご自分の中に別の人生の記憶が深く根付いていたようですか
ら、その結びつきは私の場合と比べようもないくらい強いはずです」

教皇は考え深そうに、俺の言葉に耳を傾けている。

「施す魔術が強力であればあるほど、姫君ご自身の心まで害していた可能性が高かつたのではないでしようか。

多少時間がかかるても、このまま神子様にお任せするのが得策だと私は考えます」

俺はちよつと思い付いて、疑問を投げかけてみた。

「ところで、ミリス教では、死後のことはどうのように教えているのですか？」

「教えをまつとうして聖人に至れば、聖ミリスと同じ世界へ。

大多数の普通の人々は泉の1滴に戻つて、自我のない大きな共同の一部になります。罪を犯した人間は、救いがあるまで、呪われた魂としてさまよいつづけることとなりますよ」

「生まれ変わり、転生というものは認めていますか？」

「個々が溶け合い、ひとつになつたものから新しい命が生まれるので、同じ意識を持つて生まれてくることはありません」

教皇はキツパリと断じた。

なるほど、ミコさんの意見がとおらないわけだ。

ついでに言えば、転生者の俺は呪われた魂だつたりするんだよな。

死後さまよいつづけるのは、あんまり嬉しくない。

そうだ、もつと大事なことがあつた。

どう切り出そうか一瞬迷い、結局はストレートにぶつけてみた。

「もうひとつ教えてください。この下に、大きな地下施設がありますよね？」

シラを切られても、カマをかけるくらいにはなるだろう。

「……ルーデウス殿は、昨日こちらでお話ししてから今まで、ほとんどの時間を眠つておられたと聞いています。

そんなことを、どうやつてお知りになつたのでしょうかね」

否定しなかつた代わりに、教皇の笑顔に剣呑な色がよぎつた。

「ただ、これは幹部しか知らないこと。他言無用ですよ。

おつしやるとおり、ここから聖ミリス公園あたりまでの広い範囲に、地下迷宮が存在しています。

第二次人魔大戦時には、この辺りも人族と魔族の戦いの場となりました。

戦後、荒廃した町並みが新しく整備されていく過程で、大きく陥没したため地下に取り残された部分が迷宮化したと言われています」

「迷宮……」

「もともとミリス国内は、迷宮が自然発生するほど魔力濃度の高い土地ではありません。その上、もうずいぶんと昔に強力な結界も施されましたので、外部への影響は心配せ

「……すとも大丈夫です。

「……ここ数百年といいますか、ラプラス戦役以降、入り込んだ人間はおそらくいなはずですよ」

「……そうなんですね。

「ああ、それから、こちらの資料室で少々調べ物をさせてもらつてもいいですか？」

「本来、部外者は入室を許可されません。

けれども、ほかならぬルーデウス殿のお頼みなら、多少の便宜は図りましよう。

中にいる司書に命じてください。ご覧になつても差し支えのないもののみ、資料を出させるように伝えます。

「ただ、あまり土足で踏み込むようなことは、ね？」

最後は目が笑つていなかつた。

？

「神殿騎士の人事は極秘だ。

『聖墳墓の守り人』のメンバーの個人情報なんて、それこそ最高機密だそうだ。

ただし100年以上前ならば、すでに古文書扱いということで見せてもらうことがで
きた。

名前はわからないし、髪色なんて記載はもちろんない。

配属先として、ラビリア王国を中心に北方大地の小国をあたるが、なにせあの辺は政情不安定で国名も国境もいろいろ変わっている。

数時間カビ臭い書類と格闘して、ようやくそれらしいのを発見した。

その神殿騎士は、ラビリア王国駐在3年目に王族警護任務へと異動、2年ほどかけてミリス本国に帰還。その後生死不明と記されている。

200年近く前の記録だ。

そして古地図によると、教団本部裏手の礼拝堂は同時期によそへ移されたらしい。ということは、あれは移築直前の出来事だったのだ。

ひよつとすると、あの時のことを緑髪の騎士の存在ごと隠蔽するために取り壊されたのかもしれない。

ちなみに、地下迷宮についての資料はない。

幹部しか知らないって言つてたもんな。あつたとしても、見せてはもらえないか。

とりあえず、俺がみた夢の内容の裏付けは取れたんじゃないだろうか。

だから、あれは夢ではない。

誰かの、過去にあつた出来事の“記憶”だ。

外へ出たら、もう薄暗かつた。そろそろ1日が終わる。

宿に1泊、教団本部に1泊、それと今晚で……3泊4日。
子どもたちはシャリーアに帰す頃合いだ。

俺たちも、ミコさんの相談に乗るつていうだけなら、もう帰るべきなのかもしれない。
しかし、件の騎士の最期を肌で味わった身としては、せめてもうちよつとという欲も
出る。

姫君の病状が落ち着くのを確認して、できれば不運の騎士の想いが昇華したと感じら
れるまで見届けたい。

宿に戻る前に、ルード傭兵团に出向くことにした。

通信石板に新たな指令が届いていないことを確認したうえで、滞在延長の旨を連絡。

傭兵团にちょっとした依頼もしておいた。もつとも、杞憂で済むなら、それが一番な
んだが。

明日は、子どもたちをシャリーアに帰したあとミコさんに会つて、それから例の遺跡
を調査してみよう。

よし、とりあえずの方針が決まつた。

そこでようやく、やたらと腹が減つていることを思い出した。

そういうやつ昨日の朝食以来、なんも食つてない。ミコさんたちとお茶飲んで、茶菓子を
少しつまんだくらいか。

倒れて目覚めて、そのままだ。
忘れてたとはいえ、よく今までもつたと思う。しかしいつたん自覚すると、もうダメだつた。

?

「た……ただいま……」

ヨロヨロと部屋に戻ると、エリスが飛んできた。

「どうしたの？ 大丈夫？ しつかりして！ だから私が付いて行くって……！」

「腹が減つて……死にそう……」

「……え？」

拍子抜けのような顔をしながらも、子どものおやつの残りをくれた。

「クリフが来たら、みんなでお食事に出かけますわよ」

呆れたようなエリナリーゼの言葉にクリフがうんうんと頷き、ルーシーも俺を上目でキツと見た。

「パパ、ごはんのまえは おかしたべちゃいけないって！ 白ママにしかられるよ。

ごはんがおいしくなくなつたら つくつてくれた人に しつれいでしょ」

子どもたちがよくシルフィから言われている言葉だ。

「そうだな……（もぐもぐ）……でもね、パパ、よく考えたら（ポリポリ）昨日の朝以来、なにも食べて……なかつたんだよ（ごっくん）」

ビスケットに口の中の水分持つていかれて、なんともしやべりづらい。

確かに教育に良くないよな……と肩身を狭めつつ小さいママに言い訳をすると、同情したのか、頭を撫で撫でしてもらつた。

「死ぬほど空腹ならば、遠慮なく食べなさい！」とエリスがミルクを注いでくれる。

赤ママは優しいなあ。腹筋は引き締まっているのに、太つ腹だ。

ビスケットと一緒に家族の優しさを噛み締めつつ、動ける程度にカロリーを摂取したあたりでクリフが登場、場所を移した。

「わたくしたち、明日シャリーアに帰ることにしましたわ。

クリフにも会えましたし、見るべきところはあらかた回りましたもの」

「（こ）の見どころは、宗教関連施設がほとんどだからな。

確かに、子ども連れで何日も過ごすのは大変かもしれない。……そうか、帰るのか」あつけらかんと言うエリナリーゼに対して、クリフがしんみりしている。

「いや、なんというか……タベは貴重な時間を邪魔することになつてしまつて……」

ふたりで過ごす夜を台無しにした俺としては、ひたすらに申しわけない。

「あら、大丈夫ですわ。夜は長いですわよ、ねえ？」

「あ、ああ……」

クリフは喜んでいるのか、おののいているのか、泣き笑いの表情だ。どうぞ朝までご存分に。たっぷり搾り取られてください。

「では、明日午前中に傭兵团アジトに送りましょう。

俺のほうは、もう数日ここで事態を見守ろうと思つてます。

エリスは、俺に付き合つてもらえるかな？」

「当然よ。オルステッドにも言われてるもの。お姫様を頼むつて！」

「……あ!!」

エリナリーゼがニタアと笑つた。

「あれつて、ルーデウスのことでしたのね。……なるほどねえ。

そうそう、聞きましたわよ、教団本部での伝説のお姫様だつこ！

テレーズさんがボヤいていましたわ。『あんなのを見せつけられちゃたまんない、私も相手が欲しい』つて

テレーズさん……それ、いちばん拡散してくれそな人に言つちやいましたか。

家に帰つたら、嬉々として皆に報告するんだろうな……

「彼女を見ていたら、若い頃のゼニスを思い出しましたのよ。

元気に動いて、くるくる表情を変えて……。懐かしいですわね……」

エリナリーゼは遠い目をした。

?

(おまけ)

「さ、ルーシー。ルーデウスに頼まれたお仕事をすませていらつしやいな」

ミリス滞在延長を決めたルーデウスは別れぎわ、中間報告書をルーシーに預けた。

「とっても大切な書類なんだ。

ルーシーなら立派に役目を果たしてくれると、パパは信じている!」

大人が見れば芝居掛かつたルーデウスの態度にも、幼い少女は、緊張感にピンと背筋を伸ばしながら封筒を受け取った。

シャリーラの地下転移魔法陣に戻ってきたルーシーは、キリリと顔を引き締めてオルステッドのもとへ向かう。

「オルステッドさま、ただいまもどりました。わたしと ひいおばあちゃんとクライブです。

「パパと赤ママはまだミリスにいます。だいじなしよるいを もつてきました、どうぞつ」

事前に言うことを決めてきたのだろう。

ひと息に告げられた棒読み気味のセリフと真面目くさつた表情に、オルステッドの口元が微かにほころんだ。

「そうか。では、あとで読ませてもらおう。

……ミリスは楽しかったか？」

無事に任務をやり遂げて、ルーシーはようやく肩の力を抜いた。

「これ、かつてもらいました！」と、嬉しそうに胸のペンドントを示す。

「おとしてかなしかつたけど、ゆびわといっしょに つりあげてもらつたの」

「……う、うむ？」

「そしたらパパが目をさまさなくなつてて、朝になつたらおきたからよかつたです。

ルーシーのおかげよつて、赤ママがないちやつた」

「む、それは…………よく頑張つたな」

「はいっ！」

誇らしげな笑顔だつた。

きっと、自信を深める体験をしたのだろう、とオルステッドは思う。

「じゃあ、かえります。さようなら」

「ああ、氣を付けてな」

あつさり踵を返すと、パタパタと軽い足音が遠ざかつていつた。

なにがあつたのか、報告書を読めば大体わかるだろう。

少女がどんな経験をし、なにを感じたのかまでは書かれていないだろうが。

「俺もよく言葉が足りないと言われるが……」

そうか、聞かされるほうは、こんな感覚なのだな……」

なんとも言いがたい表情を浮かべ、手に持った書類を眺める龍神の姿があつた。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／10

？

(テレーズ視点)

神子様は今日も元気だ。

7人の神殿騎士たちに囲まれて、掛け声も勇ましく木剣を振つておられる。

今やすっかり見慣れたお姿だが、ほんの数年前までまつたく想像もつかなかつた。

以前から明るく振る舞われていたものの、血色が悪く、身体はむくみ、健康的とは言
いがたいご様子だった神子様。

それが今は、どうだ？

毎日のようすに中庭に出ては元気に身体を動かし、はつらつとされているじゃないか。

この庭は、ルーデウスと久しぶりの再会を果たした場所でもある。

あれから、いろいろなことが起こつたものだ。

個人的にも、ゼニスを巡つてのラトレイア家内部の問題、ルーデウスとの対決と敗北、
降格処分……

そのあと、見合いの失敗なんてのもあつた。いやまあ、それはどうでもいいが。※1

さらに言えば、あれから教団内のパワー・バランスが変化したように思う。

力を付けていた枢機卿の勢いに陰りが見えはじめ、教皇派の盛り返しと同時に、教皇の孫クリフ・グリモル神父が頭角を現してきている。

魔族排斥派だった母さんも迎合派へと変節し、今や婦人会会長として教皇を後押しする立場になりつつあつた。

ルーデウスの来訪と、彼が巻き起こした騒動をきっかけに、少しづつ変わつていったのだ。

良いことか、そうでないのかは現状わからない。

結果として神子様の弾けるような笑顔があるわけだから、私個人としては満足している。

今回も、すでに事件が起こつた。

ルーデウスの昏倒騒ぎだ。

しかしあれは彼本人の責任というよりも、責められるべきは彼を呼び寄せた我々のほうだろう。

ナリス姫様の症状の不安定さを把握していたのに、無警戒に対面させてしまった。エリス様が怒つたのも無理はないと思う。

それにしても……

エリス様ときたら、ルーデウスにベタ惚れじやないか。

剣王とはいえ、いちおう女性の細腕だ。ためらいなく大の男を抱きかかえて運ぶか？

あの状況でほかの誰にも触れさせないって、よっぽどだろう。

ウエスト・ポートの税関で初めて会った時も、ルーデウスを抱きしめていて睨まれたものだが、あくまで彼らが子どもの頃の話だ。
あれからゆうに10年はたっている。

男女の間は当初どんなに盛り上がったとしても、3年もすれば空気になるんじやなかつたか。

残念ながら私が身をもつて経験したことじやないにしろ、まわりの相手持ちのヤツらは大抵そんなことを言つてるぞ。

そのうえだ。

エリス様が、ルーデウスにとつて3人目の妻だと知った時には耳を疑つたものだ。

あげく4人目が現れたというもんだから、卒倒するかと思つたよ、マジで。

女性本人に確かめてみたら、さすがにそれは誤解だとわかつたが。

豪奢な巻き髪をした美しいエルフの彼女は、最初の妻の祖母。そして、一緒にいた可愛らしい女の子は、その第一夫人との間の娘だという。

男の子はそのエルフ女性の息子で、ルーデウスとは……どんな関係にあたるんだ？
わけがわからん。

どうして、そんなややこしい組み合わせでミリシオンに来たんだよ。
頭が混乱してくる。私の理解の範疇を超えているな。

とはいえ、ルーデウスが目覚めて親子3人で抱き合う姿に、ちょっと感動したのも事
実だ。

家族の絆つていいな。

うん、あの時ちよちよぎれた涙は、独り身の自分を省みてのものではない。
純粹に、感動の涙なんだ。

？

「まあっ！ ルーデウス様、エリス様っ！」

ミコさんの大きな声で、その場にいる全員の注目を浴びてしまつた。
会えればラツキーくらいの気持ちで、教団本部の建物内に入る前に中庭をのぞいてみ
たら、ビンゴだつた。

ベンチにはナリス姫もいる。

本来ならばミコさんも姫君も、俺のような一介の魔術師が簡単にお目通りできる立場

の人ではない。

ちょっと顔を見に行くだけでも、面会までの手続きがやたらと面倒臭いから助かつた。

なんて考えていたら、茂みを揺らしてデカい銀フクロウがひよっこり姿を現した。

受け付け係の教団職員の代わりに、こいつからのチェックがあつたのか。

バサツとひとつ飛びで俺の鼻先の柵にとまつたナースは、羽を広げれば2メートルはある。なかなかの迫力だ。

大きな目でギヨロリと睨んでくるんで、

「悪さはしないんで、ミコさんと話してもいい？」

と、お伺いを立てたら、2～3秒勿体つけてからギーツと鋭く声をあげた。

なんて言われたのかはわからんが、許可をもらえたと解釈していいよな。

フクロウ相手にペコペコする俺を残して、エリスはミコさんのほうへ真っ直ぐ進んでいった。

「ちゃんと鍛錬を続いているようね。なかなか良くなってるわ！」

「わ～、そうですか？ 嬉しいっ！」

剣王の登場に、騎士たちがあからさまにムツとしているが、そんなのに頓着するようなエリスじゃない。

鍛錬の邪魔をしないよう、俺はナリス姫と話でもしていようかな。
姫君の背後に控えるテレーズと目が合つたから「懐かしいですね、この庭」と声を掛け
ければ、苦笑が返ってきた。

まあ、いろいろあつたのは確かだ。

皆で挨拶を交わしあつたあと、俺は姫君の勧めに従つて隣に腰掛けた。
が、エリスからの鋭い視線に押されるように、ジリジリと端つこのほうに移動する。
再び襲われたりしないか、警戒してんだろうか？

もう同じ失敗はしないつもりでいるものの、あんまり信用ないよな、俺。

「今日は服装の感じが違うのですね」

「白状すると、先日の服は借り物だつたんですよ。失礼に当たつたら、申しわけありません
が」

「どんでもない、魔術師らしくてステキだと思いますわ」

俺もエリスも、通常営業の出で立ちに戻した。当たり前だが、こつちのほうがシツク
りくる。

「サラーハの花芽は、寒い冬の休眠期を越えて、初めてツボミを付けると聞きます。

ミリスの冬はどうなのでしょうね」

元気なミコさんの様子に目を細めながら、姫君が柔らかく問い合わせた。

中庭には、花の時期にはまだ遠いサラーカの木々が立ち並んでいる。

「わたくしの母はアスラ王国の生まれで、城内にはアスラから取り寄せたサラーカが植えられています。

毎年春に花が咲くのを、皆でとても楽しみにしていたものです」

「……ああ、やつぱり。ナリス姫様のお名前が、アスラ風だなと思つていました。
お母君は、俺やエリスと同郷なのですね」

「ラノア王国からおいでと聞いておりましたが……？」

「そういえば、グレイラット姓はアスラの名家ですわね。なんだか親近感が湧きます
わ」
「そうか……エリス様といい、アリスやらクリスやら……アスラにはそんな名前が多い
ですね」

護衛に徹するべく黙っていたテレーズが、思わずといった感じで言葉を挟んだ。

そうなのだ、アスラ王国にはいろんな“リス”がいるのだよ。

ナリス姫が、なおもサラーカの木を眺めながら可愛らしく小首を傾げた。

「サラーカはまっすぐに伸びる木のはずですが、ここのはなぜ、みんな斜めに生えてい
るのかしら。

もしかして、わたくしが見慣れているのとは違う品種なのでしょうか？」

俺もサラーカの品種には詳しくないが、こここの木が斜めなのには、思い切り心当たりがあつたりする。

「ど、どうなんでしょうね。そんな種類があるのかも……」

「まかしてやり過ごそととする俺を、テレーズがバツサリ斬つた。

「以前、この庭一面をサラーカの木が傾くほどのぬかるみに変えた魔術師がおりましてね、その時の名残なのです」

「魔術師……？　え？」

姫君が、俺とテレーズを見比べている。なんだか、どうもすみません。

「我々にも責任はあるし、サラーカを愛する神子様のためにも『聖墳墓の守り人』^{アナスタシア・キーブ}で掘りかえして植えなおそと申し出たのですが、結局そのままになりました。

しかし、春にはちゃんときれいな花も咲きましたので、問題ないようですよ」

「これはこれで、風情がある……かもしだれませんわね」

ナリス姫が優しくフォローしてくれた。

当然ながら、教団が斜めに生える木々に風情を感じているわけではないだろう。

俺への当てつけのため、そのままにしているわけでもないと思う。

「テレーズさん、庭の掘り返しというのは、教団上層部からストップがかかつたんですか？」

「あ？ まあそうなるかな。当時、新隊長から通達が降りてきたからね。

せいぜい1メートルも掘れば良さそうに思えるから、傾いたままにしているのも、なにか理由があるのかもしれないが」

?

(テレーズ視点)

神子様が外に出ることを許されていると言つても、せいぜい小一時間だ。
もう戻らねばならない。

神子様もナリス姫様も名残惜しそうで氣の毒だが、私もこれが仕事なのだ。

「俺たちはもう数日滞在する予定です。

お邪魔でなかつたら、夕方にでもまた立ち寄らせてください。もちろん、なにかあつたら馳せ参じますから」

「わかりました！ 新しくわかつたことや相談したいことがあつたら、すぐにお伝えするようにしますねっ」

神子様が元気に言葉を返す。

彼らが午前中からわざわざ教団本部にやつてきたのは、姫君のご様子を確認するためだつたのだろう。

立ち去る後ろ姿を見送っていると、曲がり角の向こうに隠れる寸前、ふたりのシルエットがぴったり寄り添つた。

エリス様が腕を絡めたようだつた。

見せつけんなよ、と思わず漏れたため息。

騎士たちもゲンナリと目を逸らした。舌打ちでもしそうな雰囲気だ。

「はあ……、ほんとに仲がよろしいですよね！　なんか憧れちゃいます～」
私のとは違う意味合いでこぼれた神子様のため息に、騎士たちが一瞬で色めきたつた。

「ミ、ミコ様！　自分の腕はいつでも空いておりま……あ、アイタ！　イタタ！」

調子に乗ったバカが、中空から急降下してきたナースに引っ搔かれている。

いいぞ、ナース！　思い切りやつてくれ。

先頭に私、後ろには神子様と姫君、姫君の侍女、さらに7人の騎士……長い行列となつて、ゾロゾロ建物内部へと引き上げていく。

背後からは、若い女性たちの他愛のない会話が聞こえてきた。

結婚適齢期からすれば、そろそろトウガたちかけてきた二十歳すぎ。それでも私から見れば眩しくらいに若い。

同年代の女性どうし、気のおけない関係に神子様も嬉しそうだ。

「あら？ 姫様の左手……あの指輪は外されたのですか？」

「ルーデウス様たちの仲むつまじい姿にふと思い付いて、つい先ほど、大きい指輪と一緒に鎖にとおしてみましたの。

「そのほうが、指輪も喜んでいる気がして」

「まあっ、ほんとう！ なんだか以前よりもキラキラして見え」

「きやあっ！」

唐突に聞こえた小さな悲鳴に振り返れば、おふたりがどこにもおられない。

たつた今、楽しげに会話を交わさせていたのに？

呆然と立ち尽くす侍女と、剣に手を掛けて周囲を警戒する騎士たちの姿だけがあつた。

なに？

なにが起こつたんだ？

頭が真っ白だ。

？

「どうかしたか？」

俺のすぐ隣に、ツンと取りましたエリスの端正な横顔。 ちよつと機嫌ななめっぽ

い。

彼女が左腕を強く絡めているため、俺の利き手は封じられるが、それは構わない。でもこれって、散策を楽しむ恋人どうしという腕の組み方じやない。もちろん仲の良い夫婦の組み方でもない。

うむを言わさずグイグイ引っ張られる俺は、さしづめ連行される犯人だ。
 「べつに。……あの姫君となに楽しそうに話してたのよ！」

俺、ご機嫌を傾けるようなことやつたつけ？

エリス抜きで話していたのを、仲間外れだと感じたのか？ それほど盛りあがつていた覚えはないが。

いつもはわかりやすいエリスだが、よくわからん。

「サラーラークの木についてだよ。普通の世間話だ」

サラーラークを植えなおすために庭を掘り返すのを、教団側がストップをかけた。

うつかり深く掘りすぎて、万が一にも例の地下迷宮に障る可能性を危惧した、ということか。

そもそも結界の強さに自信があつたみたいだし、俺が派手に“泥沼”を使つて大丈夫だつたんだから気にしそぎだろうに。

まあ、神経質になるのもわからないでもない。教団の聖地の地下が、夢でみたとおり

の惨状というのなら。

目の前に広がるのは、聖ミリス公園。

花や木々に囲まれた小道が奥へと繋がり、デートコースにはもつてこいのスポットと言えよう。

植え込みの暗がりではチヨメチヨメもできそうだ。……いやいや、ここは聖ミリス様のお膝元、不埒なことは考えてはならない。

今は、ほかにやるべきことがあるのだ。

「これからエリナリーゼの言つてた遺跡に行くんだけさ……」

この件に関して、俺自身どうしたいのかわからない。なにができるのかもわからな
い。

同時に、巻き込まれたくないと思うのも本心だ。

ただ、このままミリスを離れたら後悔しそうな予感がする。

そんな中途半端でモヤモヤとした状態なのだが、なにも言わずにつき合ってくれる工
リスには感謝しかない。

ああ、もしかしてそれで怒つてたのかな？

「今まできちんと話せなくて、すまなかつた。

ふたりきりになれる機会がなかつたし、いくつか裏は取れたものの、ほとんど憶測レ

ベルの話だつたし。

だから信じられなければ、単なる与太話と思つてくれてもいい

「ルーデウスの言うことだもの。信じるに決まつてゐるじゃない！」

眠つてゐる間にみた夢と、それを裏付ける事実について説明する俺の言葉を、エリスは考え込むような表情でじつと聞いてゐる。

俺たちは腕を絡めあつたまま小道を歩き、遺跡に向かつた。

「……まあ、このまま姫君の症状が収まつてくれたら、それが一番なんだよな。

教団も、これ以上俺が首をつっこむのを嫌うだろうし」

「でも……なんだか気の毒な話ね。2000年も待ちつづけていようとしたら」

?

目の前の木立ちがひらけて、朽ちかけた石造りの建造物が現れた。

俺はエリスの腕をそつと解くと、半分崩れた遺跡に足を踏み入れる。

エリナリーゼが教えてくれた隙間を探しながら歩き回るうち、奥の壁に隠れるように、敷き石がズレている箇所を発見した。

火を灯してみると、内部は深いようで底知れぬものの、隙間から空気が流れているのか、炎が揺らめいた。

石の質感も、ほかと少々異なつて見える。

指輪を釣りあげたのは、おそらくここだ。

……ふむ。

埋め立てがおこなわれたというのなら、今見えているこの部分は、本来は建物の最上部に当たるんじゃないか？

そう思つて改めて見回してみれば、確かにこの地表に基礎がある感じではなく、取つてつけたような造りだ。

だとするならば、もともと階下に通じる階段かなにかがあつたはず。

その昇降口を塞いでいるのが、この敷石ということだろう。

地下迷宮で果てたはずの騎士の指輪が出てきたのが、ここだ。

と言うことは、結界の破れ目か、なんかのために作られていた出入り口か。

ここからだつたら地下迷宮に潜れたりしないか？

「ここ？」 地下に通じてるとか？」

「うーん、そんな気がする。石をどかしてみたら教団から怒られるよな、やつぱり。

ちょっと気になるだけで、正直、地下迷宮なんて行きたくないからいいんだけどさ」

「そう？ 面白そうじやない、迷宮」

……うん、そうだね、エリスは迷宮探検大好きだつたよね。

「ルーデウス殿！ こんなところにおられたのか！」

神殿騎士がひとり、ガチャガチャと金属音を響かせながら走つてくる。
さつき別れてから、1時間くらいしか経つてない。

「副隊長がお呼びだ。神子様とナリス姫が姿を消された」

ミリンオン出張記／姫ものがたり／11

？

「なんの前触れもなしに、忽然と消えたんだ」

「床に吸い込まれたような感じだつた」

「いや、床が抜け落ちたみたいに……」

上層部に呼ばれたテレーズと行き違いになつたようで、待つていたのは混乱氣味の
聖墳墓の守り人^{アナスタシア・キーブ}の騎士たちだつた。

目撃者多数にも関わらず、彼らの話はいつこうに要領を得ない。

現場に連れていつもらつても、どう見てもただの通路で、人が入り込める空間もない
ようだ。

「誘拐……じゃないんですね？」

「お前以外に、神子様を誘拐するような不埒なヤツはおらん！」

確かにそんなこともあつたけど、今回は俺は無実だ。アリバイもあるし。

「ミコ様！ できることなら今すぐおそばにつ！」

「いつそのこと、俺が先にミコ様をさらつておけば」

「おい、ちょっと待て！ どさくさに紛れてなんてことを
コイツら、なんで同時にしゃべるかな。
……ならば、ほかに考えられるのは。

「転移魔術……とか？」

「なんだと！ そんなバカなことがあるか」

「この構内で、魔術は使えないはずだつ」

「ミコ様が遠くへ飛ばされたなど、恐ろしいことを口にするな！」

「おお！ ミリス様、今こそご加護をつ！！」

ほんとにうるせーな、こいつら。

「床下に消えたってんなら、地下じゃないの？」

エリスのつぶやきは、騎士たちの声にかき消されて俺にしか届かない。

それはないと思いたい。思いたいが……

ワチャワチャやつてると、憔悴した様子のテレーズが戻ってきた。

「ああ……ルーデウス君、来てくれたんだ……。ここはアレなんで、場所を移そう

現場から中庭へ、さつきと逆のルートを辿っているらしい。

目を皿のようにして手がかりを探す騎士たちと一緒に、テレーズに付いていった。

穏やかな昼下がり。

日差しのうららかさとは裏腹に、一団のまとう空気は暗く重たい。

「ダメだ……お前たちが目撃したことを伝えて、信じてもらえない。

いや、信用してもらえたところで、突然消えたとあっては、どこをお探しすればいいのか見当もつかない……」

ベンチに腰掛ける俺たちとテレーズ、それを取り囲むように立つ7人の騎士。皆が沈痛な様子でうつむいている。鎧がなかつたら背中ごと丸まっているだろう。「テレーズさん自身は、姿が消える瞬間は見てないんですか？」

「ああ。私は彼女たちの前を歩いていたからな。

声は聞こえていたよ。直前まで、他愛のない話をされてたんだ。

ふたつ一緒になつて指輪が喜んでいる、つて姫君が言われた直後だつた

「指輪がふたつ……一緒になつた？」

「大きい指輪と一緒に鎖にとおした、とかなんとかおつしやつて……」

たがいに引き合うとされる指輪。なんらかのマジックアイテムらしい指輪。

揃うと、なにかが起ころ？

夢の中……箱から取り出された指輪は、すぐに騎士と姫君がそれぞれ身に付けた。

その後ふたつ揃つたのは、待ち合わせ場所で襲われながら指輪を拾つた時だ。

右手に剣を持っていたから、自分も指輪を嵌めていた左手で握り込んだのだろう。

そして、そのまま礼拝堂に逃げ込んだ騎士は
——地下に落ちた。

「エリス」

「なに？」

「傭兵団から、昨日発注したスクロールを仕上がつてるぶん全部もらつて来てくれ。

俺は先にあの遺跡に向かう」

「わかつたわ！」

最悪の事態だ。

「ルーデウス君！ 突然どうしたんだ？」

俺たちが走り出した背後で、テレーズの声がした。

「一刻を争うかもしれません。地下に降りられるかやつてみます！」

「地下？ なんのことだ！」

テレーズや騎士達の気配を背中に感じながら、遺跡へと急いだ。

?

闇だ。

突然床が消え、深い穴に落ちたと思ったけれど、意外と軟着陸できたようだ。

少々お尻を打つたくらいで、怪我はない。

腰をさすりながら、神子は身体を起こした。

ホウ。

大きな銀フクロウが、身体を光らせながら暗闇に浮かび上がった。

「ナース！ 良かつた、一緒にいてくれたんですね」

フクロウの放つ明かりを頼りに見回すと、うずくまるナリス姫の姿があつた。傍らには、鍛錬用の木剣も。

「姫様、姫様。大丈夫ですか？」

神子はいざり寄つて、薄い肩に手を掛けた。

「……あ……神子様……ここは？……」

ちよつとした広場に見える。大聖堂の内部くらいの広さはありそうだ。

デコボコと影を落として浮かびあがる岩肌の天井までは4～5メートルほどか、圧迫感はそれほどない。

「わかりません……いえ、わかるかもしません。でも……」

歯切れの悪い返事になつたのは、神子自身が認めたくなかったからだ。

昨日ルードウスに見せてもらつた、緑色の髪を持つ騎士の最期となつた場所。そうでなければいい。でも、もし、そうだつたら……

力……ン

どこかで物音がしなかつたか？

背筋に冷たいものが走り、神子は思わず木剣をキュッと握りしめた。

スケ……スケル……、名前を口にするのも恐ろしい、あの、贅肉ゼロ筋肉や内臓すらゼロの者たちが集まつてきたら終わりだ。

「姫様、立てますか？」

「ああ……足を少し痛めたようです。でも、大丈夫。歩けます」

ヨロめく姫君を支え、みずからを叱咤しながら神子は立ちあがつた。

鍛錬用の動きやすい服装でよかつた、と思う一方で、ドレス姿で足まで傷めてしまつた姫君が心配でならない。

ここは自分が、気持ちを強く持たねば。

神子はそう心に決める。

「ナース、こんな広いところで、スケ……スケさんたちに囲まれたら危険です。

どこか、避難できそうなところを探しましよう

「……スケスケさん？」

「ええ、色白で骨格美人の……。出会わなければいいのですが」

ホツ、ホツ、ホウ。

小刻みに鳴いてトコトコ歩き出したナースのうしろを、ゆっくり進む。

通路らしき分岐がある。さいわい閉じ込められているわけではなさそうだ。

虫かネズミか、なにか小さな生きものが物陰から走り逃げるたび、ふたり一緒にビクリと飛びあがつた。

ところどころに石畳や石壁の残骸など、人工物らしきものの跡がある。

自然にできた洞窟というわけではないのだろう。

身を隠せる建物でも残つていればいいけれど、と神子は思う。

木剣を持つのと反対側の腕に、姫君がしがみついている。伝わってくる震えとほのかな体温。

「大丈夫。しばらく待つたら、きつと助けが来ますよ。

ルーデウス様も、なにかあつたら来てくれるつておつしやつてたじやありませんか。

ああ見えて……つていうと失礼ですけれど、の方、すつごくお強いんですよ？

うちの騎士さんたち全員で束になつて掛かつても、まつたくかないませんでしたも

の」

「ええっ？　あんまりそんな感じには……つて、ほんとに失礼ですわね」

ウフフ……と笑いあうと、少し気持ちが落ち着いた。

これまでの人生、守られる立場にしか身を置いてこなかつた。

い。

彼らのためにも、こんなところで終わるわけにはいかないのだ。
もちろん姫君も一緒に、無事に帰つてみせる。

神子は木剣を高らかに突きあげた。

「私は今から、ただの神子ではありません。

剣王エリス様の弟子、ミコリスなのですっ！」

“よしつ！”とばかりに木剣を握る手でガツツポーズ。
ミコリスこと神子は、しつかりと暗闇を見据えた。

？

「展示遺跡になんの関係が？」

お、おい、ルードウス君！　なにをする！」

『土槍』！

下にはちゃんと地面があつたらしく、見えない階下の底から、敷石を持ちあげながら

数本の土槍が突き出した。

指輪が釣れたと思しきあたりだ。

「ここから内部に入れればいいが。

ダメなら地面を結界ごと、力ずくでブチ抜いてみるしかないだろうが、多分無理だろう。

なにしろ数百年ものの結界だ。

「貴重な遺跡だぞ！ 気でも狂ったか！」

後ろから鎧の腕が伸びてきて、羽交い締めにされた。

「俺のやることに、関わらないほうがいいですよ。

皆さんの教団内での立場が悪くなるかもしません」

「……どういうことだ？」

「教皇から口止めされていたのですが……」

思わずぶりな言い回しをすれば、俺を抑えていた騎士の腕が緩んだ。

「この一帯には、教団設立当時からの町並みが、地下迷宮となつて残っています。

長いあいだ強固な結界で隔離されつづけ、誰も入ることはできない迷宮が。

ひと握りの幹部しか知らないことなので、訴えても存在を認めたりしないでしよう。

ですが恐らく、ミコさんたちはそこにいます」

いつの間にか勢ぞろいしていた騎士達が、目に見えて動搖した。

「聖なるミリシオンに地下迷宮だなんて、寝ぼけたことを！」

「ミコ様が迷い込まれたというのか？」

「幹部しか知らないことを、部外者のお前がなんで知っている！」

「教団に対する不敬発言だ！ 証拠はあるのか！」

ああもう、鬱陶しい！

「証拠は俺だ!! 俺自身が一度落ちたんだ！（夢の中だが）」

キレ気味に叫べば、ようやく静かになつた。

「ここからなら、地下に降りていけるかもしません。ぶつちやけ、ただの勘ですが。

ただ、急いだほうがいいのは確かです。中にいる魔物に襲われる可能性があります。皆さんには教団からの命令がないと動けないでしようが、せめて邪魔はしないでください

い

「み……ミコ様が……襲われる……？」

「そ、そんな……」

うろたえる部下たちを思案げに一瞥したテレーズは、すぐに視線を俺に向かた。

「わかった。私が一緒に行こう。

私なら、どちらにしろ明日から謹慎を言い渡されているし、処分も決定している

「副隊長っ！」

騎士たちのすがるような呼びかけにも、テレーズの瞳は揺るがなかつた。

遠巻きになる騎士たちを尻目に、浮きあがつた敷石を取り除いていくと、ぽつかりと暗い空間が現れた。

思つたとおりだ。ここから、さらに下へと降りていけそうだ。

「ルーデウス！　10枚ちょっとできてたわ！」

光の精靈のスクロールを持つて、エリスも戻ってきた。

？

7人の騎士たちは、テレーズから地上待機を命じられ、置いてけぼりにされたワンコの目で俺たちを見送る。

慕つてやまない、大切なオタサーの姫の危機なのだから、気が気じやないだろう。

皆がミコさんの身を心配しながらも、教団の騎士として勝手な振る舞いは許されない。

こちらとしては手を貸してもらえないで残念だが、動けない彼らも氣の毒と言えば氣の毒なのだ。

騎士たちと別れ、空いた穴から潜りこめば、やはり建物内部は階層になつていた。階段だつたらしき部分に穴を開けつつ、下へ下へと降りていく。

ひんやりとまとわりつく空気は、湿気を含んで重い。

ベガリットの転移迷宮では感じなかつた独特の陰気さは、迷宮探検というよりもお化け屋敷に踏みこむ感覺だ。

カビ臭いような腐臭のような、なんとも言えない匂いは夢の中で経験したのと同じ。まだ入り口にも着いていないのに、すでに氣の滅入る鬱々とした雰囲気が漂つている。

「テレーズさん、迷宮内部では大掛かりな火魔術は使わないでください。

「酸化炭素中毒になる恐れがあります」

「……いつさんか……？　どちらにしろ、火魔術は初級レベルしか使えない。
ほかの系統も期待しないでくれ」

「えーと、ちなみに神撃魔術はどうですか？」

「それだけは中級だな。上に残して来た連中には、上級以上の使い手が複数いるんだが」「内部には、アンデッド系の魔物が多数いると思います。

頼りにしてますが、どうか無理はしないでくださいね」

5～6階分も降りて最下層に着いた時、見えない壁に行き当たつた。
結界だ。

「ルーデウス君、これ、かなり強固なヤツじやないか？」

なるほど、刻まれた魔法陣を見る限りそれなりに固そうだ。

しかし迷宮全体を封じている結界は、教皇の自信たっぷりな様子からも、こんなものじゃないと思う。

それこそペルギウス並みの術者が、強力な魔道具を介して施術するようなレベルだろう。

その中にあって、ここは勝手口か非常口みたいなものなのかもしれない。

「王級までなら問題なく破れますか……これはどうかな？」

頑張ればいけるんじやないですかね。とにかく、試してみましょう

「……化け物だな」

「さすがルーデウスね！」

『岩砲弾』ストーンキャノンを最大出力でぶつ放します。

まわりが崩れてくるかもしぬないので、気を付けて。

ほんとうは、迷宮では土魔術も使用は要注意なんですよ。良い子は、真似をしてはいけません

「安心してくれ。誰も真似なんかできないよ」

「できるだけ下がって！ 行きますよ」

こんな至近距離で、全力岩砲弾は初めてだ。

「……『岩砲弾』！」

ドガン！ ゴゴゴ……

放つとほぼ同時に、ものすごい音と地響き。

跳弾のような石の破片をやり過ごしたところで、すぐに追い討ちをかけるように石やら岩やらがドドつと降ってきた。

……ちよつ、ちよつとマズいかも。

『アースフォートレス
土 岩』！」

エリスとテレーズの腕を掴んで、砦の中に引きずり込んだ。

外は瓦礫の雨アラレ、土埃が口に入つてくる。

長く感じたものの、多分1分もしないうちに落下音はまばらになつた。

「……収まつたか」

瓦礫をよじ登りながら砦から出ると、下半身を土に埋めた光の精霊ちゃんが健気に光つっていた。

「私も、魔術の使用は要注意……というのに心から同意する」

続いて這い出してきたテレーズの、本来青いはずの鎧はすっかり灰色だ。

「こんなに崩れるとは……ちよつと加減を間違えたようです」

なんだか、どうもすみません。

エリスもけつこう煤けている。まあ、先頭にいた俺が一番うす汚れてるはずだが。
こんなとこに長居したら、あつという間に鼻毛がボーボーになりそう。
爆発コントのような姿の3人がそれぞれ装束の埃を払い、3人揃つてむせて咳き込んだ。

かくして、地下迷宮への入り口が開いた。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／12

?

「実はわたくし、冒険者に憧れていた時期がありまして……」

『ペルギウスの伝説』や『三剣士と迷宮』などは、繰り返し読みましたわ』

「まあステキ！ なんて心強いのかしら。

私は読み物といえば、絶対ばかりでしたもの」

おつとりと交わされる会話は、声だけ聞けばテラスで紅茶でも飲んでいる雰囲気だ。平常心を装いつつ、お姫様ふたり手を取り合って、ほの光る守護魔獣ナースのあとを付いていく。

トンネル状の通路を抜けて、ふたたび広めの空間へ。

ナースの身体から発する光では、遠くまで見渡せるわけではなかつたが。

「本で読んだだけで、確かに違ひはないのですが……ここは雰囲気が迷宮に似ているように感じます。

神子様、どう思われますか？」

「ミコリスです」

「え？」

「ミコリス。敬称略でお願いしますね」とニッコリ。

「……どう思われますか？ ミコリス」

「私も迷宮だと思います。それで、迷宮といえば魔も……」

ギーッ！

ナースが鋭い声をあげた。

「なつ、なんですか？」

目を凝らすと、明かりが届くギリギリのところに、大きく黒々としたなにかがいる。

「……魔物、でしようか？」

忽然と現れたソレは、すいかサイズの頭胸部にひと回り大きく膨らんだ腹部、”ぐ”の字に折れた太い8本脚を蠢かして近づいてくる。

脚を広げれば2メートル近くありそうだ。

「ひいっ！ ……く、蜘蛛？」

神子にとって、蜘蛛ほどお近づきになりたくない生き物はいなかつた。

“命あるものに慈しみを”というありがたい教えも吹っ飛ぶほど、理屈ではなく生理的に受け付けないのだ。

「いつ、いいえ、これは似ているけれど蜘蛛じゃない。まったく別もの、ただの魔物です

よねつ！」

自らの言葉をむりやり打ち消した神子は、姫君の手を離すと、背後に庇うように一步前に出た。

ブツブツと盛り上がったたくさん目の目が、キヨロリと動くのがわかる。

黒々とした毛の生えた脚が、おぞけたつほど気持ちが悪い。

「これは魔物、魔物なのよ……！」

涙目になりながら、神子は木剣を両手で構える。

大きな蜘蛛型の魔物が神子に向かつて跳躍したのと、ナースが滑空してきたのは同時だつた。

空中でもつれ合い、獰猛な声を上げながら両者は地面に落下。

そのままナースは少しもひるむことなく、自分よりひと回り大きな相手を鋭い爪で攻撃した。

しかし敵は鉤爪までついた脚が8本、ついでに牙もある。

正面から組み合つたら不利だ。羽毛が飛び散つた。

「ナース、離れなさい！」

黒々とした頭部に爪を突き立てたまま、バサバサと音を立ててナースは飛びあがつた。

バランスを崩しながらも天井スレスレまで上昇すると、たくさん脚で抵抗するのをものともせず、翼を使つてはたき落とす。

腹を見せて地面に落ちてきたところに、木剣を持った神子が襲いかかった。

「えいっ！　えいっ！」

勇ましいかけ声に反し、大きなダメージは期待できそうもない。それでも、ポカリポカリと殴りつづけた。

大蜘蛛が体勢を戻しかけた時、ふたたびナースがつかみあげて裏返す。
「このまま連携プレーで行きましょう！　ナース！」

ポコッ！　ポカリ！

気長な戦いが始まりかけたところを、ナリス姫の緊迫した声がさえぎつた。

「ミコリス！　後ろから白っぽい魔物が近づいてきますわっ」

隙をみて一瞬だけ振り返ると、通路奥の暗がりに、なにかがぼんやり浮かびあがつているのが見えた。

ガシャガシャという硬質な音を響かせながら、急速に接近してきているようだ。

「ま、まさか、スケさんっ？！　なんで、こんな忙しい時に来るのつ！」

木剣を振るいながら、スケルトン神子は絶望的な状況に声を上げた。

前門の大蜘蛛、後門の骸骨兵だ。

現状でさえ持て余しているのに、両方相手にできるはずはなかつた。

「ああっ！」

背後で姫君の悲鳴。

つられるように思わず身をすくめた神子の視界を、白っぽいものが高速で横切つた。かなりのスピードで転がり込んできた一体のスケルトンが、大蜘蛛を巻き込んで数メートル転がると、フツと姿を消した。

?

「……え？」

「消えちやい……ました……？」

2体の魔物が消えたあたりに恐る恐る近寄つて確認すると、地面に亀裂があつた。この中に落ちていつたのだろう。

「あ、あの蜘蛛のような魔物が突然現れたのも、きっとここから出てきたのですね……」

姫君の声は、わずかながら震えている。

「1匹見かけたら100匹いるつて……騎士さんの誰かが言ついてたのを思い出しました」

姫君をいたわるようにその腕をそつと取つた神子が、地割れ部分を覗きこんでつぶや

いた。

「魔物が、ですか？」

「さあ、なにか害虫の話だつたかと……」

100匹の蜘蛛など、地獄絵図でしかない。

うつかり想像しかけたのを、神子は頭を振つてなんとか打ち消した。
「そういえば……迷宮の魔物って基本的に群れで動くみたいなのです。

さつきのはきつと、迷子の子だつたのでしよう」

姫君が本で得た迷宮知識を披露するも、まったく嬉しくない情報だつた。

「早く、どこかに避難したほうがよさそうですね。」

ナース、ケガはありませんか？

毒とか糸とか出されなくて、ほんとうに良かつたです。

さあ、出発しましょう！」

深く空いた亀裂部分を迂回して、先ほどよりも周囲を警戒しながら進むうちに、かろ
うじて形を残す石造りの建物を発見した。

シンと静まり返つた内部を、用心しながら確認してみる。

屋根の辺りが崩れ、床も一部抜けているのが多少不安なもの、壁は比較的しつかり
しているようだ。

窓がないところをみれば、住居ではなく倉庫のような用途で使われていたものだろ
う。

「ちょっと待つてくださいな」

ハンカチを取り出したナリス姫が、建物外部のできるだけ高いところに引っ掛けた。
「ルーデウス様のハンカチです。目印になるかしら。

お返しするのを忘れていたのですが、役に立ちそうで良かつたですわ」
扉など、とうの昔に朽ち果てていたであろう入り口に、瓦礫でバリケードを築いた。

?

これ以上崩れないよう、結界の開口部付近を土魔術で固めておく。

地下迷宮への出入りができるのは、ここからだけだ。

土砂で埋まつて場所がわからなくなつたら、本気でシャレにならない。

光の精霊がふわりと照らすのは、いたるところに瓦礫が積み重なる以外、空虚な空間
だつた。

建物の痕跡が墓標のように、荒れた地面に歪んだ影を落とす。

昔、たしかにここで生きていた人々の営みの名残が、殺伐とした静けさを余計に際立
たさせていた。

「なんか陰気な場所ね」

迷宮大好き娘のエリスが、残念そうな声を漏らした。
もとより探検に来たわけではないのだが、用事さえなければ、一刻も早く退散したい
空氣だと思う。

「教団本部はこっち方面で合つてますか？」

正面を指差してテレーズを見やると、彼女はわずかに眉を寄せて自分の方向感覚をた
どつた。

「そうだな……もうちょっと右手かな。しかし、本当にこんなところがあつたとは……」
直線コースは無理だろうが、なるべく方向はずらさないようにしないと、今は時間の
ロスが痛い。

「光の精霊です。スクロールを広げればすぐ使えます。

なるべく一緒に行動したいもんですが、必要に応じて利用してください」

数枚ずつ手渡したスクロールを、ふたりそれが懐にしまうのを待つて歩きはじめ
た。

?

「さつき、君自身が地下に落ちたことがあると言っていたが、あれは？」

「まあ、言葉のアヤというか……正確には、俺自身ではないんです。眠りこけてた時に、ほかの誰かとして体験を……」

「まさか、夢での話だったのか？」

テレーズの声に滲んだ疑いの色に、エリスが即座に反応した。

「ルーデウスが信じられないなら、今すぐ帰りなさい！」

自分たちだけで、どうにかすればいいわ！」

「い、いや、そんなつもりでは……」

ピシヤリとしたエリスの物言いに、たたらを踏んだテレーズが俺にぶつかつて立ち止まる。

「かまいません。テレーズさんのお気持ちはわかりますよ」

エリスが俺を全面的に信用してくれるのは嬉しいけれど、仲違いしている場合ではない。

「教団の意向に背く覚悟で付いて来たのに、根拠が『夢』じゃ、たまつたもんじやないでしよう。

でも、あれは通常の夢とは違います。俺に憑依した、ナリス姫様に関係する誰かの過去の記憶です。

ミコさんにも見てもらいましたし、なによりも、この場所の存在自体……つと、

『ストーンキャノン
岩砲弾』！」

テレーズの背後からヌツと現れた大きな影を、瓦礫ごと弾いた。
エリスもすでに跳躍し、別のヤツを袈裟懸けに斬っていた。

石や瓦礫を含んだ大きな泥のかたまりと、そこから伸びる太い腕と脚。
要するに、首から上がない泥の人型だ。こいつは……

「マツドスカルか？」

体長は俺よりちょっと高い程度、ベガリッド大陸で見たものよりも背が低い代わり
に、幅や厚みが大きいぶん威圧感がある。

さらに、泥以外のものもゴロゴロ取り込まれたボディー。マツドスカルの亞種っぽ
い。

俺とエリスが倒したはずの2体が、瓦礫の向こうでムツクリ起きあがると同時に、
こつちに向かつて泥の塊や岩砲弾を飛ばしてきた。

身体はすでに修復されているようだ。

「エリス！ テレーズさん！ こいつは泥の身体を斬つても再生します。

胸のあたりにドクロがあるはずですから、そこを狙ってください！

土魔術も使うので、注意して！」

1体目が繰り出す魔術に対処する間にも、新手が現れて泥やら岩砲弾やらを放つてき

た。

テレーズの援護をしつつ、手近にいるマツドスカルの相手をするのが次第に忙しくなつてくる。

「つて、あれ？ おかしいな」

「ドクロを壊せば一発のはずが、肝心なモノが見つからない。どうなつてんだ？」

「ドクロなんて入つてないわ！」
マツドスカルのズングリした大きな身体を、大根でも切るように横にスライスしながらエリスが叫んだ。

一応、A級の魔物なんですが？

さすが剣王様、切れ味すげえな。

俺も真似して氷霜刃アイシクルエッジで輪切りにしてみるが、こつちのヤツにもドクロは見当たらぬい。

ひよつとして、マツドスカルじやない別の種類か？

「ルーデウス君、下だ！ 蜘蛛だ！」

泥に剣を取られて苦戦していたテレーズが、なにかを蹴飛ばした。

サツカーボールのように跳ねあがつたソレを岩砲弾で破壊。

すると、彼女が相対していた魔物が人の形を解いて、土塊となつてバラバラと地面に

落ちた。

なるほど、コイツらはドクロを自分以外に持たせていたんだな。

その気で見ると、物陰に何匹もの大蜘蛛がいる。腹部が不自然に膨れているのは、ドクロを収納しているせいか。

蜘蛛はすばしこいだけで、いつたん捉えると簡単に斬り伏せられた。

この見かけからして糸くらいは吐きそうなもんだが、単なる荷物持ちだつたのだろう。

「これは私に任せてくれ！」

「わかりました！」

エリスが次々とマッドスカル本体を無力化していく、テレーズは蜘蛛を斬る。

俺はふたりをサポートしながら臨機応変に動き、岩砲弾でドクロを碎いていった。

最初に遭遇してからものの5分で、あたりは蜘蛛やドクロの残骸を覗かせる泥の山になつた。

？

「呆気なかつたと感じてしまうのは、魔物が弱いというより、君たちが強すぎるのだろうな。

剣士と魔術師で相性もいいし、ふたりの息もピッタリ合っている」

「もちろんよ！」

エリスが機嫌良く言葉を返す。

褒められたのもあるけれど、暴れてスッキリしたというのが大きいんじやなかろうか。

ミリスに来てから鍛錬も思うようにできてなかつたし、鬱憤も溜まるだろう。

「……先ほどは、感じの悪い言い方になつてしまつて悪かつた。

どちらにしろ、君たちの力を借りないと、私にはどうすることもできない。

神子様の存在は、教団にとつてだけではなく、我々『聖墳墓の守り人』の宝なんだ。

幼い頃から見てきたせいで、私個人としては、恐れ多くも自分の娘のような思いを抱いている。

上で待つている部下たちのためにも、お助けできる可能性があるならば、どんなところにだつて行こう

「ええ……大丈夫ですよ。俺たちも気持ちは同じです」

「ちなみに、その夢の内容を教えてくれないか」

先を急ぎながら、テレーズにもできるだけ簡潔に伝える。

途中、何度かマツドスカルの生き残りが現れたけれど、要領がわかっているので手分

けしてあつという間に処理。

そのほか巨大な兵隊アリやら動く鎧やら、迷宮らしい魔物がちよいちよい現れたものの、いずれも小物だ。大した足止めにもならない。

「……その騎士は、結局どうなったんだ？」

「大量のスケルトンに囲まれ、潰されて……たぶん」

テレーズが、なんとも言えない表情を浮かべた。

「確かに悲劇だ……けれど、短い人生であつても運命の相手に出会えたのは幸せなのかもな」

独り言のようにポツリと発したテレーズを振り返ると、口調を強めて言葉を継いだ。
「まあ要するに、数多くのスケルトンと、アンデット系のさらに上位の魔物が潜んでいる
ということだな」

「力で押せないこともないですが、モノによつては神撃魔術でないと手間取るかもしれません。

その時には、よろしくお願ひします」

体感的に、そろそろ教団本部の地下に差しかかる頃かもしれない。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／13

?

「先ほどは、本当にありがとうございました。」

冒險者に憧れていたなどと言つておきながら、なんにもできず申しわけありません」

「なにをおっしゃいますか。ナリス姫様は『お姫様』ですもの、当然だと思います」

薄暗がりの中、壁の外側に漏れないよう声を潜めながら、うら若い女性たちが言葉を交わす。

黙りこむと不安と心細さに押しつぶされそうで、おしゃべりで気を紛らわしていた。

「それならば、ミコリスだつて神子様でいらっしゃるのに。」

そう、いつも騎士様たちに大切に守られて、すぐく……」

「……？　姫様？」

曖昧に途切れた言葉に、神子は首を傾げた。すぐ横にいる姫君は、なにやら遠い目をしている。

「あの……実はわたくし……冒險者よりずっと強く心惹かれておりましたものがあつて

……」

騎士様、ですの。

女性騎士のテレーズ様も素敵ですけれど、自分がなりたいというわけではなく……騎士様のお姿に、と、ときめいてしまうのです」

「恋バナと聞けば、お年頃の神子がパツクリ食いついた。

「まあっ！ もしかして、聖墳墓アナスタシア・キープの守り人の中に想い人が？」

神子はワクワクと、騎士たちの姿を順に思い浮かべていった。

幼い頃から馴染みも深く、彼らのことを心から好ましく思っている。

……が、自分とて、そこそこ客観的な審美眼は持っているつもりだ。

残念なことに、王子様との縁談も経験してきたというお姫様の目に止まりそうなイケメンは……と考えれば、唸らざるをえなかつた。

エリート騎士集団であるにも関わらず、さらに兜で顔もろくに見えにないにも関わらず、皆……なんというか雰囲気がモツサリしているのだ。

「いいえ、あの鎧姿そのものが好きなので、特定の誰かというのではありません」と姫君。

……ああ、やつぱり。

せつかく独身者も多いのに。

肩を落とす神子に気が付かないまま、はにかんだ表情を浮かべながらナリス姫は言葉

を続ける。

「わたくしの国にも、神殿騎士の方々が駐在なさっていますでしょ？」
小さい頃からずっと、彼らの姿を見かけるたびにドキドキしていました。不思議です
わね？」

ナリス姫の中の、緑髪の騎士を慕う部分がそうさせているのかもしれないと神子は思
う。

しかし、自覚のない彼女に、今さら重く悲しい話を聞かせても始まらない。

「騎士の鎧もそうですが、制服姿つていつそう素敵に見えてしますよね。

ほら今日の、ローブを着たルーデウス様や剣士姿のエリス様も格好良かつたじやあり
ませんか」

「そうですね。でも、初めてお会いした時の服装も素敵に着こなしていらっしゃいまし
たけれど……つつ……！」

「？　どうされました？　姫様」

話の途中で息を飲んだナリス姫が、そのまま顔を両手で覆つてしまつた。隙間から覗
く肌が赤い。

「なんてこと……！」

たつた今気付きました。わたくし、あの時の口づけが、はつ……初めてだつたのです

)。

しかも、はしたなくも自分から……」
 「あ、あらあ……で、でもっ！ ルーデウス様は別に気にしてらっしゃらないみたいですが
 からつ」

初めてキスをした相手に大して気にしてもらえないのも、それはそれで悲しいことかも
 もしれないと思つたりもするが。

神子は、遅まきの羞恥に震える姫君の背中を撫で、話題を元に戻した。

「ナリス姫様の制服は、ドレスに冠でしようか。

私は、神事の際に身に付ける白装束かも……あ……？」

聞こえた。

遠く、かすかに……だけれどはつきりと。

固いものどうしがぶつかり合う音が。

？

骸骨兵スケルトンが、文字どおり雲霞のごとく湧いてくる。

しかも関節からバラバラに崩れても、すぐに復活するからタチが悪い。

背後によるだろうもつと上位の魔物を断たなければ、次々と現れ、復活してキリがな

いのだ。

完全に消滅させるには、粉々に打ち碎くか、1体1体神撃魔術を施すしかなかつた。

『フロスト・ノヴァ』

凍りついたころを、岩砲弾で砕いていく。

年代物の骸骨であるコイツらの内部に、水分はほぼない。

凍りついても表面上だけのことだ。せいぜい足止めができる程度。

多少は脆くなるくらいで、結局は力で破壊する羽目になる。

「エリス、光の太刀は迷宮の壁や天井まで壊す恐れがあるから、なるべく使わないでくれ。

ミリシオンには大きな湖や川がある。水が流れ込んできたら一大事だ』

「面倒だけれど、わかっただわ！」

魔術も大がかりなものは使用が制限されるのが、なんとももどかしい。

神撃魔術で数体を灰にしたテレーズが、魔術をやめて剣に戻した。

「キリがない。ここで魔力を消費してしまうと、幽鬼レイスあたりが現れた時に対処できないからな」

そうはいうものの、テレーズの腕力では、1体倒すのに何回も剣を振るわなければならなかつた。

スケルトンは、生前の能力を残すという。

感情や思考まで残存しているとは思えないが、武器を握りしめている者や服の残骸らしきボロを巻きつけている者もいる。

凍させていなかつたら、きっと手ごわい動きを見せるのもいたはずだ。

どう見ても人族とは思えない異形の骸骨は、人魔大戦時の魔族のものなのだろう。手近なところから凍させて動きを止めでは、復活できないよう細かく破壊しつづけた。

「……テレーズさん。スケルトンって、この場所で死んだ人間なんですね？」

「そうだつ」　テレーズの息はわずかに上がっている。

「戦いの跡地とはいえ、あまりに数が多くありませんか？」

戦後復興時に陥没したために埋め立てられたと聞いたのですが、それにしては……」話しながらも手は止められない。

もう百体以上は片付けたはずだが、新手がどんどん押し寄せてくる。

これでは体力を奪われるばかりだ。俺たちはともかく、テレーズが持たないかもしれないと、

上位のアンデッドを探したほうがいいだろう。早くミコさんたちを探さないといけないからな。

「ちよつと雷落とします。大きな音が出ますよ！」

『電撃』！
[ライトニング]

充分に離れてはいたものの、轟音と閃光にふたりの肩がビクリと上がった。

肉体のないスケルトンは感電してもどうつてことなさそうだが、それでも衝撃で数十体が吹っ飛んだ。

俺の目的はそれよりも光だ。数瞬、昼間の明るさで遠くまで見通しがきいた。

「ん？」

あたり一面茶色と灰色の中に、ほんの小さく真っ白いなにかが見えた。

「すみません、俺あつちに行つてみます。なにがあるようだ」

時間稼ぎに、強めに放つたフロスト・ノヴァで見えていた範囲のスケルトンをすべて凍らせ、一部は重ねて氷槍[アイスランサー]で縫い止めておいた。

これでしばらくは、もつだろう。

「エリス、悪いけどあと頼むな！」

「ええ、寒いんだけど！」

「身体動かしてたら、あつたまるよ」

エリスからの苦情を背に、碎冰船のように凍つたスケルトンを砕きながら、俺は広間を抜けていった。

?

カタカタという音が、バリケードを揺らしている。
 さらにはどこかで爆音まで聞こえ、ズシンとした衝撃とともに建物そのものが振動した。

外はどうなっているのか、不安しかない。

非力なふたりが協力しあつて入り口を瓦礫で塞いだものの、決壊するのも時間の問題だろう。

塞いでいた石のひとつがグラグラと揺れたのを、慌てて押さえ込む。

ホツとしたのも束の間、同時に別の箇所があちこち揺れはじめ、ついには全身を使つて必死に支えた。

しかし、急ごしらえで寄せ集めのバリケードを押さえ留めるのには、どうにも無理があつた。

ボコリ

外れた石がひとつ神子の足元に転がり落ち、そこから骨の腕が入り込んだ。

「ひっ！」

ドレスの裾をつかまれた姫君が、後ろに飛びずさろうとしてバランスを崩す。

「姫様っ」

神子は立てかけていた木剣を手に取り、思い切り振り下ろした。

バキヤンと音を立てて肘から先の骨がバラバラになり、自由になつた姫君が体勢を立て直す。

が、そうする間にも、空いた穴を広げるよう、腕の先を失つたスケルトンが上腕部と頭蓋骨をねじ込んでくる。

「このスケさん、まだ入つてきますっ！」

神子がさらに木剣を振り下ろして頭部が落ちようが、スケルトンは侵入をやめなかつた。

姫君も石を手に参戦し、中に入つてきた部位の順にバラバラに殴り落とすことができた。

「……やりました？」

「いえ、ダメですっ」

ちりぢりになつていたスケルトンの破片がスルスル集まる様子に、厳しい表情を浮かべたままの神子は、さらに打撃を加えつづける。

「たしかこのヒトたちは、放つておくと再生しちやうのです！」

「ああっ、大変！　ミコリス！　別のが侵入してきましたわ！」

石で殴るも、姫君ひとりではパワーが足りず、ズルズルと入り込んでくるのを止められない。

とうとう全身が目の前に現れた。

「どどどどうしましよう!!」

「姫様、こっちへ！」

2体目に気をとられた隙に、最初のスケルトンまで再生してしまった。

飛びかかろうとしたスケルトンたちに、ナースが斜め上から体当たりした。

不意打ちに、スケルトンは互いにぶつかり合うようによろけたものの、その硬い腕を振り上げてナースを打ち据えた。

「あっ！ ナース!!」

その間、頭上からパラパラと小石が降つてくるのを感じたが、彼女たちには見上げる暇も気にする余裕すらない。

2体のスケルトンと向き合ったその時、天井の破れからなにかが飛び込み、シユツと目の前をよぎった。

「えっ？」

立ちふさがるように目の前に現れたのは、やはりスケルトンだつた。剣を手に、剥き出しの背骨をよじつて自分たちのほうを振り向いた。

「さ、3体目……！」

眼球のない空っぽの眼窩を向けてくる、もとは人間だった魔物……
ナースが力尽きたのか建物内がゆつくり暗くなり、ほの光るスケルトンたちだけが浮かびあがつた。

「うそ……こんなことつて……」

神子は呆然と立ち尽くした。

?

雷光に浮かんだ一瞬の記憶を頼りに進み、やがて目標物を視認できる距離まで来た。
比較的原型をとどめている建物の残骸、その壁にある布っぽい白いもの。

周囲のものはどれも100年単位の年代物の中、明らかに異質な、真新しい白さが目立つていて。

この辺りのスケルトンまでには、さつきのフロスト・ノヴァは届いていない。

鬱陶しく行く手を阻もうとするヤツらを凍らせては壊し、建物に群がっていたのもすべて排除すると、引っかかっていた布をもぎ取つた。

そこにアスラ王国の紋章をチラリと確認、すぐに入り口を塞いでいたらしき瓦礫を泥沼で沈め、そのまま建物内部に飛び込んだ。

「！」

内部の暗さに俺の目が慣れるわずかの時間に、1体のスケルトンが奥の床下に姿を消した。

一瞬注意を取られるも、今はアレを迫いかけるより、ミコさんたちの無事を確認するほうが先だ。

俺に続いて光の精霊が建物内にツウツと入り、あたりを柔らかく照らす。

「……ルーデウスさま……」

ふたりの女性が、ヘタヘタとその場に座り込んだ

周囲にはガイコツの残骸が粉々に散っている。

「それは、おふたりが倒したんですか……？」

「いっ、いえ、それが実は」

「つ！　『岩砲弾』！」

入つてこようとしたスケルトンを吹つ飛ばし、すぐに入り口を土壁で塞いだ。アースウォール

「……お話の途中にすみません。とりあえずはもう安全です」

「そうだ！　ナースがつ！」

ミコさんの視線の先には、翼を不恰好に広げたままのフクロウが壁際に倒れていた。近付いて、そつと手を添えてみる。

……温かい。大丈夫、骨折はしてそうだが、命に別状はない。
俺は心配顔のミコさんに、小さく笑みを返した。

そういうえばコイツを抱くのは初めてだな……などと思いながら、乱れた羽を整えながら腕に抱える。

そう重くはないが、なかなかのボリュームだ。
エクスピーリングを詠唱。

ほんのりと光に包まれたナースは小さく身じろぎし、
ゆっくり開いたまん丸の目で俺を見上げ……

ギーッツ!!

威嚇の鳴き声をあげて暴れると、翼で俺を押しやつてミコさんのほうへと逃げていった。

「お前なあ」

好かれてないのは知ってるけれど。そりやないんじやないの?
苦笑しか出てこない。

「こら、ナース!　助けてくれた方に、その態度はいけませんっ!
……ルーデウス様、ごめんなさい。ありがとうございます」
いや、まあ、フクロウ相手に怒るほど長閑な状況でもないし。

「コイツなりに、精いっぱい守ってくれたんでしょう」

「ええ。この子が身体を張つて、守つてくれました」

ミコさんは愛おしそうに羽毛をそつと撫で、ナースも気持ち良さげに目を細めた。
俺はナースを抱きかかるミコさんから離れ、座り込んだ姫君のそばにひざまずいた。

「大丈夫ですか？ お怪我とかは……？」

「はい、大事ありません。」

それで、ルーデウス様。先ほどのお尋ねについてですが……

そこに散乱している骨は、わたくしたちが倒したのではありません

「……では、誰が？ ナースでは……ありませんよね？」

ドレスを泥で汚したナリス姫は、よく見ると、その両手も砂だらけだった。

箸よりも重いものを持たないような白く華奢な手が。まあ、この世界で箸を持つような人間は、俺とナナホシくらいかもだが。

ナースを撫でるミコさんの手も、同様に汚れていた。

ふたりとも奮闘したのだろう。

「もちろん、ミコリスも戦つて守つてくださいたのですが」

……なんか引っかかる呼び名があつた気がするが、さつきに続いて再び話の腰を折る

わけにもいかず、大人しく続きを待つ。

「これは……剣を持って現れたスケさんが、助けてくれたのです」
「んん？ ちょっと待て、ここに水戸黄門御一行はいなーいはず。」

「スケさんは、ひよつとして」

「スケルトン、ですね」

ミコさんのほうから返事があつた。

あああ……

お姫様たちのかもす不思議な空気感に、うつかり呑まれそうになる。

いろいろツッコミたいのは山々だつたが、これ以上脱力してしまうと帰り道が危険と
判断して、グッとこらえた。

ふたりをテレーズのところまで、無事に連れ戻さないといけないのだから。

「俺が入つてきたのと同時に、床下に消えたヤツのことでしょうか」

氣を取り直して立ちあがり、奥へ移動して覗き込むと、崩れた床の穴はそのまま深く
続いているようだつた。

地下迷宮に、さらに下の階層があるのか。

「あのスケさんは、ここに逃げ込む前……ミコリスとナースが大蜘蛛とやり合っていた
時にも、窮地から救つてくれた方だと思うのです」

「剣を持つて、助けてくれた……？」

神子さんを振り返れば、彼女は俺の目を見てコツクリと頷いた。

いろいろ思うところはあるものの、とりあえず今は保留。逃げるのが先だ。

「エリスやテレーズさんも地下迷宮まで降りて来ています。

彼女たちのいるところまで、スケルトンの群れを突つ切りますよ。
危険がないよう守りますが、俺の背後から出ないよう気を付けてついてきてください

「あっ、姫様は足を痛めておられます。走るのは、ちょっと」

ミコさんの声に姫君のほうを見やると、ちょうどヨロヨロと立ち上がるところだつ
た。

「わかりました、俺が抱えます。ミコさんは大丈夫なんですね？」

「ミコリスです」

「えっ？」

「ミコリスと呼んでくださいませ。私は走れます」

「……了解しました」

一刻も早く安全な場所へ。

お姫様ふたり、ナリス姫とミコリスを連れてエリスのもとへ！

……うーむ、リス仲間がひとり増えちゃつたね。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／14

？

(ナリス姫視点)

約束どおり助けに来てくださったルーデウス様。

驚いたことに、彼の登場で、絶体絶命の窮地がひっくり返つてしましました。拍子抜けするほどあっさりと。

「では、外に出ます。ちょっと冷えるのはスママセン」

そう言うと、入り口を塞いでいた土壁に穴を開け、隙間からなんらかの魔術を施されたようでした。

「姫様、片手でしかお支えできないので、しつかりつかまつてくださいね」「お手数をおかけいたします」

ミコリスとお話をされていた、噂の『お姫様だっこ』です。まさかわたくしが、やつていただくことになろうとは。

ああ、恥ずかしい。それに重いでしょうに……

心苦しくてたまらないものの、動きづらいドレスに華奢な靴。これまでの人生で、ろ

くに走つたことのないわたくしです。

遠慮したところで、かえつて迷惑をかけそうだと覺悟を決めるしかありません。

それでも申しわけなさに頭を下げるが、大丈夫だと笑顔で首を振つたルーデウス様は、ひよいつとわたくしを抱えあげました。

「俺の首に腕を回してください。右手を離しますね」

騎士様たちと比べると細身の印象の彼でしたが、しがみついた身体は意外なほどがつしりと揺るぎなく、頼もしく感じられます。

すぐ横にあるルーデウス様のお顔、うつかりその口元に目がいつてしまい、慌てて視線を外しました。

……口づけばかりか、殿方からの初めての“お姫様だつこ”もこのお方なのだな……場違いな上に不謹慎な心中の発言を戒めるべく、自分の頬をペチンとひと叩き。

彼は不思議そうにわたくしを一瞥するも、すぐに真剣な眼差しを前方に向けました。

「つかまつて！ 行きますよ。『岩砲弾』！」

大きな破壊音が響きました。

どうやら目の前の土壁を壊したのと同時に、近くにいた数体と一緒に吹き飛ばしたようです。

上空を飛ぶ可愛らしい精霊が、周囲を明るく照らしてくれています。

眼前に広がるのは、呆れるほど多くのスケさんが冬木立のように凍ついて立ち並ぶ光景でした。

ルーデウス様は自由になる右手から魔術を放ち、行く手を阻む者たちを倒しながら進んでいかれます。

肌をかすめる氷の粒やピリリとした冷気に、不意にかつての記憶が蘇つてきました。懐かしいラビリアの厳しい冬、王居から出て馬車に乗り込む一瞬、こんな空気をたしかに感じたものです。

「ミ」「ヤ……ミコリス、無理してないですか？」 大丈夫？」

耳元でルーデウス様の声がやや大きく聞こえ、背筋を伸ばして振り返れば、頬を赤くして走るミコリスのお姿が。

「い、今こそつ……鍛錬の成果を見せる時ですっ！」

ハアハアという彼女の荒い息づかいに、今さら気付いた自分に恥じ入るばかりです。恐ろしい思いをした反動か、まつたく危なげのない腕の中で、安堵のあまり気が抜けたのはあるでしょう。

でも、だからといって、皆が一生懸命な時にのんきに故郷の思い出に浸るなんて……。ミコリス、ほんとうにごめんなさい。

ルーデウス様もありがとうございます。

「こんな大変な時に……わたくしづかりが樂をして申しわけありません」
やつと絞りだした声は、骨や氷が碎け散る音にかき消されて誰の耳にも届かなかつた
ようでした。

?

遠くで戦闘音が聞こえる。

もう少しで合流できそうだ。

俺は決して走つているつもりはない。急ぎ足程度のはずなんだが、付いてくるミコさんは小走りですっかり息を切らしてしまつてゐる。

無理をさせているのはわかるのだが、これ以上速度を緩めた結果、万が一にも囮まれてしまふ事態は避けたい。難しいところだ。

「ほら、見えてきました。あそこにいますよ！」

ミコさんの力になればと、岩砲弾を中断して指差して示す。

遠目にも、複数のシルエットがせわしなく動き回つてゐるのがわかつた。が、

「あれ？ なんか人数多いな……」

エリスとテレーズふたりのはずが、もつといるような？

「ミ～コ～さ～ま～つ～！」

俺たちが近づくより早く、団体からひとりが離脱すると野太い声で叫んだ。
 そいつはガチャガチャと骸骨兵スケルトンを破壊しながら、船でも漕ぐようにこちらへ向かつてくる。

予想にたがわず、青い鎧姿の男だ。

「騎士様……」「スカルさん！」

腕の中の姫君と背後のミコさんが同時に声を上げた。

なるほど趣味の悪いドクロの兜、こいつはスカル・アツシユか。

いたな、そんなの。この場に似つかわしすぎる、辛氣臭い名前だ。

「よくぞ、ご無事でっ!!」

俺たちふたりを見事にスルーして通り過ぎ、神殿騎士はミコさんの背後にぴつたり付いた。

俺はともかく、ナリス姫は無視しちやマズイでしょうに。ミコさんしか目に入つてなかつたっぽい。

「全員でお助けにあがりました。どうぞ、ご安心くださいっ！」

感極まつたようで、すでに涙声だ。

……結局、我慢できずに皆で地下に降りちゃつたわけだ。松明でも持つて進んできたのだろう。

教団からの処分も覚悟の上での行動なのか。

コイツら、ほんとにミコさん大好きだよな。

そしてようやく、テレーズたちと合流を果たした。時間にして、1時間もかかってい
ないと思う。

「ルーデウス君、ありがとう!!

お救いしてくれたのだな」

さつきよりも疲労の色が濃いテレーズだったが、他の騎士たちと一緒に、依然として
スケルトンに向かっていた。

エリスはまだまだ元気に飛び回っているものの、そろそろ氷が溶けて動きはじめたの
も出てきていた。

ほんとうに際限なく数がいる。

いつたいどうなつてんだ?

騎士たちに涙ながらに迎えられたミコさん。その隣に姫君をそつとおろせば、皆で守
るように前後左右を取り囲んだ。

この先、彼女たちのことは騎士に任せ、俺は自分の仕事に専念させてもらおう。

『フロスト・ノヴァ』!　じゃあ、撤退しますよ!』

改めてヤツらの動きを止めて、退路を確認。

出入り口の方向はすでに大群に埋められていたが、こちらも数の力で押していくるだ

ろう。

?

(神子視点)

先頭のほうでは、ルーデウス様がスケさんたちの動きを止め、エリス様が剣でなぎ払つておられます。すばらしいコンビネーションです。

私たちを取り囮む騎士さんたちは、それぞれ剣を振るつたり、神撃魔術を放つたり。光の精霊ちゃんの周りを旋回するナースは、狭い場所では騎士さんの肩に乗つて羽を休めることも。

姫様とふたりつきりで心細かつたのが嘘のような、頼もしい大所帯での移動です。

狭い通路を抜けて、ふたたび空間が開けました。

まだ走れると主張したものの、結局は私も姫様と同様、騎士さんに抱きかかえられてしまう事態に。

これで私も、とうとう“お姫様だっこ”経験者です。

子どもの頃ならいざ知らず、成人後は初めて。喜んでいる場合ではありませんが。

そう、喜んではいけないのでです。エリス様の弟子なのに……

我ながら、なんて不甲斐ないのでしょう。無事に戻つたら、もっと鍛錬を頑張らなけ

れば！

決意とともに拳を握りしめました。

パアツ

氷が融けかけて動いた一体のスケさんが、すぐ近くで神撃魔術を受けて発光、思わず目を奪われてしまいます。

足先から灰へと変わりながら、最後に残った頭部

ポツカリと虚ろな眼窩

あるはずのない眼球からの視線が

私に絡み

——チガウ！ ワタシハ異端者デハナイ！

——タスケテクレ、死ニタクナイ……

ものすごい圧で

思考と映像が

頭の中に押し寄せて

脳をかき乱し

ヒイイ……

どこから引き撃れた悲鳴が聞こえたと思つたら

私の喉から漏れた声でした。

「ミ、ミコ様っ！ どうされましたか！」

地面に降ろされるのを感じながらも、頭を抱えたまま動くことができん。

……やがて少しづつ波が引くように、

名も知らぬ誰かの記憶が薄れていき……

悲しみと無念さを私の中に残して、

ブツツリと消滅しました。

息をついて目を開けると、私を覗き込むいくつもの心配そうな顔が。

「すみません、落ち着きました。もう平気です」

笑つてみても、皆の気遣わしげな表情は晴れません。

これは告げるべきではないのかも……そう思いながら、私はさつき知ったことを伝えました。

「このスケさんたちは……全員じゃないにしろ、ミリス教団の犠牲者なのかもしれません。

先ほどの人は、異端審問に不当にかけられて、ここに落とされたそうです」
心を持たぬ魔物として扱われ、壊され消されてしまうこの人たちが、あまりにも氣の

毒で……

?

「そ、そんな……」

「でも……我が教団が……」

俺とエリス以外の皆が、ミコさんの言葉に衝撃を受けて立ち尽くした。
けれどもしかすると、ここで大勢のスケルトンを見た時、皆の頭をよぎった考え方だつたのかも知れない。

地下迷宮に無数とも言える亡者の数、それをひた隠す教団……

ミリス教団が己の権力を搖るぎないものにするために、どれだけ犠牲にしてきたかなるて考えたくもない。

それこそ万人単位だったとしても、別に驚かないだろう。

宗教なんて、多かれ少なかれ闘を抱えているもんだ。

俺が前世で聞き知った程度の知識でも、宗教がらみは迫害や対立、権力闘争の歴史だ。ミリス教だけが清廉潔白のはずはなく、むしろかなりエグいほうの団体だと認識している。

クリフの清廉な人格は信頼していても、それとは別の話だ。

それはともかく、ミコさんの能力つて……？

「ミコさ……ミコリス。目玉がない相手でも、記憶が見えたんですか？」

「ええ……自分でもよくわからないのですけれど……」

さつき対面した時には、あの緑の髪の騎士さんの記憶も

「ミコ様、話は後に。

何やら不穏な気配がします。とにかく急いで戻りましょう！」

周囲を警戒していたらしき騎士のひとりの声に、皆が現状を振り返った。
たしかに、それどころではない。

スケルトンを破壊することに良心がうずこうが、やられれば自分もコイツらの仲間入りなのだ。

ふたたび抱えあげられたミコさんを確認し、足を踏み出そうとした時
声とも音ともつかぬ途切れ途切れの響きが

…………暴れ狂う炎…………焼きつくせ

不気味にあたりの空気を震わせた。

…………「大火球」

どこから、誰が、と認識する間もなく、俺も反射的に魔術を放つ。

『アイスウォール
氷壁』！」

できうる限り厚く高く仕立てた氷の壁が、瞬時に真つ赤に染まつた。一行をグルリと囲む大きな氷の、その半分ほどが巨大な火球に飲み込まれる。おびただしい水蒸気を上げる氷が溶けきつてしまふ前に、俺は内側にもう一枚、氷壁を打ち立てた。

ジユウウウ……ツ

炎と氷の相克は、両者が消えて収束した。

氷の壁が溶け去り、クリアになつた視界。

広い空間にもかかわらず、その半分ほどを覆う禍々しい黒い影が広がつていた。なんだ？

無風の地下空間に、ボロボロの黒いケープが風に煽られるように揺れている。目深にかぶつたフードの中は、闇に塗り込められたように翳つて見えない。これは……レイス幽鬼だ。

ただ、やたらにデカい。7～8メートルはあるだろうか。

思わず感心して見上げるうちに、巨大レイスが魔獣の骨とおぼしき節くれだつた長い杖を振りあげた。

焦げたる剣を敵を切り裂かん

おつと、惚けてる場合じやない。

「火断」
フレイムスライス

放射状に広がりながら飛ぶたくさんの炎の刃。
 エリスや騎士たちが剣で叩き落とすのを横目に、土盾で受け止めた俺は、試しに反対の手からの岩砲弾で攻撃してみる。

が、レイスの黒いケープをあつさり突き抜け、後ろの壁を碎く音が響いた。
 やっぱりダメか。

じゃあ、これならどうだ？

向こうからお返しとばかりに飛んできた火球弾ファイヤーボールを氷で弾くと、そのまま爆音衝撃波を放つた。

超音速の空気の波、強大な圧力が一瞬でレイスに届く。

虚空にレイスが消えるのにわずかに遅れ、耳を突き刺す爆音。しかし黒い姿は、数秒でふたたび現れた。

うん？ ……少し小さくなつたか？

気づいたら、凍りついていたスケルトンたちも徐々に動きはじめていた。
 やたら火系魔術を使うと思つたら、それ狙つてやがつたのな。

?

復活したばかりのレイスが光に包まる。

神殿騎士たちによる神撃魔術のようだつた。

「ルーデウス殿！　レイスに物理攻撃は効率が悪い。ここは、我らが！」

ブツブツと詠唱しながら数人の騎士が前に出てきて、時間差で神撃魔術を打ち込みはじめた。

「任せます！」

ならば俺は、騎士たちを巻き込まないよう注意を払いつつ、泥沼でスケルトンたちの足場を沈めていく。

足元は固められても腰から上は元気なもので、相手をするのは凍らせた時よりちょっと面倒だ。

手を焼くというほどではないが。

光に包まれるたびに、少しづつであつたがレイスは小さくなつていった。

それでも、隙あらばといつた感じでいろんな魔術を撃つてくる。

俺やエリスなど動ける人間が、神撃魔術に専念する騎士や姫君たちを魔術による攻撃から守りながら、泥沼を抜けて接近してくるスケルトンも破壊する。
しばらくは混戦状態だつた。

このレイスは強い。

普通は、かなりの大物でも、上級以上の神撃魔術を浴びればひとたまりもないはずだ。死にゆく者の魔力を取り込んで強大化するというのなら、このサイズやパワーを持つているのも頷ける。こここの亡者の数はハンパない。

おそらく最上位のレイスだ。

俺たちだけでは苦戦していたと思う。神殿騎士たちがいてくれて助かつた。

「もう少しで消滅するぞ！ 踏ん張れ！」

巨大だつた黒い姿も、今や俺たちと変わらぬサイズまで縮んでいる。

小さくなつたぶん動きが素早くなつていたレイスは、身をよじつて光を避け、反対側まで一気に移動した。

……焼きつくせ、「エクサフレイム
大火球」

突然背後から襲いかかつた炎球を回避するべく、ミコさんや姫君を抱えた騎士たちが跳ぶ。

姫君を抱いた騎士の背に火炎が迫つた。危ない！
『水砲』！

俺が最大水量で放つた水の球とぶつかり、炎と水が空中で押し合う。

岩壁や天井を震わせて反響する派手な蒸発音。

その場の全員、レイスまでもが、大きな音とモウモウと視界を塞ぐ蒸気に注意を持つ

て い か れ た。

「——う わ あ つ ?!」

唐突に間近に聞こえた声と伸ばされた腕に、俺は考える間もなく反応した。
いまだに白く霞んだ視界に、鎧の手を掴んだのはいいが
その腕に引きずられて
どこかへと
落ちていった。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／15

？

(テレーズ視点)

「ダスト・ボックスか？ どうした？」

部下の誰かが呼びかけたが、モウモウと視界を塞ぐ蒸気の向こうからの返事はない。

そうだ。あの声は恐らくダスト・ボックスだろう。

なにがあつたのか確かめようにも、辺りの状況がまるでわからない。

はつきりしているのは、せつかく弱ってきた幽鬼レイスを仕留めるタイミングを逃すわけにはいかないということだ。

「詠唱を止めるな！ 視界が晴れしだい撃て！」

「「はいっ！」」

チラリと黒布が見えると同時に、1撃目の神撃魔術が消えかけの水蒸気ごと敵を貫いた。

そしてまた、ひとまわり小さくなつたレイスが少し離れたところに出現。
2発目が放たれた。

今度は、今までより再生するのに時間がかかる。

やがて地面スレスレに姿を現した時には、子どもほどのサイズになっていた。

3発目。

光に包まれたレイスは無数の黒い粒子になつて、散り散りに霧散して消滅した。

まだ復活するのか？

誰もが息を飲んで見守りつづける。

霧が完全に晴れたその時、

あちこちでガシヤンと音を立て、スケルトン骸骨兵たちがバラバラに崩れ落ちた。

「……やつたか」

緊張が解けかけた皆の背に、エリス様の焦りを滲ませた声が響いた。

「ルーデウスがいないわ！」

「なに？」

慌てて周囲を確認すると、ダストやルーデウスばかりか……

「ナリス姫様のお姿も……ない？」

レイスが消滅しスケルトンも動かなくなつた空間は、3人いなくなつた以外は、何事もなかつたかのように静かなものだつた。

ようやく危機が去つたと思つたのに。

人が忽然と消えるのは、これで2度目。神子様たちが姿を消された時と同じじやないか。

まさか……また？

混乱し動搖する我々に、神子様がきっぱりとした口調で告げた。

「この迷宮には、さらに下に階層があるのです。

なんらかの理由で、そこに落ちたのだと思います」

?

「ここが単なる廃墟でなく、本物の迷宮であるのなら、最下層に迷宮核が存在するはずです」

そう口にした騎士は、過去に冒險者の経験がある者なのかもしれない。

ただ、誰にどんな経歴があろうと、エリスにとつて関係なれば興味もないことだったが。

「……探しに行くわよ！」

「待て！ これ以上危険な場所に、ミコ様を置いておくわけにはいかない」

騎士たちとナリス姫を見捨てて地上に帰るわけにはいかないし、ダスト・ボックスは大事な同僚だ。

アナスタシア・キーブ

しかし、あくまで聖墳墓の守り人は記憶の神子の親衛隊。
最優先すべきは神子だつた。

「私が神子様と先に戻ろう」

部下たちを見回しながら、テレーズが口を開いた。

「下の階層は、ここよりさらに厳しい状況だろう。

残念ながら私の力量では、役に立つどころか足手まといになる恐れがある。

それならば、私が神子様を教団本部までお届けすればいい。

そして副隊長の最後の役目として、上層部に訴え、ここに増援を送るつもりだ

「それでいいんじゃない？」

一步踏み出しかけていたエリスが、振り返つてテレーズに頷いた。

「でも、動かなくなつたのはスケルトンだけよ。ほかの魔物は襲つてくるわ。

騎士を何人か連れて行きなさい」

ここまでテレーズの戦いを見てきたエリスの目にも、彼女の力不足は明白だつた。

自分ひとりならいざ知らず、神子をかばつて無事出口にたどり着けるとは思えない。

結果、ふたりの神殿騎士が付き添うことになつた。

はじめは、自分だけが安全なところへ逃がされるばかりか、貴重な戦力まで奪うこと

に抵抗していた神子も、皆の決然とした様子にすぐに心を決める。

一刻も時間が惜しい今、自分のわがままで足止めさせるわけにはいかない。

「私たちが抜けてきた通路に、下から魔物が出入りする地割れのような亀裂がありました。

それから、身を隠していた建物内の奥の床にも下に通じる穴が！

ほかにもあるかもしませんが、教団本部方向に戻りながら探してください。
必ず助け出し、そして全員で戻ってきてくださいね！ お願いします！！
きっと頼もしい援軍をお呼びしてきますから。どうか、ご無事でっ！」

神子と青い鎧姿の3人が身を翻して駆け出し、フクロウも追つて飛び立った。
それを見送る、剣王エリスと4人の神殿騎士。

迷宮に残つた彼らは、すぐに神子たちが進んできたと思われる道を辿りはじめた。

?

腐臭が強い。

呼吸するたび肺から腐つていきそうで、軽い吐き気を覚える。

暗闇の中、離れたところでカチヤリと金属音がした。

一瞬身構えるが、すぐに思い当たる。一緒に落ちた騎士だろう。

「無事ですか？」

やや間があつて、声が返つた。

「……ああ。ナリス姫様も『無事だ』

「ええっ？ 姫君も落ちちゃつてたんですか……」

あちやー……と思いつつ、俺は懐から新たなスクロールを取り出す。

パアツと光が広がると、騎士の膝に抱えられたままのナリス姫がいた。

騎士のほうは……ゴミバケツ型の兜に赤マント、ダスト・ボックス君だな。

「……ルーデウス様……」

姫君は眉をヘタリと垂らして俺のほうを見た。

「また……落ちてしまいました。なんだか皆様、申しわけありません」

身を小さくして騎士の膝から降りると、そのまま地面にションボリと座る。

「謝る必要はないです。あなたのせいではありませんよ。

というか、たぶん、その指輪が原因かと思います」

「指輪？」

「その指輪は、どうもマジックアイテムのようです。

どこか決まつた場所でふたつ揃つたら、封印されていた入り口が開くのではないかと。

あくまで俺の想像ですが」

「入口が開くなら、出口も開くんじやないのか？」

ダスト・ボックスが口を挟んできた。

「かもしませんが……さらに奥へと落ちこむ可能性は考えなけばいけないでしょ
うね。

歩いているうちに、うまく上層へ通じるルートに乗れればいいですが、迷宮主のいる
中心部に入りこんでしまう恐れも。

とはいって、ここに留まついてもいざれ魔物が寄つてくるでしようし」

兜の面の隙間から、胡散臭いものを見るように細められた目元が覗いている。

「ルードウス殿、私は貴殿の経歴を知っているぞ。

「成人間もない年齢で、ベガリット大陸の伝説級の迷宮を踏破したそうじやないか」
「ああ……あれは優秀なパーティがあればこそです。それでも大切な仲間を失いました。

自分としては、迷宮はできるだけ関わりたくないんですよ」

正真正銘、心からの本心だ。

「でも、そうとも言つてられませんね。行きましょう。

実体のある魔物でしたら主に俺が。アンデッド系だつたら、あなたのほうがいいかも
しません。

神撃魔術はお任せしていいですね?」

「……あ、ああ。では姫様、また失礼いたします」

俺よりひと回りイカつい彼に抱かれたほうが、姫君も安心だろう。

彼女は任せるにして、俺は周囲の索敵に集中した。

?

ズズツ……

重い物を引き摺るような音。

洞穴から現れたのは、大きな芋虫ワームだった。

土管サイズの白いワーム……頭部らしき先端がやや尖っている形状から、ウジ虫が連想されてやな感じだ。

動きは鈍いものの、テカテカと濡れたような半透明の身体をうねらせながら、トンネルの側面と言わず天井と言わずビツシリと並んで、いつせいに近づいてくる。

“ゴメンナサイ!” つて逃げ出したくなるような、たまらない気持ちの悪さ。なんと

いうか、背筋に入る。

姫君は当然のこと、繊細なタイプには見えないダスト・ボックスさえ思いつきり引いてるっぽい。

この虫は切つたり潰したりしたくない。絶対に！

パツンパツンのボディが、中身のジュー・シイさを雄弁に物語っているのだ。
どうしようか……。

対処を躊躇う俺に、あろうことか1匹がピヨーンとこちらに向かつて跳んできた。
げっつ!!

「うつかり放った岩砲弾が貫通し、黄色い体液がブツシャア……！」
『アースシールド土盾』！

セ、セーフ……。ほんとにギリギリだった。

ふわくんと生臭い匂いが広がる。

振り返れば、のけぞつたまま固まるダストボックス。姫君だけは、しつかり赤マントで覆っていたのはさすがだ。

「え、ええと……焼き払うのが良さげですが、地下深くでは火は避けたほうが無難か
と。

土に埋めても這い出すだろうし……芸がないけれど、また凍らせますか？」

ふたたび飛びかかられないよう、ジリジリ下がりながら同行者に尋ねてみる。

「芸などいらん。コツチコチにやつてくれ！」

「了解。『アブソリュートゼロ絶対零度』」

ヒュルル……とワーム」と、トンネルとその周囲が一瞬で凍結した。

「さつきのフロストノヴァと違うのか？」

「アブソリュートゼロは水帝級ですよ」

ダストボックスは「……帝級だと?……」と心底呆れたような呻きを漏らした。

物理的な気温低下よりも寒く感じるのは、俺のせいではないだろう。

「貴様といふと基準が狂う。絶対におかしい……」

言われたとおり『コツチコチに』してやつたのに。

しかも、いつの間にか『貴殿』から『貴様』に変わつてゐる。

?

剣王エリスは、神殿騎士とともに地下迷宮を力強く進んでいた。

邪魔をする魔物は排除するまでだ。

それまで圧倒的な数で支配していたスケルトンは、レイスが消えた今、バラバラに分解したまま動かない。

しかし、迷宮内が平和になつたわけではなかつた。

むしろ、どこかに隠れていたのであろう魔物が跋扈しあじめた。

エリスたち5人は、お馴染みになつたマッドスカルとお供の大蜘蛛の団体を片付け、

現在は瓦礫の下から這い出てきた鉄甲サソリと対峙していた。

雄牛ほどもあるサソリは、ギザギザの歯が刻まれた大きなハサミを鳴らしながら尻尾を上げて威嚇してくる。

とにかく体表が硬いのと、油断すると毒を飛ばしてくるのが、なかなかにタチが悪い。すでにひとり、騎士Aが毒を受けて戦闘不能になつている。

——どうしようか。

飛んでくる毒針を剣で叩き落としながら、エリスは考える。

光の太刀なら離れたところから狙えるし、あれくらい問題なく斬れるだろう。
——でもルーデウスが、なるべく使うなつて言つたし……

エリスは結論づけた。

騎士たちが不甲斐ないのが悪い、と。

「ちよつと、あんたたち！ 魔術でなんとかしなさいよ！」

狂剣王にジロリと睨まれて、騎士Bがなにやら詠唱始めた。

「……中空より落ちて大地に還れ、『土落弾』！」

天井から降ってきた数塊の岩を回避しようとしたサソリが、ハサミを岩の間に挟まれてバランスを崩した。

その瞬間、エリスが跳んで毒針の出る尻尾を斬り落とし、さらにサソリの身体が浮い

た隙間から腹部をバツサリ切り裂いた。

狂剣王は刀身についたサソリの体液を振り払い、フンと騎士Bを一瞥した。

「ほら、やればできるじゃない！」

お誓めにあずかって喜ぶべきか、バカにされたと怒るべきか……曖昧な表情を浮かべる騎士BCの横で、毒を受けたAはDによる解毒魔術でなんとか復帰した。

「じゃあ、行くわよ！」

「はいっ！」

神子に忠誠を誓い、女性騎士テレーズの下に付いて長年やつてきた彼ら。

頭の隅で“なにか違う”と思いながらも、身に付いた習性としてエリスに付き従つてしまふのだった。

?

ハ工だ。

俺も、なんとなく予想はしていた。

さつきのがウジ虫なら、成虫もいるはずだ、と。

その背に3人またがれそうなハ工もどきが、目の前の壁にいる。

この地下2階は、上の階層よりもずっと空間が広いようだった。高さも幅も、だ。

おかげで魔物たちは、快適空間でのびのびとワガママボディに育つたのだろう。
ブーン……

そいつが羽音を鳴らしながら、俺たちの横をかすめた。
小型飛行機とすれ違ったくらいの風圧だ。

デカイが1匹ならどうつてことない……と考えたのがいけなかつたか、大型ジエット
機でも飛んできたのかつてくらいの重低音を響かせて、団体様が到着。
「おい！　さつきの魔術はやらないのか？」

「凍らせてもいいですが、今やるとコチコチになつたデカいのが落ちてきますよ？　い
いんですか？」

頭上をワンワン飛び交つてゐるのが降つてきたら、そうとう危ない。つていうか当た
れば死ぬ。

「あゝたしかにそうだな」

喋りながらも、ふたりして大バエを避けるのに忙しい。

人ひとり抱えたダスト・ボックスと違つて俺は身軽だが、姫君に傷を負わせるわけに
はいかないのだ。

不本意ながら、この赤マント男を守らざるを得ない。

「あつつ」

ダスト・ボックスが右手で剣を使うため、左手一本で支えてられていたナリス姫が振り落とされた。

そこに急降下する一匹の大バエ。

頭から突つ込んでくるかと思えば、違う。尻の部分をキュッと曲げたあの体勢は……

『岩砲弾』！

とりあえず吹つ飛ばして、姫君に飛び付いて抱きかかえた。

「ダストさんも！ こつちへ！」

大バエのとまつていな岩壁に向かつて走りながら土魔術で横穴を開け、奥に姫君を座らせる。

『風槍竜巻』!!

走り込んできたダスト・ボックスが一瞬吹き飛ばされそうになるのを、腕をひつつかんで穴に引きずり込んだ。

「ちなみにあれに巻き込まれると、毛根ごと頭髪を持つていかれるという噂もあります」
そう教えてやれば、「なんと恐ろしい……」と両腕で自分の頭を守るように押さえるマント男。

あんたは兜かぶつてるから平気でしょうに。

岩の破片と一緒にキリモミしながら、壁や天井に激突するもの、互いにぶつかり合う

もの……竜巻の中で揉みくちゃにされるハエたちを見ながら、そろそろいいかなと風を止めた。

羽をボロボロにした10数匹すべてが落ちてきた。脚をヒクつかせているのもいるが、もう飛ぶのは不可能だろう。

「コイツ、さつき卵を産み付けようとしてました。

ばやばやしてたら、あのウジ虫の温床にされたかもれません」

姫君がブルッと身を震わせ、手近にあつた鎧の腕にしがみついた。

「……あつ、すみません」

「いえっ！ 私などの腕でよろしければ、いつでもお貸しいたしますのでつー

と、ダストボックスが背筋をピッと伸ばした。

俺に対するのと、ずいぶん態度が違うじやないか。

いや、くれるつてもいらぬいけどさ、そんな腕。

というか、ハエが卵産みつけてウジ虫が湧き出すような死骸が、どこかにあるつてことだよな。

ちょっと勘弁してほしい……

ミリシオン出張記／姫ものがたり／16

?

「怪しげなものを姫様にお勧めしたら許さんぞ」

兜越しにもわかる胡乱げな目つきで、ゴミ箱野郎が俺を睨んだ。

「身体を温めるハーブと香辛料をブレンドしたお茶ですよ。

疑うんなら、先に毒見でもしたらいいじゃないですか」

冒険者の中には、自分のオリジナルの調味料やらドリンクの素やらを持ち歩く者も少
なくない。

俺もご相伴にあずかったことが何度もある。

備えあれば憂いなし、かさばるもんでもないんで、ウエストポーチに少し入れてたや
つだ。

手を温めるようにカップを包み持っていたナリス姫が、ためらいなくお茶を口に含
む。

「……美味しい」

「あつ、姫様！　まずは自分がつ！」

慌てたダスト・ボックスが兜の面を上にずらしてグビリとあおり……アチチと焦るのを横目に、俺も手元のカップを湯で満たした。

さいわい湯水は使い放題、食器も、必要とあらば椅子だつて自前調達できるのだ。と言うか、姫君は今現在、すでにルーデウス謹製の椅子に腰掛けている。

地下に降りてから数時間。

長引くようなら魔物の肉を食うことも検討しなければならないが、できるだけ避けたいと思う。

そもそも魔物は不味い。ゲキマズだ。さらには尋常じゃない噛みごたえだつたり、じやなればグジュグジュした不快な口触りだつたり。

エリスなら気にせず食うかもしれないが、とてもお姫様にお勧めできるシロモノじやない。

よつて、あくまで非常手段だ。

とりあえずお茶で身体が温まつて、ナリス姫の表情も緩んだかな？

ダスト・ボックスも、なんだかんだで尖つていた態度が少し和らいだように思う。

さすがに非常食までは仕込んでいないが、ルーシーからもらつた飴玉がいくつかあつたんで、ついでに皆に分けた。

家に帰つたら、ルーシーに礼言わないとなあ。

「どうです？　俺がいて良かつたでしょ？」

ダスト・ボックスにドヤ顔を向けてみる。一家に一台、備えて安心ルーデウスだ。

柔らかい微笑みで返してくれるやんごとなき姫君、一方彼女を抱きかかえている無骨な男はフンと鼻息で答えた。

ふたりから言葉がないのは、口の中に飴玉が入っているせいだ。

俺も今のうち食つとこう。貴重な力口リー源だ。

いい大人が3人、腐臭漂う地下迷宮を飴玉コロコロさせながら歩を進める。間抜けな図だが、気持ちの余裕は大事つことだな。

?

「こつちで合つてるんだろうな？」

しばらく黙々と歩いていたダスト・ボックスが、偉そうに俺に尋ねてきた。

「わかりませんよ、俺だって初めて来たんですから。むしろ、あなたの地元でしょうよ」

「由緒正しいミリシオン生まれの私だが、当然ながら迷宮育ちではない。俺も知らんぞ！」

落ちた時点で、ただでさえ怪しかった方向感覚がキレイに消し飛んだ。

“その場を動かず助けを待つ” というのが迷子の鉄則かもしれないが、助けはあまり

期待できないうえ、留まつていても魔物の餌食になるだけだろう。

たとえ当てずっぽうであつても、進むしかないのだ。

最初は上り坂気味だった道が微妙に下りに入つた気がするから、不安になる気持ちはわかるが。

しかも、臭気が強まってきたような。

「教団本部から聖ミリス公園にかけては、神聖区が広がつている。

お前も見てきたとは思うが、この地上にあるのは大聖堂のほか巡礼者センター、聖職者住宅、外れに墓地などだ。

東側はグラン湖に面しているし、ニコラウス川や、深くはないものの地下には水路も走つていてる」

「ここがずっと残されていたということは、そうとう頑丈な岩の層に守られているのかもしれませんが、もともとが陥没した地域だと聞きますし……

地盤を考えると、やはり水系や土系統の魔術は気を付けないとですね。……んっ？」

強烈にクさいと思つたら、でつかい卵が産み付けられている巨大な死骸が転がつていた。

ほとんど原型をとどめていないため、どんな魔物かはよくわからないが、体毛らしきものが所々に残つている。

ハエやウジ虫の発生する原因であり、腐臭の発生源なのだろう。

そしてなにより、このサイズの魔物が付近をウロウロしている証拠もあり、苦笑しか浮かんでこない。

たぶん隣のダスト・ボックスも、同じことを考えている。

そして、ふたりの思考が呼び寄せたかのタイミングで……

「……なにか……足音？　みたいな音がしませんか？」

ナリス姫の華奢な指が騎士のマントをギュッと握りしめ、赤い生地に細かいシワが寄る。

ダスト・ボックスに視線で問うと、重々しい頷きが返ってきた。

立ち止まつて感覚を研ぎ澄ませば、ゆっくり引きずるような足音と微かな地響き。とりあえず、足場の良い見通しがきく場所へと移動する。

やり過ごした結果どこか袋小路で行きあうより、ここで倒せるならそれに越したことはない。

「降ろしてください、騎士様。わたくしを抱いたままでは戦えないでしょう」

「いや、そういうわけには！」

「いいえ、これ以上ご迷惑を……」

「自分は、あなた様をお守りするのが職務です！」

姫君と騎士が押し問答を始めた。

たしかに大バエの時には振り落とされてしまつたわけだし、下手したら両者いつぺんにやられる恐れもある。

「では姫様は、ダスト・ボックスさんの背後を離れないようにしてください。

俺のところで食い止めますし、短時間なら土の壁やドームでお守りすることもできます。

魔術を使うような相手だつたらそれなりの対処が必要ですから、特性を見極めてから叩きますね」

?

壁を背に立つ姫君と、庇うダスト・ボックス。

やや離れて先頭に俺。

ビリビリとした振動と地面を踏みしめる音が近づいてきた。

洞窟いっぱいに詰まつて見えるズングリした身体。

トンネル状の通路を抜けると同時に、曲げていた腰や膝を伸ばし、身体に比して小さな頭を持ち上げたソレは。

「……巨人……？」

いちおう直立した人型でありながら、ひどく不格好で醜悪だつた。

粘膜に覆われた表皮には紫斑が浮いたり緑に変色したり、できそこないの粘土細工のようデコボコの造作。

手足のバランスもめちゃくちゃで、毛髪らしきものが「デタラメなところにまばらに生えている。

「……何体かが合わさつた……キメラというものでしようか……？」

背後から姫君の声がかすかに耳に届いた。

キメラと呼べるのか良くなからんが、なるほど歩行屍ゾンビを寄せ集めたフランケンシュタインみたいなもんか。

骸骨兵スケルトンに続いて、こここの魔物は元人間が多いようだ。これも教団の犠牲者かも、と思えば胸クソが悪い。

姫君を巻き込まぬよう横に動いた俺に合わせ、ゆっくり首を回したその顔に目玉は見当たらなかつた。光のない地下では不要なのだろう。

別の感覚器官を働かせているのか、単に動くものを追いかける習性なのか。

俺に狙いを定めると、わずかに身を縮めて右腕を肩ごと後ろへ引いた、次の瞬間。ものすごいスピードで真っ直ぐに向かつてきたなにかを、素早く跳んで回避した。

ソレはそのまま俺の背後の岩を碎き、気付けば巨人も引き寄せられたようにその岩壁

に移動している。

「腕だ！ 伸びるぞ、気を付けろ！」

ダスト・ボックスの声に目がない顔を向けた巨人が、再び腕に力を込めるのが分かつた。

『氷霜刃』！
〔アイシクルエッジ〕

リング状に高速回転しながら、伸びかけた腕の真ん中を分断する氷の刃。
まつぶたつに切り離したはずが、粘液を飛ばしながらバラバラに散る。

本体は、残っているほうの腕をグイーッと伸ばして離れた岩壁を掴むと、そちら側に素早く身を躍らせた。

俺もすぐさま向きを変え、対峙する。

視界の端に引っかかった肉片が、蠢いているように見えた。

「結合してたのがほどけただけだろう。おそらく、それぞれ別の人間の身体だ」

飛んできた肉片を剣で貫いたダスト・ボックスが、ブンとひと振りで遠くへ投げ飛ばした。

相手の動きに合わせて、岩砲弾で牽制しつつ様子を見るが、すばしこいだけで打撃技

しかないらしい。

その速さだつて、エリスのほうが断然上だ。

ハ工相手なら、それで充分なんだろう。必殺ハ工叩きだな。

そのまま始末して大丈夫そうだと判断し、凍らせ碎いて土をかぶせる。ヒュドラクラスならともかく、普通の魔物は集団でない限り、それほど手こずるものでもない。

生きた人間の、それも上級以上の剣士や魔術師相手だつたら、姫君をかばいながら戦うのはコトだつたろう。

とにかく一刻も早く、彼女を地上へ帰さなければ。

時間の感覚がすっかり麻痺していたが、そろそろ夜になる頃かも知れない。

?

(エリス視点)

もどかしいつたらない。

立ちはだかるものは斬りってる。

私の世界はもつとシンプルだつたと思う。

今回のミリス行き、ほかならぬ私を同行者として選んでくれて、すごく嬉しかった。ともに戦い、時に彼を守るのが私の存在意義であり、立ち位置だ。

ルーデウスがなによりも大切にしている家庭生活において、残念ながら、私の出番は

ほとんどないから。せいぜいがレオの散歩くらいだろう。

おかしな事態に巻き込まれて眠りつづける彼を、ただ見ているしかなかつた時。
世界から色彩が消えた。

空気は灰色で重苦しく、周囲の音は海の底にいるようにくぐもつて聞こえた。
守るべき者の存在が人を強くすると誰かが言つたけれど、それは失う恐ろしさと背中
合わせだつたのだ。

ルーデウスが目覚めた時、どんなに嬉しかつたことか。

それなのに……取り戻したはずだつたのに、また私の前から消えるなんて。
しかも、あのお姫様と一緒に。

その方面に鈍い私でもわかる。

中庭で見たお姫様の表情に、ほのかに揺らめいていたものがなんであるか。

私以上に鈍チンのルーデウスだから、なにも気付かぬまま、彼の性分として親切に気
遣い世話を焼くのだろう。

そんな優しさを、女性は特別なものと勘違いするのだ。

事実、そのような事態は幾度となく起こつてゐる。シルフィやロキシーが上手く対処
してくれるおかげで、本人が知らないだけ。

私は、あのお姫様とは違う。

私は、ルーデウスにとつて本当に特別のはずだ。

だつて、彼の……

「長男を産んだんだから！」

「え？」

「なんでもないわ」

……つい、声に出してしまった。なんとも面倒な感情だと思う。

神子が言つていた地面の亀裂らしき場所を見つけたものの、そこから降りるにはやや狭いようだ。

広げようにもそうとう硬い岩盤らしく、力任せに剣を振り回せば、折れるかもしれない。

いつそのこと、光の太刀を使おうか。

でも、ルーデウスがどこにいるのかわからぬまま、ここが崩れてしまつたら……そう思えば決心がつかない。

先ほどの騎士Bに土系の魔術を使わせても、その成果はわずか。

そうこうしているうちに、裂け目から植物の蔓のようなものが伸びてきて、眼下それと戦っている。

考えごとにふけりながらでも相手ができる程度ではあるが、とにかくしつこい。どれ

だけ斬ろうが伸びてくる。

植物にしては色合いがおかしいし、太すぎるだろうか。

ひよつとして、もつと大きな魔物の触手なのがもしけない。

「ほんとに面倒ね」

早く彼のもとに向かわねば。

?

大量のゾンビだった。

囮まれている。

衣服さえ身につけた比較的ヒトの形を残す者や、皮膚が腐れ落ちたり、内臓や骨が露出したり、スケルトン一步手前の者も……さまざまな段階の元人間たち。

凍らせてみても半分くらいはレジストされた。

厄介なことに、彼らの中にそこそこ高度な魔術を使う者がいるらしい。

火球が飛んできた方向を見定めようとして、すぐ傍らにいたヤツとうつかり視線が合つた。

眼窩からはみ出した、瞳と白目の区別のないドロリと濁った眼球。

至近距離から岩砲弾を見舞つた時、吹き飛ぶ直前その歪んだ口元が動いた。

「……オカアサン……」

ゾンビの口からそんな言葉が漏れたのを脳が理解した瞬間、背筋が凍った。
このゾンビたち……自我や感情がある……のか？

ミコさんは、スケルトンの記憶を見たと言つた。

まさか、こいつら全部……？

動きが止まつたのはひと呼吸ほどだ。

頭を振つて思考を切り替え、再び向かつてきつた火球を氷で撃ち落とした。

「ルーデウス！ 気を抜くな！」

背後のダスト・ボックスから怒鳴り声が飛んでくる。

わかっている。ためらつたら、こつちがやられるのだから。

『風裂《ウインドスライス》！』

回転する円盤状の風の刃が周囲のゾンビを一掃したところに、上から新手がボトボト
降つてきた。

「なんだ？」

振り仰ぐと、岩だとばかり思つていた天井にビツシリと彼らがぶら下がり、飛び降り
るというよりは溢れこぼれ落ちてきていた。

「なんで天井から湧いてくるんだ？」

魔術を使える者を見付けて先に倒し、合間にダストボックスが斬りそこねたヤツを岩砲弾で弾く。

そのうえ頭上にも注意が必要だなんて、やめてほしい。

「自分の想像だが、ここは墓地につながっているのかも、しれんぞっ！」

姫君を左腕でかばい、右手の剣で斬り飛ばす騎士。彼は彼で、大変そうだ。

「……ミリス教は土葬なんですか？」

「土葬というか……上位の者以外の遺体は、共同の大きな穴に積み重ねられていくのが」

ダスト・ボックスは手を伸ばしてきたゾンビを2体まとめてなぎ払い、続けた。

「何百年経とうが、なぜか遺体が溢れることはない。聖ミリスの奇跡のひとつとされていた」

その平坦な声色からは、教団に忠誠を捧げた神殿騎士の心情は読み取れなかつた。

支えが崩れたかのようにバラバラと降りはじめたゾンビたちを、岩砲弾の連射で弾いていく。

上が墓場だなんて聞いたら、どうしても頭上が気になつてしまふ。

案の定、突然ズズンと音を立てたかと思うと、天井が抜け落ちた。

姫君を抱え、必死に飛び退いた俺たちの目の前に現れた、奇妙な物体。

大木の幹のようなそれは、節くれだつた太い蔓が絡み合いうねりながら、ずっと上方に伸びている。

上に向かつて広げた枝に大量の遺体を引っ掛け、根元は2～3メートルはあろうか。いや、ちよつと待て！　これは樹木なんかじゃない。

……人間の身体だ。手足を伸ばして糸のように縋り合わされた、昔は人間だったものの塊だ。

そう気付いたら、吐き気が込み上げた。

「キヤアッ！」

悲鳴にハツとして顔を上げれば、蔓に巻き取られた姫君が
太い幹の中に引き摺り込まれるところだつた。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／17

？

「ほかの入り口を探したほうがいいかもしねないぞ」

「同感だ」

剣を振るつていた騎士CとDが後退して領きあつた。

エリスを含めた5人は、もう小一時間は地面の亀裂から生えた蔓もどきとやり合つていた。

片腕サイズから人の胴体に近い太さまで、蔓なんだか触手なんだかわからない細長いものが、隙あらば巻きつこうとばかりにウネウネと動きつづける。

どれだけ斬つても、魔術で攻撃してみても、結局は余り変わらなかつた。

次から次に新たなものが伸びてきたり、枝分かれしたり、切れ端どうしで結合したりで、始末に負えない。

そもそも自分たちは魔物を成敗しにきてるわけではなく、一刻も早く下の階層に降りたいのだ。

残るふたりの騎士も、やがて剣を下ろした。

「ちつ！」

不機嫌を隠そうともしないエリスが、他のメンバーに倣つてその場を離れようとした時、蔓もどきが奇妙な動きを見せた。

ビクリと身をしならせると、怯えたように先を丸めてシユルシユルと亀裂の奥へ引っこ込んでいったのだ。

が、呆気にとられて眺めたのも数秒のこと。

エリスもすぐに背筋に怖気を感じ、警戒に動きを止めた。

一方で、屈強な4人の神殿騎士たちはヒツ……と喉の奥から声を漏らして地面にうずくまつた。腰が抜けたらしい。

得体の知れない、とてつもなく恐ろしいものが近付いてくる。

——迷宮の主かもしれない。

なものにも屈しないはずのエリート騎士は、経験したことのない不吉な気配に身を凍らせながら、地下迷宮に関わった己の運命を呪つた。

しかし、体がこわばつて、すでに逃げることすら叶わない。

もうなにも考えられな……

「あら」

絶体絶命の緊迫した空氣にポトリと落とされた、場違いな声。

騎士たちは残つた理性の端つこでエリスの反応を不審に思うものの、耐えがたい恐怖にすくんで顔を上げることができない。

「なにをしている？ 下層に降りるのはないのか？」

男の低い声だ。

「ええ、そうしたいのだけど。

どうしてこんな所にいるのよ？ それにヘルメットはかぶらないの？」

淡々と交わされる会話への疑問と、身をよじるほどの恐怖が騎士たちの中でせめぎ合う。

「石板で呼び出された。これで歩けば魔物が寄つてこない」

感情の読み取れない抑揚に乏しい口調で、しかしエリスの投げたふたつの問いに律儀に答える男。

目を覆う指の隙間からやつとのことで足元を覗けば、地面に黒いヘルメットと大ぶりの剣を置いてそのまましゃがみこむ、白っぽい人影があつた。

ドガツ

岩の碎ける音と地面を伝わる大きな衝撃に、恐怖を忘れて思わずのけぞつた騎士たちは、ようやく白い外套に身を包んだ銀髪の男の姿を視認した。

驚いたことに、男の手刀一撃で地面の亀裂は大きな穴に変わっていた。

驚きはすれど、彼らの腰は抜けたまま。
恐怖を克服したわけではない。

それどころか、いつそう恐ろしくなった。

?

(ナリス姫視点)

ここはどこかしら。

騎士様の背後に守られていたはずが、いつの間にか不思議な場所に来ていました。
寒くもなく暑くもなく、暗くも明るくもなく……静かな所です。
少し心細くなつてあたりを見回せば、青い鎧の背中が。

「騎士様！」

呼び掛けると振り返り、すぐにこちらへ駆け寄つてくれました。

わたくしを安心させるように、肩にそつと添えられた手。

鎧手甲のため冷たく硬い感触でしたが、それでも柔らかな労わりの気持ちが伝わつて
きます。

「……姫様、私が付いております。なにも心配はいりません。
おひとりにしてしまい、申しわけありませんでした」

ずっと足手まといになつていたわたくしなのに、こんなに優しい言葉を掛けていただけるなんて。

「一緒にいてくださるだけで、不安も吹き飛びました。ありがとうございます」心を込めて感謝を伝えれば、兜の面の隙間から覗く彼の瞳が真剣な色をたたえて……「どんな時でも、あなた様を忘れたことはありませんでした。

「ずっとずっと、お待ちしていたのです。……信じて……おりました」

そこでふと、彼の切なげな声の色と言葉に違和感をおぼえました。

赤いマントを着ておられないし、そういえば、神殿騎士の鎧は同じでも兜の形が違います。

あの、いつぶう変わったゴミバケツではありません。

「ダスト・ボックスさん……ではありませんね？」

騎士様は小首を傾げ、当たり前のように「はい」と答えます。

それを聞いても、なぜか怖いという気持ちは起こらず、それどころか温かいもので胸が満たされていくのを感じました。

心の中のどこかに息づく、もうひとりの自分が喜びに震えているようでした。

自分の意に関係なく、わたくしの口元に浮かんだ心からの笑み。

それに応えるように、彼はゆっくりと兜を脱きました。

思慕のこもつた眼差し、穏やかな微笑みを額縁のように彩る美しい緑の髪……。
思わず手を伸ばせば、緑の髪はサラリと指の間を流れました。

「……雪解けに芽吹いた若草のよう……」

わたくしの唇から、誰かが優しくつぶやき……

?

無尽蔵に補充されるゾンビを、延々と散らしつづける俺たち。
もはや機械的に身体を動かしているにすぎない。

ゾンビに心があろうが、たとえ“お父ちゃんお母ちゃん”と泣いたとしても、ひたすらに倒していくだけだ。

もとから死んでいる彼らを斬ろうが凍らせようが、これ以上は死によるもない。
その証拠に、バラバラになつたパーツがそこここで動いている。

腐った肉片になつたあとでも、蠢きつづけるのだろうか。

闇の中で、永遠に……？

……うつかり怖い考えに陥つてしまつた。

俺は頭を振つて、思考を散らす。が、一度湧きあがつた懸念は、すぐに頭をもたげて
きた。

それでも……もしかして、神撃魔術だつたら成仏させてやれるだろうか。

神殿騎士たちに頼んで……いや、それにしたつてこんな大量にいたら、帝級どころか神級じやないと追つ付かない気もする。

ミリス教の神官を束にして連れてきても、間に合わないだろう。つて、いかん、集中力が散漫になつてるらしい。

なんであれ、今生きている者が最優先なのは間違いない。

とにかく、中央の幹に取り込まれたナリス姫を救出するのが先だ。時間がたちすぎると、取り返しがつかなくなる。

彼女が中にいる以上、大きな魔術でこじ開けるなどの強硬手段にも出られない。

「そろそろ神撃魔術はどうですか？ アンデッド系相手なら、効きますよね？」

「ん、ああ……」

ダスト・ボックスの返事はなんとも煮え切らなかつた。

しかし振るわれる彼の剣に迷いはなく、いまだ疲れは見せていない。ひと振りで、数体まとめて斬り飛ばした。

「私は、聖墳墓の守り人の斬り込み隊長と呼ばれている……要は勢いと腕っぷし担当だ。とくに神撃魔術とはあまり相性が良くないらしく、努力しても中級がやつとだつた」思い返せば、レイスに神撃魔術を集中砲火していた時に、ナリス姫抱っこ係をさせら

れていた彼。

なるほど、そういう人選だつたか。

それでも一刀のもとに複数を切り捨てる彼の剣さばきは、たしかに見事だ。魔術はどうしても相性つてのがあるもんな。

「中級ならば上等です。俺は初級ですから」

ミリス教団の許可がないと、上は習得できない仕組みだ。よつて、魔法大学でも初級までしか教えられない。

まあ、これまで特に必要性も感じなかつたが。

「幹の部分の2～3人、いつぺんにやれますか？」

穴が開けば、そこから姫様を救い出せるかもしません」

また魔術ゾンビが落ちたらしく、火やら水やら岩やらいろいろ飛んでくるのを食い止めながら、こちらからも応戦する。

「そうだな。人ひとりぶんの穴くらいなら、おそらく」

「わかりました。一帯のゾンビたちを凍らせて足止めします。上にいるぶんについては、凍つた状態で落下してたら俺たちも危ないんで、そのままで。適宜対処しましょう」

?

幹の周囲をグルリと移動しながら、フロスト・ノヴァで凍らせていく。

あいかわらず上から降つてくる新手は、できるだけその都度凍らせておいた。元の位置まで戻ると、詠唱を始めたダスト・ボックスの背後についてその時を待つ。

「……愚かなる者に神罰を与えよ、『エクソシスレート』！」

彼の両手から光。

幹の一部に光の粒子がパアツと舞い広がつて……灰となつて地面に散つた。

今だ！

できた隙間から内部へ、足を残して身を乗り出せば、覚えのあるドレスがチラリと見えた。

すでに胴周りに圧迫を感じはじめた中、なんとか布地をたぐり寄せ、人ひとりの確かな質量を抱え込む。

抜けられるか？！

もがいてみれば、脚を掴まれる感触が。

「引っ張る！ 姫様を離すな！」

グイグイと容赦のない引きと、幹からの締め付け。

なるべく姫君に圧力をかけないよう、俺も必死に力を込めて耐えつづける。頭の血管切れそう、そう思つた時、

「ブチッ！」という音とともに解放された。

両肩を出した拍子に、幹の表皮を担つていたゾンビの身体がちぎれたらしい。

……俺の脳がブツツンしたんじやなくて良かつた。

「よし！ 撤退するぞっ」

すでに新たなゾンビに対処していたダスト・ボックスを尻目に、反応のない姫君の様子を確かめようと抱きなおした。

「……あ？」

姫君にはちゃんと息がある。多分気を失つてはいるだけだろう。しかし。
大切そうに胸に抱えるものが。
これつて。

「おい！ 早くしろ、なにしてる！」

珍しく余裕をなくした声に、俺もようやく立ちあがる。

とりあえず、今動いているぶんも凍らせようと思つたのだが、なんだか周囲の空気がおかしい。

動けるゾンビたちが、ビクビクそわそわ片隅に身を寄せはじめた。

「こら！ 行くぞ、この野郎！」

おかしいといえば、叫ぶダスト・ボックスも様子がおかしい。
「死にてえのか！ クソが!!」

もとから紳士的な男ではなかつたが、ここまでさんでもなかつたはず。
兜越しではあるが、必死の形相がわかる。

……血の気が引いてないか？ 目が血走ってないか？
え？ なに??

まさか、悪魔かなんかに取り憑かれたとか？

俺つてば、神撃魔術はシロウトに毛が生えた程度だぞ？

どうすんだよ、これ。

林立するゾンビの氷漬けのただ中で、気絶した姫君を腕に、隣には悪魔憑きの斬り込み隊長。

ダスト・ボックスが罵声とともに地団駄を踏んだ。

俺に、一体どうしろと？!

「ルーデウス!!」

途方にくれた俺のもとに、救いの天使が舞い降りた。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／18

？

(エリス視点)

通路のような洞をオルステッドと降りていく。

さつきの蔓もどきの撤退した跡が、そのまま道しるべとなつた。

「ヘルメットしないの？ 私もつらいんだけれど！」

「耐えられるなら問題あるまい。魔物の相手は面倒だろう」

ここまで魔物にさんざん手こずらされたのを思い出せば、悔しいけれど「フン！」と
しか返せない。

数分も進めば、行く手に開けた場所が見えてきた。

ああいう部屋にはたいていなにかが潜んでいる、これまでの経験でそう思った。

ぼんやり明かりが漏れているのも、光る魔物なんかがいるのかかもしれない。

私は、剣を握りなおした。

……あつ!!

「ルーデウス!!」

ちよつとぐらい距離があつても、私が彼を見分けられないはずはない。

首だけで振り返ったルーデウスに近づくにつれ、別れた時より汚れて疲れた顔をしているのに気付いた。

ついで、周囲の状況に呆気にとられる。

地面から生えたように凍りつくたくさんの歩行屍^{ゾンビ}、そして中央には気持ちの悪い大木のようなもの。

あの蔓もどきの根元だ、と咄嗟に思った。

「エリス……」

安堵の滲んだ嬉しそうな笑みを浮かべたルーデウスに、私も嬉しくなつて言葉を掛けようとしたところで

「うわあ～っ！」と叫んで飛びのく騎士の姿が。

そういうえば、彼と一緒に姿を消していた騎士もいたんだつけ……と思い出す。

反応が大袈裟な氣もするが、さつきまで一緒だつた神殿騎士たちもこんな感じだつたので、まあこんなものなんだろう。

ソイツを無視した私に一瞬目を丸くしたルーデウスは、私の背後に気付き、もつと目をまん丸にした。

「オルステッド様？」

たつぱり3秒は呆けた彼は、唐突に登場した物騒な男と、うずくまつた騎士を見比べて納得したようだつた。

「ゾンビたちがすっかり大人しくなりました。さすがです」

これは褒め言葉なのだろうか。さすがもなにも、この男はただ歩いてきただけだ。返答に困つたのかどうかは知らないが、オルステッドはなにも言わない。

ルーデウスは眉をハの字に下げて苦笑した。

「ちよつと……困つてたんで、助かりました」

彼を困らせていたものは、たぶん両腕に抱えられ目を閉じたままのナリス姫。そう、彼に近づく途中で私も気付いたけれど、この状況で嫉妬心から文句を言うわけにもいかなかつた。

狂犬といえども、それくらいの分別はあるのだ。

「で、お姫様はどうしたの？　なんでドクロなんか抱いてるわけ？」

「そこの中に取り込まれちゃつたのを、なんとか救い出したところなんだけど、正直どうなつたのかは……」

この頭蓋骨は……大事に抱きしめているから……例の騎士のものかも、と思つてゐる

そうか、ルーデウスの夢に現れたという緑髪のかわいそうな神殿騎士。
200年も待ちつづけた甲斐があつて……

「出会えたのかしら」

「だといいな……」

ふたりでしんみりと視線を交わしていたら、不機嫌な声が邪魔をした。

「で、俺はどうすればいい?」

?

「オルステッドがいなかつたら、ここへは降りて来られなかつたわ」

エリスの言葉を受けて、俺は改めて深々と頭を下げた。

「いや、ほんとうに、こんなところまでわざわざ来ていただいて……

ありがとうございました」

「……あいにくアレクがいなかつた」

うん。これはきっと

“もともと自分で来る気はなくて、出張^{でば}つてきたのは人手不足だつたに過ぎないのだ
から、礼を言うには及ばない。しかし、お前の役に立つたのならば良かつた”

ということなのだろう。

我ながらものすごい翻訳力だ。もはや超訳と呼んでいいかも。

「帰るか」

「はい」

良い子の返事をしたところで、ダスト・ボックスの存在を思い出した。いまだに、顔も上げられず微妙に震えている。

このままではちょっと気の毒だし、あんな重たそうな男を抱えて戻るわけにはいかない。

俺の腕は姫君だけで定員いっぱいなのだ。

「あの、オルステッド様、ヘルメットを……あれ、初めて見る大剣ですね」

彼の手にはお馴染みのヘルメットのほかに、見慣れない立派な剣があつた。

「『七星刀』……ある王家に代々伝わっていた祓い清めの魔道具だ。

倉庫にあつたのを思い出して、持ってきてみた。地下迷宮のことは知っていたからな

「祓い清めということは、ひよつとして神撃魔術みたいに使えるんですかね？」

例え、この迷宮に大量にいるアンデッドたちを成仏……いえ、死後に行くべき正しい場所に送る、というか

オルステッドばかりか、エリスまで理解不能な顔をした。

死後の世界という概念がないわけだから、俺の言わんとするところは通じないのも無理はない。

「えっと……完全に死んで、二度とさまよわないでいいようにできますか？」

「亡者たちは光に包まれて灰に帰す、と言われている。俺は使ったことはないがな。

ただし、マジックアイテムではなくて魔道具だ。大量に扱うならば、それなりの魔力は食うぞ」

「ここに来るまでスケルトンやらゾンビやら……数え切れないほど多くのアンデッドを破壊してきたんですが……俺にはどうしても……彼らに心や感情が残っているように思えて……だから、その……

せめてここから解放してやりたい、っていうか……ほんとうの意味で終わらせてやりたいって……」

自分でもよくわからないモヤモヤを、うまく説明するのは難しい。

言いよどんでいると、オルステッドが黙つて剣を突き出した。

駄々をこねる子どもに根負けした親のような顔をしている。

「ありがとうございます」

俺はナリス姫をそつと地面に下ろし、剣を受け取る。

重厚な見た目より、さらにズシリと重かつた。

?

おそらくは、この幹のようなのが地下迷宮の中心、迷宮主とか核とかつてやつだ。オルステッドのお陰ですっかり静かになつている幹に、渾身の力で剣を突き立てた。どうしようか。

般若心経でも唱えたいところだが、あいにくハンニヤハラミタのところしか知らない。

お疲れさまでした、安らかにお眠りください……

繰り返し念じながら、握った剣に魔力を注ぎ込んだ。

ズルズルと魔力が吸い込まれていくのがわかる。

この感じ、ナナホシの転移魔法陣を起動する時の感じに似ている。

そういえばこの剣も、『七星刀』だと言う。関連があるのかないのか……ないんだろうが、上手くできるもんだ。

最初のうちはそんなことを考える余裕もあつたが、魔力はどんどん奪われていく。

血を抜かれていくような感覚。

頭を閉じていても闇わらず、まぶたの裏に閃光が走りまわる。

頭がガンガンしてきた。

脚から力が抜けそうになる。

指先が冷たく痺れる。

ちよつとでも気を抜けば、剣の柄を握る手が解けそうだ。
あ……そろそろヤバいかも。

白髪コースはカンベン願いたい。

でも、もう少し、もう少しだけ……

朦朧としてきた脳裏に、人影がチラついた。
緑の髪の騎士だ……ひとりではない。

彼の隣に、小柄な誰かが寄り添っている。
そうか。

やつぱり会えたんだな。

安心したとたん、剣から手がずるりと離れた。

?

「注意はしたはずだ」

「……まことに……面白しだいもございません」

ただ今俺は、人生2度目のお姫様だつこの真つ最中だ。
するほうじやない、されるほうだね。

抵抗はした。でも、身体は重くて動かないし、余分な手間を掛けている弱みもある。
せめて背負ってくれと頼んだが、嫌がる俺の様子が面白かったのか、横抱きにして
「なるほど、これを『お姫様だつこ』と呼ぶのか」

と、なにやら感心している。いや、ホンマモンのお姫様、すぐそこにいるし。
いつそのこと気絶しとけば良かつた。

エリスの時と違つて、ヘタに意識がしつかりしてゐるぶん居たたまれなさがハンパな
い。

俺の心のダメージもさることながら、男ふたりが身を寄せるこの状態は、見せられる
人間のほうも精神的負荷が大きいことだろう。
申しわけない。

呪いのせいで人ととの接触が難しいオルステッド。

彼にとつて初めてのお姫様だつこというのなら、可憐なお姫様を抱かせてやりたかつ
たと心底思う。

そんなことを考える俺の顔のすぐ横に、黒いヘルメットがある。
黙々と歩くオルステッドは、面倒ごとに巻き込んだことついては最初にチクリと言つ

たきり。あとは無言だ。

もともと表情に乏しいが、今はフルフェイスのヘルメットに覆われて、余計になにを考えているのかわからない。

いきなりこんなところまで呼びつけられて。

来てみたら、自ら手を下す場面もなく、ほつといても別に大丈夫だつたんじやね？的な中途半端な状況で。

挙げ句わけわかんないことでゴネた部下が、みずから墓穴を掘つて飛び込んで。
そして尻ぬぐいのお姫様だつこ。↑イマココ

俺だつたら怒つてる。ついうか、普通の人間は怒るだろ、これ。
でも、うちの社長は俺なんかより、ずっと度量の大きな人だ。

だからきっと大丈夫。……大丈夫だよね……？

「なんだか空気が変わった気がするわ。不思議ね」

「たしかに陰気な感じはなくなつた。臭いはまだ残つてゐるがな」

ダスト・ボックスはトラウマレベルの恐怖から立派に復活し、今は再びナリス姫を抱えて歩いている。

なんでも、信仰者は形のないものに対する感受性……靈感的な感度が鋭く、オルステッドの呪いの影響が顕著に現れやすいとのこと。

無神経そうなダスト・ボックスの過剰反応が不思議だつたのだが、そのせいだつたわけだ。

聖墳墓の守り人の騎士は狂信者の集団だと、テレーズが言つていたのを思い出した。神父であるクリフがオルステッドにここまで強く反応しなかつたのは、彼の精神力ゆえか、頑固そうに見えて案外と柔軟な思考の持ち主なんだろう。

というわけで、そのダスト・ボックスが元気ということは魔物も元気なわけだが、少なくともアンデッド集団は光に包まれ灰になつて消滅した。

生き残つっていた魔物がたまに現れても、エリスが片つ端から斬り伏させて道中は平穀無事だつた。

俺たち3人が何時間も歩き回つたのが嘘のように、あつさりと上層階へ。

ショートカットのルートがあつたんだな。

ちなみに、エリスが見捨ててきた神殿騎士4人とは途中で合流できている。

ようやく精神的に持ち直して、恐る恐る亀裂の穴から降りて来たところだつたという。

行き違いにならなくて良かった。

?

(ナリス姫視点)

夢をみていました。

とても幸せな夢を。

探していたものを、見つけた。

迷子になつていた、もうひとりのわたくしを見つけてもらつた。

もう少し浸つていたい……そう思いながらも、まぶたはゆっくりと開いていきます。

最初に視界に飛び込んできたのは、青い鎧の肩と兜面。

良かつた、まだ目が覚めていなかつた、これは夢の続きなのね……
半分霞のかかつた頭でぼんやりと考えていると

「あ、気がつかれましたか！」

キビキビと歯切れのいい声に、夢心地だつた意識がはつきりしました。
ああ。

これは、ダスト・ボックスさんだ。

ゴミバケツのような兜に、首元に巻かれた赤いマント。

わたくしを抱えながら、歩いておられるうようです。

気を落ち着けるために、深呼吸を数回。

「すみません……また、ご迷惑をおかけして いたようですね」

「もう大丈夫ですよ。仲間と合流し、我々はもう間もなく地上に出られます。

ミコ様もすでに迷宮から抜けられて、今頃は教団本部にて安全に保護されておられる
はず。

どうぞご安心ください」

兜のせいで表情はよくわからないものの、声の調子から笑みを浮かべておられるとわ
かります。

ミコリスはご無事なのですね、ほんとうに良かつた。

改めて周りを見回せば、何人もの騎士様が周りを囲んで守つてくださつてているようで
す。

前を歩く鎧の肩の向こうには、鮮やかな赤色がチラチラと。きっとエリス様でしょ
う。

でも……？

「姫様、どうされましたか？」

「あの……ルーデウス様のお姿が見えないようですが……？」

「ああ、それは……ですね……？」

なにがあつたのでしょうか？

どんなに絶望的に思える状況でも、いつも余裕で対処してくださつたあの方が、まさ

か？

「先頭にいますよ。無事……は無事です」
含みのある表現が気になつたものの、言いづらそうなご様子に、それ以上は尋ねられませんでした。

「なんだか静かですね。」

「ここに最初に来た時のような、ザワザワした恐ろしさを感じません」

「ここに巢食つていたスケルトンやレイスやゾンビ……アンデッド系の魔物の存在がすっかり浄化されたためかと。」

迷宮の核がなくなつたので、ほかの魔物たちもしだいに数を減らしていくでしよう」「浄化……ですか？」

「彼らが光になつたのか、灰になつたのか、自分にはわかりかねますがね。」

「ただ、こここの陰気な空気がすっかり変わつたのは、実感としてわかります」
わたくしが夢をみている間に、迷宮で一体なにがあつたのでしょうか。

「あ、ここが地上への出口です。」

急な登りになりますので、これまで以上にしつかりとおつかまりください」

騎士様は、土で固められた縦穴に掛けられた繩ばしを、わたくしを抱いたまま器用に登つていかれました。

半日ぶりに触れた外気。

もうずいぶんと長い時間のように感じましたが、実際は1日も経っていないのです。抱かれてばかりいたわたくしでしたが、ようやく自分の足で立ち、歩くことができました。

「あ、そうだわ」

首先から取り出した指輪を、ネットクレスゴと地下迷宮への通路へ。
シャラン……

微かな音を残し、ふたつの指輪は鎖で繋がつたまま闇に消えていきました。
もう、わたくしには必要のないもの。

記憶の中のもうひとりのわたくしにも、そして緑の髪の騎士様にも必要はないでしょ
う。

だつて、お互いを見つけたのだから。
自分が、より自分らしくなった。

混ざりつ氣なしの、ほんとうの自分自身に。

疲れているはずなのに、不思議なほど爽快な気分で見上げると、

澄んだ夜空に、綺麗な月が浮かんでいました。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／19

?

「なぜ僕に知らせなかつた」

クリフが不機嫌だ。

日付も変わらうとする遅い時間のこと、今まで仕事だったのだろうと思えば、ちょっと申しわけない。

そんな彼の誠意に応えるために、自分の中での整理も兼ねて、地下であつたことを包み隠さず話していた。

「いや、ものすごい急展開だつたし。

“クリフ先輩がいてくれたら！”って思つたことは、正直何度もあつたんですよ？

でも道連れにしていたら、きっと今頃教団内で、いろいろ面倒なことになつてたはずです。

俺は部外者だから、少々やらかしたところでお目こぼしもされるでしようけど

最初から神撃魔術の遣い手がいればもつと楽だつたかもしれないが、いかんせんアンデッドの数が多すぎた。個人が対処できるレベルじゃない。

最終的には、魔道具がなければどうにもならなかつただろう。
まあ、すべては結果オーライと言うことで。

結局オルステッドは、俺を地上まで引っ張り出してくれたあと、闇に紛れるように
シャリーアに帰つてしまつた。

無様にも、足腰立たない状態で置いてけぼりを食らつた俺はと言うと。
「私に任せて！」と胸を張るエリスを必死に説き伏せて、神殿騎士ふたりに肩を貸しても
らい、正しくは引きずられながら教団本部に戻つた。

というか、本部への説明のため連行されたと言うべきだろう。

移動中、神殿騎士たちの生ぬるい視線、さらにはナリス姫からの優しい労りの言葉に、
俺のなげなしの男の矜持がゴリゴリ削られた。

今回はマジで口クなことがない。つくづくミリスとの相性が悪いような気がする。

そして今いるのが、はからずも馴染みとなつてしまつた回復棟のベッドの上だ。

この感じなら、ひと晩寝たらなんとか自力で歩けるくらいにはなつてゐると思う。

教皇とは少しだけ話したが、俺が椅子にまつすぐ座つていられなかつたために、事情

聴取は明日に持ち越しとなつた。

ナリス姫も、念のため医師の診断を受けたあと、今頃は貴賓室のあの天蓋付きベッド
で休んでいるだろう。

「おそらく明日は、根掘り葉掘り聞き出された挙げ句、地下迷宮の存在ごとすべてを秘匿するよう迫られる。

神子と姫君が行方不明になつたこと自体、限られた人間しか知らない。

さいわい半日程度で戻られだし、今後も公表されることはないだろう。

だが奇跡の光のほうは、町中でけつこうな騒ぎになつていていたから、隠すのは無理だな」

「奇跡の光？」

なんじや、そりや。

「さつきお前が言つていた“七星刀”的淨化の光だ。

日没後の周囲がすっかり暗くなつた頃、神聖共同墓地から真つ白い光が吹き出して天に刺さつたと、市民から多数の目撃情報が寄せられたんだ。

その後もしばらくキラキラした粒子が舞つて、あたり一面に降り注いだそうだ。

僕も見に行つたが、あれは灰だつたな。

ルーデウスがやつた“淨化”は、神級の神撃魔術に相当する威力だつたと考へてい
る

「……地上ではそんなことになつてたんですか。どおりで魔力をごつそり持つていかれ
るはずだ」

その光もきっと、聖ミリスの起こした奇跡だとなんとか、ミリス教団の権威づけに

利用されることになるのだろう。

あのあと地下迷宮内の空気が軽くなり、靈感なんぞはない俺だが、彼らの魂だか残留思念だかは残つていないと感じた。

教皇の言うところの生命の“泉”に戻れたのだろうか。それともただ消滅したのか。
「? なんだ? 浮かない顔だな」

「俺のしたこと……浄化の剣を使つたのは、正しかつたんでしょうか?

ひよつとして、自己満足の余計なお世話だつたのかも……」

俺の言葉の真意を探るようにこちらに視線を向けたクリフが、おもむろに口を開いた。

「……僕や僕の大事な人たちが本来の姿を失つてしまつていたとしたら、終わらせてもらえたことを喜ぶだろう。

そしてそれが教団の抱える負の側面の犠牲者ならば、死後も縛り付けるシガラミから解き放つてやってほしいと……思う」

一度死んで転生した俺すらわからないんだから、考えても答えは出ない。

「ルーデウス、お前が来るときさまざまなものが変化する。前回もそう感じたが、今回はもつと影響は大きい。

ミリス教団に由緒があり、権威があるのはいい。しかし同時に硬直し、停滞している

のも事実だ。

無理矢理にでも、風穴を開けてくれたことに感謝する」

前回と同じく、俺はミリス教団を引つ搔き回しただけだ。

精一杯の浅知恵を巡らせ、自分がその場を切り抜けるために足搔いた。
もし良いほうへ変化すると言うのなら、教団に関わる多くの人間がもともと改善する力を持つていたということだろう。

暗く汚い部分からも目を逸らさない。そんなクリフの搖るぎのない誠実さのほうが、明日のミリス教にとつての僥倖だと思う。

?

教皇との面談、というか尋問は、正直かなり辛かつた。噂の異端審問もかくや、といつた感じだ。

本来なら関わらなくてもいい面倒ごとに巻き込まれた俺。

大きな報酬が約束されているわけでもないのに、身体を張つて頑張つたのだ。
オルステツド関連や、『聖墳墓の守り人』^{アナスタシア・キープ}の面々の立場を悪くする恐れのあるところは少しほかさせてもらひながらも、教団の未来のためにと、聞かれたことにはできるだけありのままに答えた。

昨夜のクリフからの言葉を受けての、俺なりの誠意だ。

なのに、この仕打ち。
“ありのまま”を言いすぎたせいかも知れないが。認めたくない部分も多いだろうからな。

「ご協力には心から感謝しているのです。今後のご発展と幸いをお祈りしております」と教皇スマイルで送り出してくれた。

地下迷宮はどうするのか、墓地はあるのままなのか。

そこまでは教えてくれなかつたが、もう俺には関係のないことだ。

まだ怠さは残っているものの、体調はそう悪くない。

たつた今教皇にHPを減らされたが、それでもなお余裕がある。

実は昨晚、エリス・パワーをちょっとだけチャージさせてもらつたのだ。

あれからクリフと入れ違いのように、沐浴を済ませてきたというエリスが戻つてき

た。

宿に帰すには遅い時間、けれど部屋にベッドは1台きり。

そうなれば、やむを得ない。

そう、仕方なかつたのだ。

目立つた汚れを拭つて借りた寝衣に着替えただけの俺が、ホコホコと良い匂いをさせたエリスを汚すのは気が引けたのだが。

それ以上にエリスが優しかったので、甘えさせてもらうことにした。

うつかり下半身にオーバーパーチャージされたらどうしようと思つたが大丈夫だつた。ちよつと複雑な気分。

引き締まつた腕を枕に、鍛えられた大胸筋を豊かに覆う極上の感触に顔をくつづけて。

あまりの心地良さに、すぐに眠り込んでしまつたのが残念無念というところだ。

でも久々に、幸せな満ち足りた眠りだつた。

「ルーデウス！」

エリスだ。廊下で待つていてくれたらしい。

「終わつたのね！ これからどうするの？」

「ミコさんと姫君に挨拶して……ああ、そうだ。テレーズさんや騎士たちにも声をかけておくか」

明り採りの窓からの光を、エリスの髪が華やかに照り返している。

「？ どうしたのよ、ひよつとして体調悪い？」

うつかり視線を奪われ、動きが止まつてたらしい。

顔を寄せて俺を覗き込んだ彼女の白い頬に、長いまつ毛が影を落とした。

「いや……綺麗だなって思つ」

バシイツ!!

突然の衝撃で吹っ飛びかけたところを、腕をつかんで引き戻される。
……なんだ、なんだ？

俺をつかんでいられないほうの手で、赤面して口元を抑えるエリスがいた。

まだ万全の回復ではない。

ヨロケる俺の腕をがつちりホールドしなおした彼女は、無言のまま足早に歩きはじめたのだった。

?

「なんだか、いつも増してラブラブですねっ」

言われて気付いたが、腕を絡めたままナリス姫の部屋に入ってしまった。

控えの間にいたのが見知らぬ神殿騎士だつたせいで、それに気をとられて忘れていたらしい。

「これは失礼を」

すぐに腕を外したものの、ミコさんはニコニコのまま。

「寄り添つておられるのもそうですが、おふたりの間の空気が3割増しにお熱いですよ」
バレバレだ。

昨日あんなことがあつたというのに、教皇のほうの用事が終わる頃合いに合わせて、ミコさんはナリス姫の部屋で待つていてくれていた。

俺はいつもの窓際の席へ。

エリスは今度も座るのを断つて、戸口に立つた。

「ミコリスもナリス姫様も、昨日は大変な目にあわれましたね。

まずはご無事で良かった、そしてお元気そうでなによりです」

彼女らの普段の暮らしを思うに、いきなり暗闇に落とされた心細さや、魔物との切つた張つたはさぞ恐ろしかつただろう。

それでも今、ふたりは日差しの中で穏やかに微笑んでいる。
女性つて、強いよな。

エリスもそうだ。シルフィイもロキシーも。

弱さも醜さも隔てなく、柔らかにふんわり包み込む、そんなしなやかな強さだ。

「ルーデウス様こそ、昨日は倒れられてしまつたとか。

あのたくさんの氣の毒な方々を救つてくださつたこと、ミリス教団の人間として心から感謝しています」

「……救えた、のでしょうか」

「はい。彼らはたしかに救われたのです。私にはわかります」

目の奥に俺の迷いを見て取ったに違いないミコさんからの、揺るぎない言葉だつた。
……そうか。救われたのか。良かつた。

「ありがとうございます」

俺自身も救われた気分だつた。

なぜ俺が礼を言うのかと不思議そうに首をかしげたミリス姫が、改めてこちらに向き直つた。

なんだか彼女は、まとう雰囲気が少し変わつたようと思う。

「ルーデウス様には、なにからなにまでお世話になりました。

心を碎いて守つていただきましたし、なんども助けていただきました。

恐ろしい思いもしましたが、今は本当の自分を見つけたような、生まれ変わつたような……そんな気分なのです。

おそらくあの病気も、もう二度と出ないとと思ひます」

結局のところ、憑依だつたのか転生者なのかよくわからないままではあるが、きつとこれで良かつたのだろう。

「ナリス姫様はこれから、どうされるんですか？」

「せっかく親しくなれたミコリスとお別れするのは寂しいですが、また2年かけて帰国して……もし望まれるなら結婚をして、王族としての務めを果たすか……」

「そうですね。識字率向上政策を進めるために、子どもたちへの本の普及活動にも携われたら、と」

「!! 子ども向けの本?!」

突然食いついた俺に目を見張る姫君に、俺は勢い込んでルイジエルドの絵本の話をす
る。

「嬉しいわ。これからもルーデウス様と繋がっていられるのですね」

コロコロと笑うナリス姫に、こんなに明るく笑う人だつたつける驚いた。

なぜかジト目のエリスが視界の端に入つて、ちょっとこわい。

?

教団本部を出る前に、テレーズを呼び出してもらつた。

一連の出来事の責任を被せる形になつてしまつたので心配だつたが、部下たちを引き連れて例の中庭に来てくれた。

思いのほかスッキリした顔つきをしていたことに安心する。

「表沙汰にできない事情もあつて、処分は思つたより軽くて済みそうだ。

ただ、私はこれを機に現場から退くことを決めたんだ。

騎士養成機関の教官への異動願いが受理されたよ。

神子様とは、ご本人が望んでくださったお陰で、交流を続けることはできるようになつた。

部下たちは3日間の職務停止ののち、これからも変わりなく神子様を守つてくれる」「それはなによりです。ちょっと責任感じてたんで、俺も嬉しいです」
地下に引きずり込んだの、俺だしな。

「君がなぜ責任を感じる？ もともと巻き込んでしまつたのは我々のほうだ」「なんというか……ミリスでトラブル・メーカーになつてる気がして」

「まあ、それは違ひない。いつもはこんなに頻発して事件は起こらないんだ。

今回のことでの我々も、教団の体質について思うところもあるのだけれど……それは時間をかけて、それぞれの中で折り合いをつけていくことになるだろう」
複雑そうな表情から一変、吹っ切れたようにテレーズは笑つた。

お、赤マント騎士の斬り込み隊長だ。

「ダスト・ボックスさん、俺たちそれなりに良いコンビでしたね」

「……そうだな。だが、もうあんなのは二度とごめんだ」

同感です、と笑つて受け流す。

「それでは、皆さんのが活躍をお祈りしています」

「じゃあ元気でね！」

「はっ！」

エリスと聖墳墓の守り人の騎士の一部に、主従のような奇妙な関係ができるているような気がする。

俺とダスト・ボックスのように、戦いの中で結ばれた絆なのだろうか？

そうして俺たちは、ミリス教団本部とミリス神聖国を後にした。

ミリシオン出張記／姫ものがたり／20

？

「……やけに冷えるな」

事務所の地下に戻ってきての第一声がこれだつた。

今、季節は冬だ。

シャリーラを出発した日はポカポカ陽気だつたし、ミリシオンは温暖だつたから忘れてた。

「もしかしたら、雪でも降つてるかもしれないわね」

エリスの吐く息が白い。

「まあ、冷たくても空気が澄んではるのはいいことだよな。

地下迷宮の腐臭が、ずっと鼻の奥に残つててさ」

大きく吸いこんだ清浄な空気が、ひんやりと肺に染みいる……はずが。

「……うつ」

「な……なん……？」

えずいた。

まさか、毒か……？ 一瞬のうちに異様な匂いに取り巻かれていた。

俺たちが留守にしていたあいだに、事務所でなにがあったのか？ つてか、社長はどうした？

突然のことにも混乱する俺の隣では、エリスも顔色を変えて両手で口元を押さえている。

それを見て我に返った。窓のない地下は危険だ。

込み上げてくるものを必死に押さえ、めずらしく狼狽える彼女の腕をつかんでミリス向け転移魔法陣の小部屋を飛び出した。

「……タ……ス……ケ……」

1階へ続く階段へとエリスの背中を押した時、ずらりと並ぶ各地へのドアのひとつから、微かに声が漏れた。

「エリスは先に行つて、オルステッドの様子を確かめてくれ！」

「俺もすぐ上がつてくから、絶対こっちには来るなよ！」

「え？ ちよつとルーデ……おえつぶ」

火事場に飛び込んでいく消防士よろしく、決死の覚悟で俺はとつて返した。
魔大陸と繋がる部屋の扉だ。

誰の声か考えるまでもなく、出入りするのはアレクぐらいだろう。

中に入ると同時に、これまでとは比べものにならない濃度の毒ガス（？）がモワリと押し寄せた。

「ここが発生源か。

ミリスの地下迷宮は死臭や腐臭だつたが、これはドブのような……いや、まるで酔払いのゲ○のような……

うえつ、涙が出てきた。

ほんのり光を放つ魔法陣の真ん中から、手首が生えていた。

引つ張りあげたいところだが、正体も確かめないままに手をつかむのは避けたい。

「……アレクか？ どうした？」

魔術で自分の周りに風を起こして匂いを散らしつつ、恐る恐る転移魔法陣に呼びかけてみた。

本当は、口を開けるのも嫌だ。ドドメ色した空気が入つてくる気がする。

指先がピクリと動いたかと思うと魔法陣がボワッと輝き、その中心から黒髪の若い男がゆらりと全身を現した。

「……っ！」

俺のほうに倒れかかってくるアレクから全力で飛び退くと、ゲフツとかなんとか言いながらその身体が床に転がつた。

見る影もなくボロボロの姿だった。

俺の知る限り、この世界で5本の指に入る強さを誇る、北神カールマンⅢ世アレキサンダー・ライバツクが。

不死魔王の血を引くアレクは、光のない瞳で俺を見上げた。

?

「遅かつたじやない。何してたのよ！」

オルステツドの書斎には寒風が吹きすぎ、俺が貼った“報連相”的標語がはためいている。

エリスが窓を開けまくつたんだな。

社長本人は髪先を風に靡かせながら、平然と書類に目を通していた。

「汚れもの洗つたり、地下の空気を入れ替えたりしてたからさ」

念のため、風魔術で部屋の空気を一新させてから窓を閉めた。
やつぱりというか、外には雪が積もっている。寒いはずだよ。

この部屋にたどり着くまでに俺がやつたこと。

不快な臭気を放つ粘液にまみれたアレクを丸洗いして乾かし、地下の転移小部屋にそれぞれ風を入れて、さらに受付のエルフ子ちゃんの無事を確認。

シャリーアに戻った直後から、ノンストップで大活躍の大忙しだ。

「暖炉に火入れますね」

腕を組んで仁王立つエリスに見守られつつ、ちよこちよこ部屋を整えた俺は、ようやく人心地ついて腰を下ろした。

アレクは長椅子の背にグンナリもたれ、めずらしく疲労困憊の様子だ。

「……お姫様の……せいなんだ」

不貞腐れたような口調でアレクがこぼす。

“アンタのせいだつたのね！”と顔にデカデカと書いてあるエリスからの、無言の圧力に耐えかねたのだろう。

彼は魔大陸に出張していた。正確には、魔王ケブラー・カブラーのところへ。

ケブラー・カブラー。

かつてオルステッドに要注意と言わしめた、あの不快魔王だ。

球体状の身体、そこに開いたいくつもの穴からゲ○の匂いがするという、不快にもほどがある魔王だ。

その娘である“不快姫（仮名）”が婚姻を前にして、横恋慕するほかの男に攫われた

！

……とかなんとか。

球体だろうがゲ〇だろうが、生命体である以上繁殖もするだろうから、娘がいてもおかしくない。

そして魔大陸の魔族は、俺たち人族の常識や理解を超越した生き物だし、球体ゲ〇つ子が好みの男もきっと存在すると思う。

俺たちだつて別に慈善事業をしているわけじやなく、横恋慕でも不倫でも好きにやつてくれ、と言いたいところなのだが。

そうはいかないのが、我がオルステッド・コーポレーションの業務なわけで。この事件が部族間の諍いへ、やがて魔大陸の一地方を巻き込んだ大暴動へと繋がり、ゆくゆくは……ということで、誘拐された姫君を救出し、事態を收拾しに向かつたのがアレクだつた。

俺のお姫様騒ぎでオルステッドが思い出したらしいから、アレクからすればトバツチリと言つていい。

さつき彼をザブザブ洗うあいだに、大体の事情は聞かせてもらつた。
ものすごく同情した。だが、変わつてやりたいとは絶対に思わない。

颯爽と現れて自分を救つてくれたアレクに、球体ゲ〇つ子姫様が一目惚れし、ずいづい迫つてきたそうだ。

あなたに私のすべてをあげる！とか、私を攫つて一緒に逃げて！とか。

こけつまろびつしながら、命からがら帰つてきたらしい。

俺は思つた。ミリスに呼ばれてて、ほんとーにつ！良かつた。

いろいろあつて大変だつたけれど、アレクに比べれば天国と言つていい。ナリス姫は美人で優しかつたし、ちゃんとお姫様だつたし。

「でも、さすがはアレク。解決したうえ、お姫様のハートまで射止めちゃつたわけですよね」

親父さんに似て、目鼻立ちクツキリのイケメンだもんな。魔族基準ならわからんが。お疲れ様、と心を込めて肩を揉みほぐしてやつてたら、なぜかエリスがもの言いたげに俺のほうをジトつと見ていた。

「……なに？ エリス？」

「ルーデウスだつて……いや、やつぱりいい。教えないわ」

……変なヤツ。

？

「ああ、そういえば。傭兵团のリシオン支部長が、社長にくれぐれもよろしくと言つてましたよ」

教団から謝礼金という名の口止め料をもらつたんで、帰りに傭兵团事務所に顔を出し

て、酒と食べ物をしこたま差し入れてきた。

俺のことですら、実物に会えたと喜んでくれた彼らだ。

伝説級の龍神の姿をヘルメット越しであつても目にした団員たちの感激は、想像するに余りある。

ていうか、出入りの際、わざわざ挨拶でもしたのだろうな。案外とこからへん、律儀だつたりするのだ。

「結局、あの地下迷宮の大量のアンデッドたちは皆、ミリス教信者の成れの果てだつたんでしようか」

「ミリシオンの地下迷宮は、もともとは第二次人魔大戦後……ラプラスが分裂した爆発で巨大陸が割れた時、衝撃で陥没したものだ。

さまままな民間信仰が各地に残っていた中で、ミリス教団が布教活動の掃き溜めのようを使つていた。

異端審問やら勢力争いやらで、その時々のミリス教に都合の悪い人間を収監する場所にしていたらしい」

ミリス教団はやつぱりかなりエグい集団だ。

数千年にわたつて邪魔な人間を地下に落としていつたんなら、犠牲者の数はおそらく万人単位。それにプラスして、墓場から供給される新鮮な遺体もある。

アンデッドに賞味期間だか消費期限だかがあるのか不明だし、ひょっとしたら入れ替わりもあつたかも知れないが。

それでも、どれほどいたのか想像がつかない。

今後は新たな犠牲者が送り込まれることはない、と信じたい。

「とりあえず、数日うちに報告書にまとめて提出します。

ミリス神聖国とミリス教団に、多少なりとも貸しを作れたなんらいいですが。なにかあつた時に、融通してくれる国が多いに越したことはありませんし」

「そうだな。」苦労だった

少しも労いの意の感じられない無表情な顔と声で、オルステッドが言った。
でもまあ、満足はしてくれているんだろう。

「アレク！ ケブラーカブラーとお姫様も、きっと有事の時には馳せ参じてくれますよ」

「いや、それは……」

顔を引き攣らせたアレクをそのままに、俺たちは社長に頭を下げて事務所を後にした。

？

(エリス視点)

冷たい風にブルリと身体が震えたけれど、それがかえつて心地いい。無味無臭の空気のありがたさがわかる、この数日間だつた。

「エリス、まだ吐き気が残つてるのか？」

深呼吸を繰り返していたら、ルーデウスが心配そうに眉を寄せた。

「少しね。でも大丈夫よ。家に着く頃にはおさまつてるとと思うわ」

答えたものの、彼はまだ難しい顔をしてなにやら考えている。

なんなのよ。

「……ひょつとして、子どもができちやつた……つてことはないよな？」

「バカね、違うわよ！」

原因ははつきりしてゐるじやない。アレクの悪臭のせいでしょ！」

寝ぼけたことを抜かす夫に1発パンチをお見舞いしたはいいけれど、自分でもちよつと自信がなくなつてきた。

つわり……じゃないわよね？ アルスの時だつて軽かつたし。

吹つ飛ばされたルーデウスは「そうか……残念」とつぶやきながら、慣れた様子でむつくり起きあがり雪を払つた。

吐き気はともかく、困つたのは足元だ。

雪が積もるなんて知つてたら、ブーツで来るんだつた。

意識的に足先への血流を増やせばいいんだから、しもやけや凍傷とは無縁だけれど、イヤなものはイヤなのだ。

子どものようにサンダルの爪先で雪をつづいていたら、フツと身体が傾いた。

「じゃあ帰ろうか、お姫様」

ルーデウスが私を横抱きにして、すました顔で歩き出す。

男のプライドなのか、『お姫様だっこ』されたことにこだわっていた彼だから、多分やり返す機会をうかがっていたのだろう。

そう思えば、かわいらしくて微笑ましい。ついニヤけてしまって、顔筋に力を入れた。

「なあ」

「なに?」

「今度、オルステッドにも正しい『お姫様だっこ』させてやつてくれないか?」

「いやよ!」

ルーデウスの横顔を眺めながら、しばらくは大人しく抱っこを堪能していよう。
あ、そうだわ。

「ねえ、肩車やつて」

「……太もも舐めてもいいなら」

「それもお断り!」

つまらないことをあれこれ言い合ううちに、家族……私たちのお姫様王子様たちが待っている自宅はもうすぐそこだ。

夫とふたりの、ミリシオン出張が終わる。

?

(おまけ)

「……なんのまねだ、ルーデウス」

「さあ、さあ！ 本人の了承も得ているんで、どうぞご遠慮なく！」

腕に抱いたララを、オルステッドに突きつけた。

押し付けられるままララを受け取つたオルステッドは、ギロリと俺を睨んだ。視線だけで象も殺せそうな凶悪なオーラを放つ龍神に、彼を見慣れた俺でも背筋がうすら寒い。

一方でララは、まったくの平常運転でケロリとしている。

やはり、大物だ。救世主ララは、俺のような一般ピープルとは肝の座り方が違うのだろう。

自分の矮小さにイジケそうになりながらも、なんとか踏み留まる。俺には、大切な使命があるのでから。

「オルステッド様！ それが“お姫様だっこ”です！」

本当の、ホンマモンの“お姫様だっこ”なのです！」

問題は、長身のオルステッドに対してララの身体が小さすぎるせいで、おつかなびつくり横抱きにした新米パパの図にしか見えないことだな。いや、でも、なんでも勢いつて大切だ。

言い切つてしまえば、勝ちなのだ。

「どうでしよう、いいものでしよう？」

腕の中の温もり！ 大切なお姫様的存在の確かな重み！

無防備に身体を預けてくれる、相手からの信頼の証!!

なにを言つてゐのか自分でもわけがわからないが、とりあえず某ジャ○ネットTV通販番組のごとく置みかける。

「む……そうか。わかつた」

うむ、わかつてくれたか。

「それで？」と、オルステッド。

「え？」

「“お姫様だっこ”は理解した。それから？」

「はい？」

「……それだけか？」

「はい」

黙つてララを俺に返したオルステツドは、無言のまま眉間を揉んでいる。
あ、これはちよつとマズいかも。

「え、えっと、報告書をですね、お持ちしたんでした」

返事がない。

「……ここに置いておきます。

急ぎではないんで、時間のある時にでも目を通しておいてくださいね」

「……」

とつとと帰ろう。

「では、失礼します。

ララ、オルステツド様にご挨拶は？」

「ばいばい」

「……ああ、またな」

なんとか返事が返ってきた。良かつた。

外出したら、また雪がちらつきだした。

「寒くないか？」

「パパ、ゆきだるまつくりう」

どこの世界でも、子どもは雪遊びが大好きだ。

「そうだな……せつかくだから、急いで帰つてみんなで遊ぼうか」

「うん！」

俺を見上げるララのピンク色のほっぺたに、雪の粒が乗つてゆっくり溶けていった。

(了)